

兒島高德

佐々木信  
鳳田井信  
高等坂ス

福山城戰

三石城

敵共、縱數ヲ盡シテ攻上ルトモ、何程ノ事カ有ヘキト、サマテノ仰天モナカリケルニ、同十一日、天正本作三十一日備前國住人、兒島三郎高德カ許ヨリ、早馬ヲ立テ申ケルハ、去月二十六日當國住人佐々木三郎左衛門尉信胤薩摩守長胤子、同田井新左衛門尉信高等田、金勝院本作三田中下位之細川卿律師定禪カ語ヒテ得テ、備中國ニ打越、福山城ニ楯籠ル間、彼國ノ目代、先手勢計ヲ以合戰ヲ致トイヘトモ、國中ノ勢催促ニ從ハス、無勢ナルニ依テ引退ク刻、朝敵勝ニ乘シ間、目代カ勢數百人討死畢、其翌日ニ天正本作其日、金勝院本云、ソレヨリ日々ニ云々小坂、河村、庄、眞壁北條家、南都本作三章壁、陶山、成合、那須、市川以下、悉朝敵ニ馳加ハル間、程ナク其勢三千餘騎ニ及ヘリ、爰ニ備前國地頭御家人等、吉備津宮ニ馳集リテ、朝敵ヲ相待處ニ、淺山備後守北條家、南都名條就、天正本作陶山備中守高直、備後國守護職ヲ賜テ下向スル間、其勢ヲ合テ、同二十八日福山ニ押寄テ攻戰シ日、高德カ一族等大手ヲ攻破テ、已ニ城中ニ打入刻、野心ノ國人等、忽ニ翻テ御方ヲ射ル間、目代淨智カ子息七條辨房、小周防大貳房金勝院本無三小字、藤井六郎名重樹、佐井七郎金勝院本云、名公區、以下三十餘人、搦手ニ於テ討レ候畢、天正本云、目代子息三人、若黨三十餘人討死、云云、官軍遂ニ戰負テ、備前國ニ引退、三石城ニ楯籠ル處ニ、當國守護松田十郎盛朝、大田判官全職大田、西源院本作朝田、高津入道淨源西源院本作道源、北條家、南都本作淨圓、金勝院本、作高津、上總入、道淨元、當國ニ下著シテ、已ニ御方ニ加ハル間、又三石ヨリ國中ヘ引返シ、和氣宿ニ

熊山城

丹波ノ叛徒

赤松則村

山陰山陽ノ叛徒

於テ合戰ヲ致ス西源院本、此下至、據熊山城、不載、疑脫文、刻、松田十郎敵ニ屬スル間、官軍數十人討レテ、熊山城ニ引籠ル、其夜當國住人内藤彌二郎内藤、今川家、北條家、南都本、作内原、毛利家、金勝院、天正本、作内原内藤、御方ノ陣ニ在ナカラ、竊ニ敵ヲ城中ヘ引入攻劫ス間、諸卒悉行方ヲ知ス、没落シ候畢、高德カ一族等、此時僅ニ死ヲ免ル者、身ヲ山林ニ隱シ、討手ノ下向ヲ相待候、若早速ニ御勢ヲ下サレスハ、西國ノ亂御大事ニ及ヘシトソ申タリケル、兩日ノ早馬天聽ヲ駭シケレハ、コハ如何スヘキト、周章有ケル處ニ、又翌日按、十二月十二日、午刻ニ、丹波國ヨリ碓井丹波守盛景西源院本、作通俊、下位之、早馬ヲ立テ申ケルハ、去十二月十九日夜去十二月、北條家、南都、天正本、作三十一日、按、本文十一月十二日註述、何逆載二十九日之事、然則、云十九日者非是、若以諸異本作十一月爲是、則前所謂讚岐備前之難、十一月廿六日以後事而註進先至、丹波者隣京、何有十一月十九日之事而註進延滯、後子讚岐備前之理也、亦不必信、因意之、丹波之難者、蓋十二月上旬之事、至二十二日上言也、然則所當國住人久下彌三郎時重、北條家、南都本、作三時重、而第九卷作三時重、相繼、可合見、波々伯部次郎左衛門尉、中澤三郎入道金勝院本云、號玄市、等ヲ相語ヒテ、守護ノ館ヘ押寄間、防戰フトイヘトモ、却戰不慮ニ起ルニ依テ、御方戰破レテ、遂ニ攝津ヘ引退、然リトイヘトモ、猶他ノ力ヲ勦テ其恥ヲ雪ン爲ニ、使者ヲ赤松入道ニ通シテ合力ヲ請ル處ニ、圓心野心ヲ挾ムカ、返答ニモ及ハス、剩將軍ノ御教書ト號シ、國中ノ勢ヲ相催由風聞人口ニアリ、加之、但馬丹波ノ朝敵等、備前備中ノ勢ヲ待、同時ニ山陰山陽ノ兩道ヨリ、攻上ルヘキ由承リ及候、御用心有ヘシトソ告タリケ



ル、又其日酉刻ニ能登國石動山ノ衆徒ノ中ヨリ、使者ヲ立テ申ケルハ、去月二十七日、越中守護普門藏人利清并井上金勝院、天正本、無澤字、金勝院本、作井口、野尻、長澤毛利家、天正本、無澤字、金勝院本、作仲澤、西源院本、不載、長澤、波多野ノ者共、將軍ノ御教書ヲ以テ、兩國ノ勢ヲ聚叛逆ヲ企ル間、國司中院少將定清少將、天正本、要害ニ就テ當山ニ楯籠ラル、處ニ、今月十二日按、前日、十二月十二日、能登龍使本作、中將、要害ニ就テ當山ニ楯籠ラル、處ニ、今月十二日告、變、而今云、十二日能登合戰之日所、能至、蓋十字衍乎、彼逆徒等、雲霞ノ勢ヲ以テ押寄ル間、衆徒等義卒ニ與シ、身命ヲ輕ストイヘトモ、一陣全キ事ヲ得スシテ、遂ニ定清戰場ニ於テ命ヲ隕サル今川家、北條家、

南都本云、定清自害、云云、寺院悉兵火ノ爲ニ回祿セシメ畢、是ヨリ逆徒彌猛威ヲ振テ、近日已ニ京都ニ攻上ラント仕候、急キ御勢ヲ下サルヘシト申ケル、是ノミナラス、加賀富樫介、越前ニ尾張守高經ノ家人、伊豫ニ河野對馬入道按、對馬守通治、六波羅亡時不知其所、終蓋六波羅滅後屬尊氏乎、然無所據考、長門ニ厚東ノ一族、安藝ニ熊谷天正本載、武田小早川、周防ニ大内介カ一類、備後ニ江田、弘澤、宮三善、出雲ニ富田、伯耆ニ波多野、因幡ニ矢部、小幡、此外五畿七道四海九州、殘所ナク起ルト聞ヘシカハ、主上ヲ始進ラセテ、公家被官ノ人人、一人トシテ肝ヲ消サスト云事ナシ、其比如何ナル嗚呼ノ者カシタリケン、内裏陽明門ノ扉ニ陽明門、毛利家、天正本、作承明門、未、知、誤作承明院、一首ノ狂歌ヲ書タリケル、

寶王ノ横言ニナル世ノ中ハ上ヲ下ヘソ反シタリケル

四夷八蠻起リ合テ、急ヲ告ル事際ナカリケレハ、西他九郎ヲ今川家、毛利家、北條家、金勝院、南都、天正本、西他作、引地、金勝院本云、名義、勅使ニシテ、新田義貞猶道ニテ、敵ヲ支ントテ、尾張國ニ居ラレタリケル、急キ先上洛スヘシトソ召レケル、西他九郎龍馬ヲ賜リテ、早馬ニ打ケルカ、此馬ニテハ四五日ノ道ヲモ一日ニハ、輒ク打歸ンスラント思ヒケルニ合テ、ケニモ十二月十九日辰刻ニ京ヲ立テ、其日午刻ニ、近江國愛知川宿ニソ著タリケル、彼龍馬俄ニ病出シテ、應テ死ケルコソ不思議ナレ、西他乗替ニ乗替乘替、日ヲ經テ尾張國ニ下著シ、此仔細ヲ左兵衛督ニ申ケレハ、先京都ヘ引返シテ、宇治勢多ヲ支テコソ、合戰ヲ致サメトテ、勅使ニ打連テソ上ラレケル、

〔七卷册子〕

是ニヨツテ京都イヨイヨ騒動、大和河内ヨリモ軍士多ク上洛ス、物念ハカリナシ、同十九日西國ノ動亂以ノ外ノ間、義貞朝臣ヲ召還サルヘキヨシニテ勅使ヲ立ラル、ト云々、同廿五日義貞朝臣以下京都ニ歸參スト云々、同日補判官正成河内ニ歸國、南都ヲヘテ廿六日赤坂ニ至ルト云々、

〔註〕 義貞歸洛ノ日詳カナラザルヲ以テ、七卷册子ニヨツテ是日ニ懸ク、

〔瑠璃山年錄殘編〕上 箱根山ヨリ足利殿、新田殿ヲ追返テ、十二月二十八日近江國ニ着給、



十二月二十七日 尊氏、美作貞泰・熊谷在直二、義貞等ノ官軍敗退セルヲ以テ、追撃シテ上洛セントスルヲ告ゲ、軍ニ會セシム

〔古文書〕淺草文 本郷大和守 △六二、八五一、  
庫本 泰行家藏

義貞已下京方軍勢、於海道悉討落了、仍所令發向京都也、早相催若狹國地領御家人、可致軍忠之狀如件、

建武二年十二月廿七日

尊氏公  
御判

美作左近將監殿

〔萩藩閔閱録〕廿七ノ二 △六二、八五一、  
熊谷帶刀

新田左衛門佐義貞以下輩、沒落之間、所發向京都也、相催一族、可抽軍忠之狀如件、

建武二年十二月廿七日

尊氏公  
御判

熊谷彦四郎殿

十二月三十日 菊池武敏、太宰府ノ足利軍ヲ攻メントス。足利方、之ヲ新田義貞與同ノ仁ト稱ブ。

〔新編會津風土記〕三 梁瀬源次郎藏 △六二、八五六、  
（建武三正月十三日附、額  
尙ヨリ安藝助太郎宛）

新田右衛門佐義貞與同之仁菊池掃部助武敏、依寄來宰府、於中途重付、去年十二月

卅日抽軍忠之上、引籠菊池山城之間、今月三日致合戰、親類若黨等討死手負下略

〔詫磨文書〕三 豐後 △六二、八五七、  
（建武五年四月十八  
日附少貳額尙證判）

大友詫磨豐前太郎貞政軍忠事、

一建武二年十二月卅日、新田左衛門尉義貞與同仁菊池掃部助武敏、寄來宰府之間、於中途重付致合戰若黨等討死候畢、下略

建武三年延元元年丙子（二月二十  
九日改）（一九九六）

正月一日 諸方ノ賊軍、京都ニ迫リ、京都ノ攻防戰初マル。千種忠顯、名和長年、結城親光等、勢多ヲ守ル。是日、足利直義・高師直、來リ攻メ、交戰連日ニ亙ル。

〔天野文書〕（備後 △六二、九一三、

天野周防土用王丸代、同安藝八郎景光申、勢多（近江栗  
太郎）合戰事、親父七郎左衛門尉經顯、屬于當御手、馳向最前、去自正月一日到于同十一日、連日致合戰警固、毎日橋爪於高矢藏、抽軍忠之條、今川五郎入道殿（範國  
御見知畢、其上於軍陳無其隱上者、賜御證  
判、爲備後證、恐々言上如件、建武三年七月  
日附、某證判）

〔進藤文書〕（楓軒文書 △六二、八五二、  
纂所收）

建武三年延元元年

十一日ヨリ  
勢多橋  
ニ戰フ



注進

伊勢國乙部源次郎政貫申軍忠事、去建武二年十二月廿七日以來、屬愚息左近大夫將監範景手、勢州於久留部山(安濃郡)藏人判官清藤誅伐之刻、清藤家人討捕阿曾太郎兵衛尉、追落錦鑑直垂畢、將又同廿九日、於安濃津討捕清藤家人美夫野新三郎之刻、政貫家人蜂河次郎兵衛尉并鹽見又四郎令討死畢、同三年正月七日、屬範景手馳參于勢多、同十六日於京都神樂岡致合戰之忠、同廿七日於四條河原討捕伯耆守家人同晦日於三條河原抽軍忠畢、然間範景委細注進之處、於奉行人明石縫殿大夫家彼一烈注進令紛失畢、而範景曆應三年八月廿六日死去之間、任承及之旨、圓忠所令注進也、若此條偽申候者、可蒙佛神之御罰候、以此旨可有御披露候恐惶謹言、

康永三年五月廿八日

二位律師圓忠(花押)

進上 御奉行所

〔多田院文書〕(去年十一月二十一日ノ條ニ收ム)

〔略年代記抄出〕(前文ハ去年十二月十一日ノ條ニ收ム) 正月五日、於勢多箭合

〔梅松論〕(前文ハ去年十二月十一日ノ條ニ收ム) 去程に京方の山法師道場坊闍梨宥覺山徒千餘人を相語らひて、國人案内者たるにこそ、江州伊岐代宮を俄に構て引籠る、是は關東勢

久留部山合戰  
安濃津戰  
勢多神樂岡戰  
三條河原戰  
四條河原戰

伊岐代ノ戰

足利方ノ部署  
京方ノ部署

七日合戰  
始マル十三日官軍敗ル

を當國にて支へて、御敵の興勢を以後詰をせさせむとの謀なる間、則武藏守師直を大將として大勢を卒して、建武二年十二月廿二日に彼城に押寄て一夜の中に攻落す、此所野路の宿より西湖の端なれば、討もらされたる者共は舟に乗て落行けるとぞ聞えし、去程に御手分あり、勢田は下御所大將、副將軍は越後守師泰、淀は畠山上總介、芋洗は吉見三河守、宇治へは將軍御向有べきなり、京方の瀬田の大將は千種宰相中將、結城太田大夫判官親光、伯耆守長年也、勢田は正月三日より矢合とぞ聞えし、將軍は日原路を経て宇治へ御向あり、(下文十三日ノ條ニ收ム)

〔參考太平記〕(八日ノ條ニ收ム)

〔保曆間記〕(第五前文去年十二月十日ノ條ニ收ム) 同三年正月七日、尊氏人わたりにつく、義貞以下

京都より又はせむかひけるが、せたの橋をさかへてひかへたり、直義むかつて戦をいどまんとす、京より月卿、雲客、伯耆守長年らはせむかふ、宇治へは足利兵衛佐向はる、京都より補判官正成發向して、七日より合戦はじまり、晝夜をわけざりしが、十三日方々の戦同時に敗て、京方おちちりけり、

〔七卷册子〕(同廿九日) 補判官マタ上洛、昨廿八日ヨリ米穀數百石河州ヨリ江州坂本エ運送スルノヨシ、人馬ラクエキタリト云々、東國ノ凶徒襲來ノ間、京都合戰

建武三年延元元年



アルヘキヤ其兵糧用意ノタメト風聞スト云トモ其意ヲシラス、今日南都エ勅使下向、朝敵誅伐ノ御祈ヲ仰下サル、今日聞、西國ノ凶徒以ノ外多勢細河帥(師イ)定禪大將トナリ、赤松月潭入道同子息等以下并四國中國ノ勢一圓ニ數萬人ステニ兵庫明石ノ邊ニ發向スト云々、マタ開丹波但馬等ノ凶徒數千人發向、ステニ和久ノ郷邊ニ到ルト云々、北國ノ凶徒ステニ以ノ外コトコトク入洛スヘキノヨシ、日本國中蜂起セサル所ナキノヨシ風聞、天地モ打カヘスヘキコトク南都邊ニイタルマテ物念云ハカリナシ(マシテ)京都ノ騷動言語道斷ト云々、マタ開諸國蜂起ノ沙汰以ノ外ノアヒタ京都ノ軍勢過半沒落凶徒ニ加ハルカト云々、宇治勢田大渡山崎等ニ於テ防戰アルヘキヨシ、楠正氏(成カ)伯耆守船田入道同長門守等晦日京都ヨリ發向、其用意ヲヒタ、シ云々、

山門ヨリ道場坊以下數百人江州エ發向スト云々、是東國ノ凶徒ヲサ、エンタメナリト云々、伊岐代ノ宮ヲ俄ニ城ニカマヘテ楯コモルト云々、丹波路ノ凶徒以ノ外ノヨシ、二條大納言殿數百騎ヲ率シ發向セラルト云々、

〔七卷册子〕 建武三年正月大亂ニヨツテ内裏ニ節會朝拜行ハレサルノヨシ云々、京都ノ騷動言語ヲ絶スルノヨシ云々、

同七日尊氏卿兄弟東國ノ軍士ヲ引テ江州ニ着陣、其勢數十萬人、山野一逼ニ充滿スト云々、同日四國西國ノ凶徒攝州ニ至ル、其勢マタ數萬人ト云々、洛中イヨイヨ騷動、人馬東西ニ馳達、物念云ハカリナシト云々、今日南都ヨリモ衆徒三百人京都エ進ラス、兼日召サル、ニヨツテナリ、スクニ山崎ノ固メニ向フノヨシ云々、今日申ノ刻宇治ノ在家コトクク燒亡、餘煙平等院ニウツリ、テ佛閣寶藏燒失、煙リ蒼天ニ充、後ニ聞、補判官宇治ノ固メトシテ、凶徒ニ心安ク陣トラセシトテ火ヲカケタリト云々、

同九日山陰道ノ凶徒數千人、大枝山ニ陣スルノ處、官軍江田行義以下馳向テ打破ル、凶徒敗北、大將久下五郎以下數十人ヲ討取、生捕數ヲシラスト云々、

正月二日 延曆寺僧祐覺等、近江伊岐城ニ據ル。是日、高師直、攻メテ之ヲ拔ク。

〔田代文書〕三 〔筑後〕 六二九一八、

田代豐前市若丸(顯稱)申、去正月二日、江州伊岐代御合戰之時、屬御手、向大手、於辰巳角矢倉下、致軍忠之刻、若黨高野式部房定祐、左足甲被射通畢、且狩野下野三郎、矢島六郎等、見及候之上、於戰場既御檢知畢、將又翌日、三日、令參栗本(栗本郷)御宿、入見參



者也、然早下賜御證判、欲備弓箭之眉目、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年十一月日

市若丸狀

承了(高御奉)  
承了(花押)

〔鎮西古文書編年錄〕〔野上文書〕

〔頓宮文書〕 △六、二、九二〇。

著到 近江國頓宮肥後彌三郎知綱、

右今月二日、馳參野路宿候了、

建武三年正月二日

承候了(花押)

〔山内須藤文書〕(長門) △六、二、九二一

備後國山内首藤三郎通繼申軍忠事、

〔中略〕 近江國伊岐宮、大渡橋上御合戰之時、致忠節、遠矢可仕之由、被仰下之間、以遠

矢、御敵六騎目前射落、則射拂、爲御前軍之間、無其隱者也、〔中略〕 然早下賜御證判、爲備

龜鎮、恐々言上如件、

建武三年正月十一日

承了(高御奉)

〔山内須藤文書〕(長門) (去年十二月十一日ノ條ニ收ム) 〔梅松論〕 (一日ノ條ニ收ム) 〔參考太平記〕

(八日ノ條ニ收ム)

正月三日 官軍、丹波ノ小河成春等ト大江山ニ戰フ。尋テ新田江田行義、之ヲ追拂フ。

〔古文書類〕 △六、二、九二四。

丹波國御家人小河小太郎成春申、

建武二年十一月二日、被成下御教書之間、率一族已下軍勢等、同十二月廿八日、式部

伊賀四郎、同一族、并眞壁彦三郎等、相共ニ於當國大石宿舉御旗、同三年正月三日、押

寄大枝山(即チ大江山)、致散々合戰、御敵捕大納言家(二條)之刻、若黨得丸、大貳房良弁等、數

多討取之條、式部伊賀左衛門入道、村社孫次郎等、所令見知也、令頂戴御判、欲備龜鏡、

以此旨可有御披露候、右言上如件、(建武三年正月四日附錄氏證判)

〔後藤文書〕(播磨) △六、二、八五三。

後藤八郎基景申、去年十二月晦日、追落丹波國守護館、發向京都之刻、山徒南岸同宿

楯籠波々伯部保之間、正月一日、追落彼等館、則取登于大枝山、同三四兩日、致軍忠條、

建武三年、延元元年

大江山ニ  
押寄ス



同心合戰之間、御見知之上者、爲後證可賜御判候、恐惶謹言、(建武三年正月、日附某花押)

〔參考太平記〕(八日ノ條、ニ收ム)

正月六日 足利直義、書ヲ越後ノ秩父高長ニ與ヘテ、新田方ノ官軍ヲ擊タシム。

〔色部文書〕(羽前、△六、二、九二九)

新田右衛門佐義貞以下輩等討伐事、早相催一族、可抽軍忠之狀如件、

建武三年正月六日

(足利直義)  
左馬頭(花押)

秩父平藏人殿

〔註〕 高長、加地景綱ニ屬シテ新田方ト越後ニ戰ヒシ事、去年十二月十九日ノ條ニ見ユ、二月二十四日、勅シテ越後國內ノ足利黨ヲ伐タシメラル、事見ユ、

正月七日 楠木正成、宇治ヲ守ル。是日、畠山高國等、來リ攻メ、連日、兵ヲ接ス。

〔眞乘院文書〕(前田侯爵所藏、△六、二、九三二)

和泉國御家人和田左近將監助康申、

右助康去年(建武)十一月廿八日、馳參京都屬御手、自宇治令參東坂本、同正月十六日、

罷向西坂本、同廿七日致合戰、同廿八日致合戰之刻、若黨藤内兵衛尉助俊被討畢、同晦日致鴨河原、内野之合戰、同二月十日、十一日、罷向打出、豐島河原、致合戰忠節候畢、就中於去々年飯盛城合戰、自最初十一月十八日付御著到、同廿日、廿二日、廿六日致合戰、同十二月一日合戰、若黨新三郎明宗被射殺畢、同十二日、助康舍弟仲次助秀被疵、同晦日、中間源内被疵之條無其隱之上者、且預御注進、浴恩賞、且賜御證判、欲致奉公忠節矣、粗目安言上如件、

延元元年三月日

被相加合戰之條無相違候(楠木正成、花押)

〔天野文書〕(前田侯爵本、△六、二、九三三)

天野安藝三郎遠政申、去正月七日蒙仰可罷向宇治之由、即屬于當御手、自七日至十一日、於宇治橋上、晝夜抽軍忠次第、大將軍於御目前、被御覽上者、賜御證判、爲備龜鏡、恐々言上如件、(建武三年七月日、附畠山高國證判)

〔多田院文書〕(影本、去年十一月二十日、五日ノ條ニ收ム)

〔略年代記抄出〕(影本) 同七日、楠木燒拂宇治、依餘餘平院燒失、

〔參考太平記〕(八日ノ條、ニ收ム) 〔保曆間記〕(一日ノ條、ニ收ム)

建武三年、延元元年



正月八日 義貞、大渡ヲ守ル。尊氏、八幡山下ニ陣ヲ取り、是日ヨリ大渡ニ義貞ト戦フ。

〔武家年代記〕中 建武三正八將軍攻入八幡

〔鎮西古文書編年録〕戸次家（去年十二月十二日ノ條ニ收ム） 〔野上文書〕（諸家文書）（去年十一月十一日ノ條ニ收ム）

〔山内首藤文書〕（長門）（正月二日ノ條ニ收ム） 〔山内首藤文書〕（長門）（去年十二月十一日ノ條ニ收ム）

〔大友文書〕（立花伯爵所藏）（明年正月二日ノ條ニ收ム）

〔梅松論〕（上文十三日ノ條ニ收ム） 京方宇治の討手の大將義貞、橋の中二間引て櫓撥楯を上

て相支けり、同八日の夕、橋の中櫓の下において、結城の山家の家人野木與一兵衛討并中董二人が一人當千の武略を顯して戦し、ほどに、將軍御威の余りに御腰の物を直に兩人に給ひし、哀生々世々の面目とぞみえし、しかる間後は川をへだてて日夜矢軍也。（下文八十日ノ條ニ收ム）

〔參考太平記〕（卷第十四） 尊氏向京附大渡山崎等合戰事

去程ニアラタマノ年立歸レトモ、内裏ニハ朝拜モナシ、節會モ行ハレス、京白河ニハ家ヲ毀テ堀ニ入、財寶ヲ積テ持運フ、只何ト云沙汰モナク、物騒シクソ見ヘタリケル、懸ル程ニ將軍已ニ八十萬騎ニテ、美濃尾張へ著給ヒヌト云程コソアレ、四國

朝敵三方ヨリ都ニ寄ス

京勢落散ル者多シ

官軍部署

勢多ニ長年宇治ニ正成

ノ御敵モ近ツキヌ、山陰道ノ（餘、金勝院本作、陽）朝敵モ、只今大江山へ取上ルナト聞ヘシカハ、此間召ニ應シテ、上リ聚リタル國々ノ軍勢共、十方へ落行ケル程ニ（天正本云、十萬餘騎有ナント云シモ十方）洛中ニハ残り留ル勢、一萬騎迄モアラシトソ見ヘタリケル、其モ皆勇ル氣色モナクテ、何方へ向ヘト下知セラレケレトモ、耳ニモ聞入サリケレハ、軍勢ノ心ヲ勇マセン爲ニ、今度ノ合戦ニ於テ忠有ン者ニハ、不日ニ恩賞行ハルヘシト云、壁書ヲ決斷所ニ押レタリ、是ヲ見テ其事書ノ奥ニ、例ノ落書ヲソシタリケル、

カク計タラサセ給フ繪言ノ汗ノコトクニナトナカルラン  
去程ニ正月七日ニ、義貞内裏ヨリ退出シテ、軍勢ノ手分アリ、勢多へハ伯耆守長年ニ、出雲伯耆因幡三箇國ノ勢、二千騎ヲ副テ向ラル、供御瀬、膳所瀬二個所ニ、大木ヲ數千本流シ懸テ、大綱ヲ張亂杭ヲウチ、引懸引懸繫タレハ、如何ナル河伯水神ナリトモ、上ヲモ游難、下ヲモ泳難シ、宇治へハ楠判官正成ニ、大和、河内、和泉、紀伊國ノ勢、五千餘騎ヲ副テ向ラル、橋板四五間ハネハツシテ、河中ニ大石ヲ疊上、逆茂木ヲ繁クエリ立テ、東ノ岸ヲ高ク屏風ノ如クニ切立タレハ、河水ニ分レテ、白浪漲リ落タル事、恰龍門三級ノ如クナリ、敵ニ心安ク陣ヲ取セシトテ、橋小島、横島平等院ノアタリヲ、一字モ残サス、燒拂ケル程ニ、魔風大厦ニ吹懸テ、宇治平等院ノ佛閣寶藏、

建武三年、延元元年



山崎ニ義

京家ノ御  
僧正ノ御  
坊ノ手  
大渡ニ義  
貞

尊氏西上

近江伊岐  
洲城ヲ攻  
落ス

新田義貞公篇

忽ニ燒ケル事コソ淺マシケレ、皇年代略記云、建武三年正月七日平等院燒亡云々山崎へハ脇屋右衛門佐ヲ大將トシテ、洞院按察大納言按、名公泰、左大臣實泰子也文觀僧正、大友千代松丸天正本載、少武宇都宮美濃將監泰美濃守時景子、或三河守時綱子海老名五郎左衛門尉、長九郎左衛門尉長、西源院本作長井、下做之、北條家、南部本作右、非也以下七千餘騎ノ勢ヲ向ラル、寶寺ヨリ川端マテ、塀ヲ塗塹ヲ堀テ、高槽出櫓、三百餘個所ニ搔並ヘタリ、陣ノ構何トナク、由々敷ケニハ見ヘタレトモ、俄ニ拵タル事ナレハ、塀ノ上モイマタ干ス、堀モ淺シ、又防クヘキ兵モ、京家ノ人、僧正ノ御坊ノ手ノ者ナト、號スル者共多ケレハ、此陣ノ軍、ハカハカシカラシトソ見ヘタリケル、大渡へハ新田左兵衛督義貞ヲ總大將トシテ、里見、鳥山、山名、桃井、額田、田中、籠澤、千葉、宇都宮、菊池、結城、池、風間、小國、河内兵共、一萬餘騎ニテ固メタリ、是モ橋板三間マハラニ引落シテ、半ヨリ東ニ搔櫓ヲカキ櫓ヲカイテ、川ヲ涉ス敵アラハ横矢ニ射、橋桁ヲ渡ル者アラハ、走リヲ以テ推落ス様ニソ構ヘタル、馬ノ懸上リニ逆茂木ヒシト引懸テ、後ニ究竟ノ兵共、馬ヲ引立引立並居タレハ、如何ナル生唆磨墨二騎トモ、爰ヲ涉スヘシトハ見ヘサリケリ、去程ニ將軍ハ、八十萬騎ノ勢ヲ率シ、正月七日梅松論作、建武二年十二月、近江國伊岐洲ノ社ニ西源院本、作社山法師成願坊カ、三百餘騎ニテ金勝院本、無成願坊三百餘騎字、西源院本亦無成願坊字、而作二千餘騎、梅松論作、道場坊有覺、恐非也楯籠タリケル城ヲ、一日一夜ニ攻落シテ、天正本云、山名參河守ヲ始トシテ、宗徒ノ大名五頭ヲ

細川赤松  
東上ス

山陰ノ朝  
敵

江田行義  
山陰道ノ  
敵ヲ追拂

指テ攻ラレシニ、一日一夜戰テ成願坊討死シケレハ、城ハ則落ニケリ、云々、下同ニ本文、八日ニ八幡山下ニ陣ヲ取、細川卿律師定禪天正本載、弟帶刀、按、細川帶刀名直俊、詳註于第三十四卷和由楠軍評定段、可并見四國金勝院本、作西國中國ノ勢ヲ率シテ、正月七日今川家、北條家、金勝院、西源院、南部本作二日、播磨大藏谷ニ著タリケルニ、赤松信濃守範資信濃、天正本作美作、範資、今川家、北條家本作範貞、非也我國ニ西源院本作、備前、恐非也、所謂我國、播磨也下リテ旗ヲ舉ン爲ニ、京ヨリ逃下リケルニ行逢テ、互ニ悦ヒ思フ事限ナシ、且ハ元弘ノ佳例ナリトテ、信濃守ヲ先陣ニテ、其勢都合二萬三千餘騎今川家本、二萬字正月八日午刻ニ芥河宿ニ陣ヲ取、久下彌三郎時重波々伯部二郎左衛門爲光、酒井六郎貞信六郎、北條家、南部本作九郎、金勝院、西源院本、貞信、北條家、南部本作貞、少、非也、按、名師基西山峰堂ニ、陣ヲ取テオハシケルヲ追落シテ、正月八日夜半ヨリ、大江山ノ峠ニ籌ヲソ燒ケル、京中ニハ時ニ取テ弱カラシ方ヘ向ヘシトテ、新田一族三十餘人、國々ノ勢五千餘騎金勝院本、作五百餘騎、非也貽サレタリケレハ、大江山ノ敵ヲ追拂フヘシトテ、江田兵部大輔行義ヲ大輔、毛利家、北條家、南都、天正本、作三少輔大將トシテ、三千餘騎ヲ丹波路ヘ差向ラル、此勢正月八日曉當、作九日曉、西源院本、作八日、亦非也、按、丹波兵、八日夜半、陣、大江山、於是行義出、兵、乘、味爽、擊破之、實非、八日之事桂河ヲ打涉テ、朝霞ノ紛レニ大江山ヘ推寄セ、一矢射違ル程コソ有ケレ、拔進テ攻上リケル間、一陣ニ進テ戰ヒケル久下彌三郎カ舍弟五郎長重、痛手ヲ負テ討レニケリ、是ヲ見テ後陣ノ勢、一陣モ戰ハスシテ、捨鞭ヲ打テ引ケル間天正本云、江田行義手合ノ軍シマシテ、逃ル敵ヲ追下シ、大江山ニ陣ヲ取、云々

建武三年延元元年



大渡ノ戦

敵サマテハ追ウリケレトモ、十里二十里ノ外迄、引ヌ兵ハナカリケリ、明レハ正月九日保曆間記作二七日辰刻ニ、將軍八十萬騎ノ勢ニテ、大渡ノ西ノ橋爪ニ推寄、橋桁ヲヤ渡ラマシ、川ヲヤ涉サマシト見給フニ、橋ノ上モ、川ノ中モ、敵ノ構密カシケレハ、如何スヘキト思按シテ、時移迄ソ控タル時ニ、官軍ノ陣ヨリ、ハヤリヲノ者共ト見ヘタル兵百騎許、川端ヘ進出テ足利殿ノ搦手ニ頼思召テ候ツル、丹波路ノ御敵トモヲコソ、昨日追散シテ、一人モ殘ラス討取テ候ヘ、御旗ノ紋ヲ見候ニ、宗徒ノ人々ハ、大略此陣ヘ御向有ト覺テ候、治承ニハ足利又太郎、元曆ニハ佐々木四郎高綱、宇治川ヲ涉シテ、名ヲ後代ニ揚候キ、此川ハ宇治川ヨリモ、淺クシテシカモ早カラス、爰ヲ涉サレ候ヘト、聲々ニ欺テ、敵ヲ敵テ毛利家本咄ト笑、武藏相摸ノ兵共敵ニ招レテ、如何ナルハヤキ淵川ナリトモ渡サスト云コトヤアルヘキ、假令川深クシテ、馬人トモニ沈ミナハ、後陣ノ勢其ヲ橋ニ蹈テ涉レカシトテ、二千餘騎二今川家、毛利家、北條家、金勝院、南都、天正本、作三千一一度ニ馬ヲ打入ントシケルヲ、執事武藏守師直馳廻テ、是ハソモ物ニ狂給フカ、馬ノ足モタ、ヌ大河ノ底ハ早シテ上ハ靜ナルヲ、涉サハ涉サレンスルカ、姑ク閑マリ給ヘ、在家ヲコホチ、筏ニ組テ、涉ラントスルソト下知セラレケレハ、サシモ進ミケル兵、ケニモトヤ思ヒケン、嚙テ近邊ノ在家數百家ヲ毀テ連テ、面二三町町、北條家、南都、本、作大ナル

筏賣ノ

野木頼玄

筏ヲソ組タリケル、武藏相摸ノ兵共、五百餘人コミ乗テ橋ヨリ下ヲ渡ケルカ、河中ニ打タル亂杭ニ懸テ、棹ヲ差トモ行ヤラス、敵ハ雨ノ降如ク散々ニ射ル、筏ハ些モハタラカス、兎角シケル程ニ、流レヨトフタル波ニ、筏ノ舳ヲ押切ラレテ、棹ニモ留ラス流レケルカ、組重ネタル材木トモ、次第ニ別別ニ成ケレハ、五百餘人乗タル兵、皆水ニ溺テ失ニケリ、敵ハ楯ヲ敵テアレ見ヨト笑フ、御方ハ手ヲアガイテ、如何セント騒キ悲メトモ叶ハス、又此軍散シテ後、橋ノ上ナル櫓ヨリ、武者一人矢間ノ板ヲ推開テ、治承ニ高倉宮後白河帝皇子諱以仁、御合戦ノ時、宇治橋ヲ三間引落シテ、橋桁計殘テ候シヲタニ、筒井淨妙矢切但馬ナトハ、一條二條ノ大路ヨリモ、廣クニ走渡テコソ、合戦仕テ候ケルナレ、況此橋ハ、播楯ノ料ニ、所々板ヲ弛シテ候ヘトモ、人ノ渡リ得ヌ事ハアルマシキニテ候、坂東ヨリ上テ京ヲ攻ラレンニ、川ヲ阻タル合戦ノアラノ上ヲ渡テ、手攻ノ軍ニ我等カ手並ノ程ヲ御覽シ候ヘト、敵ヲ欺キ恥シメテ、アサ笑テソ立タリケル、是ヲ聞テ武藏守師直カ内ニ、野木與一兵衛入道頼玄トテ、天正本野木上有佐々木字、按、野木氏佐々木同宗也、頼玄、毛利家大力ノ早業、打物取テ世ニ名ヲ知ラレタル兵有ケルカ、胴丸ノ上ニ裙細目ノ大鏡、スキ間モナク著ナシ、獅子頭ノ兜ニ目ノ下ノ

建武三年、延元元年



頬當シテ、四尺三寸ノ天正本作ニイカ物作りノ太刀ヲハキ、大タテ上ノ隨當脇楯ノ下  
五尺餘ヘ引コフテ、柄モ五尺身モ五尺ノ備前長刀、右ノ小脇ニカイコミテ、治承ノ合戦ハ  
 音ニ聞テ目ニ見タル人ナシ、淨妙ニヤ劣ルト我ヲ見ヨ、敵ヲ目ニ懸ル程ナラハ、天  
 臺ノ本文作ニ天竺、非也、今依ニ異本ニ改レ之、石橋、蜀川ノ繩橋ナリトモ、渡リ得スト云事ヤ有ヘキト、高聲ニ  
 廣言吐テ、橋桁ノ上ニソ進タル、櫓ノ上搔楯ノ陰ナル官軍共、是ヲ射テ落サント差  
 詰引詰散々ニ射ル、面僅一尺金勝院本、許アル橋、桁ノ上ヲ、歩テハ矢ニ違今川家、金勝院、  
南都本並云、橋ノ  
上ヲ歩テハ矢ニ違フヘキヤウモナカリケルニ、アカ、弓手ノ矢ニハ右ノ橋ニ飛移リ、馬手ノ矢ニハ  
ル矢ニハサシウツフキ、下ル矢ヲハオトリ超、云々、弓手ノ矢ニハ右ノ橋ニ飛移リ、馬手ノ矢ニハ  
 左ノ橋桁ヘ飛移リ、真中ヲサシテ射ル矢ヲハ、矢切但馬ニアラネトモ、切テ落サヌ  
 矢ハナカリケリ、數萬騎ノ敵御方、立合テ見ケル處ニ此上面僅一尺以下至此、西源院本不載、  
而云、官軍散々ニ射ケルニ、政通面モフラ  
ス進ミケル、云々、下同ニ本文、又山川判官カ金勝院本云、名敏列、郎等二人、橋桁ヲ渡テ繼タリ、頼玄彌力ヲ得テ、  
 櫓ノ下ヘカツキ入、掘立タル柱ヲ曳ヤ曳ヤト引ニ、橋ノ上ニカイタル櫓ナレハ、橋  
 共ニユルキ渡テ、スハヤユリ倒シヌトソ見ヘタリケル、櫓ノ上ナル射手共、四五十  
 人、叶ハシトヤ思ヒケン、飛下飛下倒レフタメイテ、二城戸ノ内ヘ逃入ケレハ、寄手  
 數十萬騎數、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作レハ、同音ニ籠ヲ敲テソ笑ケル、スハヤ敵ハ引ソト云  
 程コソ有ケレ、參河遠江美濃尾張ノ、ハヤリヲノ兵共千餘人、馬ヲ乗放シ乗放シ、我

正月十日<sup>(1)</sup> 脇屋義助等、山崎ヲ守ル。細川定禪、四國・中國ノ兵ヲ率ヅテ、  
 赤松範資ト共ニ東上シ、之ヲ攻ム。是日、山崎ノ官軍、敗北ス。依テ義貞等  
 ノ官軍、京都ニ退ク。

〔三刀屋文書〕(諸家文書)本日、數山行幸  
纂所收ム(ノ條ニ收ム)

〔梅松論〕(上文ハ八日  
ノ條ニ收ム) (かゝりける所に、細川卿公定禪を大將として、赤松入道圓

心、其外四國中國の間にかねて御教書を給ふ輩數をしらす攝津國河内國邊に馳  
 着ける間、同九日酉の刻、將軍の御陳へ申けるは、明日十日午刻以前に山崎の京方  
 を打破て煙を上べし同時に御合戦あるべしと申定て、天の明をそしと待かけて、  
 定禪、圓心、國人、同城、戸口に押寄て攻戦けるが、案のごとく十日の午の刻計に山崎



十日午刻  
山崎ヲ破  
ル

細川定禪  
赤松範資  
芥河宿ニ  
着ス

山崎攻撃  
赤松ヲ播  
磨守護職  
トナス

新田義貞公篇

四八八

を打破て久我鳥羽に攻入火を上しかば、所々(の)京方皆逃上る間、(下文ハ十日(2))

〔参考太平記〕(前文ハ八日) 是ヨリ後ハ、橋桁モツ、カス筏モ叶ハス、カクテハイ

ツマテカ向ヒ居ヘキト、攻アクミテ思ヒケル處ニ、サモ小賢ケナルカ者一人、堅封

シタル文ヲ持テ、赤松筑前殿ノ後陣ハイツクニテ候ソト、問々走ツテ出來ル、筑前

守ハ八日宵ヨリ、桃井修理亮、土屋三河守、安保丹後守ト、陣ヲ並テ橋ノ下ニ居タリ

ケルカ、此使ヲ見附テ、急キ文ヲ披テ見レハ、舍兄毛利家、北條家、金勝院、南都本、作三舍弟、非也、信濃守範資自筆

ニテ、義貞以下ノ逆徒等對治ノ事、將軍家ノ御教書到來ノ間、義兵ヲ舉ンタメニ播

州ニ罷下ル處ニ、細川卿律師定禪京都ニ攻上ラル、間路次ニ於テ參會ス、且ハ元

弘ノ佳例ニ任テ、範資先陣ヲ打ヘキ由一諾事訖、今日按、八日也、已ニ芥河宿ニ著候ナリ、

明日十日辰刻ニハ、按、明日字不通、範資、八日至芥河、明日也、當云、明後日耳、蓋轉寫之訛矣、山崎ノ陣ヘ推寄テ、合戰ヲ致スヘ

キニテ候、此由ヲ將軍ヘ、申サシメ給フヘシト、ソ書タリケル、筑前守、此狀ヲ持參シ

テ讀上タリケレハ、將軍ヲ始奉リテ、吉良、石堂、高、上杉、畠山ノ人々、今ハカフソト悦

合ル事斜ナラス、天正本云、尊氏御感ノ餘ニ、播磨守護職ヲ身ニ當テソ賜リケル、然ルヲ貞範堅ク辭シテ、此使父圓心ニ御教書ヲ賜フヘキ由申ケレハ、神妙ナリトテ、重テ圓心ニ思補セラル、云々、此使

立歸テ後、相圖ノ程ニモナリケレハ、西源院本、此上、不載、赤松範資使至、而云、カ、ル處ニ山崎ノ手ニ寄ケル細川定禪三萬餘騎ニテ、櫻井宿ノ東ヘ打出ル、範資元弘吉例、云々、此間亦無テ、此間亦無テ、範資會、貞範之事、細川卿律師定禪二萬餘騎ニテ、二萬、今川家、毛利家、北條家、金勝院、南都、天正本、作三萬、按、諸本此上云、定禪二萬三千、今相圖、可三并見

櫻井宿ノ東ヘ打出ル、赤松信濃守範資二千餘騎ニテ、川ニソフテ押寄スレハ、筑前

守貞範、川向ヨリ旗ノ紋ヲ見テ、小舟三艘ニ今川家本、作二艘、取乗押渡リテ、兄弟一所ニナル、

此間東西數百里ヲ阻テ、安否更ニ知サリシカハ、何ノ陣ニカ討レヌラント、安キ心

モナカリツルニ、互ニ恙ナカリケル、天運ノ程不思議サヨト、手ニ手ヲ取組額ヲ合

テ、先悅泣ニソ泣タリケル、山崎ノ合戰ハ、元弘ノ吉例ニ任セテ、赤松今川家本作貞範、恐非也、考上文、今所謂赤松指ニ先矢合ヲスヘシト、兼テ定ラレタリケルヲ、播磨ノ紀氏ノ者共三百餘騎、拔

懸シテ一番ニ推寄タリ、官軍敵ヲ小勢ト見テ、城戸ヲ開キ逆茂木ヲ引除テ、五百餘

騎拔連テ懸出タルニ、寄手一タマリモタマラス、追立ラレテ四方ニ逃散ル、二番ニ

坂東坂西ノ兵共二千餘騎毛利家、天正本、作三千餘騎、櫻井宿ノ北ヨリ山ニ副テ推寄タリ、城中ノ

大將脇屋右衛門佐義助ノ兵、并宇都宮美濃將監泰藤カ紀清兩黨二千餘騎、二ノ城

戸ヨリ同時ニ打出テ、東西ニ開キ合、南北ヘ追ツ返ツ、半時許相戰、汗馬ノ馳違音聞

作ル聲、山ニ響キ地ヲ動シテ、雌雄イマタ決セス、戰半ナル時、四國ノ大將細川卿律

師定禪六萬餘騎六萬、毛利家、天正本、作三萬、北條家、西源院、南都本、作三萬、按、本文此上作三萬、今作六萬、諸本前後相違、下微之、赤松信濃守範資天正本、作三萬、今作六萬、諸本前後相違、下微之、

同貞範、按、梅松論、與細川定禪、同攻京者、爲赤松圓心、與諸本有異、別出子下、可三并見、二千餘騎二千、毛利家、天正本、作三千、今作六萬、諸本前後相違、下微之、西源院本不載、赤松、押寄

タリ、官軍敵ノ大勢ヲ見テ、叶ハシトヤ思ヒケン、引返シテ城ノ中ニ引籠ル、寄手彌

建武三年、延元元年

四八九



東家ノ兵 僧正ノ手 敗者ヨリ  
山崎ノ守  
義貞京都ニ退ク  
新田義貞 踏止ル

機ニ乗テ、暫ニ飛濱リ逆茂木引除テ、射レトモ痛マス、打テトモ漂ハス、乗越乗越攻入ケル程ニ、暫ハ死人ニ埋テ平地ニ成、矢間ハ皆射閉ラレテ開キ得ス、城中早色メキ立テ見ケルカ、一番ニ但馬國住人但馬、北條家、金勝長九郎左衛門同意ノ兵三百餘騎、旌ヲ捲降人ニ出ツ、是ヲ見テ洞院按察大納言殿ノ御勢、文觀僧正ノ手者ナト云テ、此間島水練シツル者共、弓ヲ弛シ兜ヲ脱テ、我先ニト降人ニ出ケル間、城中ノ官軍力ヲ失テ防キ得ス、サテハ淀鳥羽ノ邊ヘ引退テ、大渡ノ勢ト一ニ成テ戰ヘシトテ、討殘サレタル官軍三千餘騎、赤井ヲ差テ落行ハ、山崎ノ陣ハ破ニケリ、カクテハ敵皇居ニ亂入ヌト覺ルソ、主上ヲ先山門ヘ行幸ヲ成奉テコソ、心安ク合戰ヲモセメトテ、新田左兵衛督、大渡ヲ捨テ都ヘ歸給ヘハ、大友千代松丸、宇都宮治部大輔、降人ニ成テ將軍ノ御方ニ馳加ル、義貞義助一手ニ成テ、淀大明神ノ前ヲ引時、細川卿律師定禪、六萬餘騎ニテ六萬、西源院本、作二萬、與上相類、追懸タリ、新田越後守義顯後陣ニ引ケルカ、三千餘騎ニテ返合セ、相撲辻ヲ陣ニ取テ、旗ヲ颯ト指擧タリケレトモ、跡ニ合戰有トハ義貞ニハ告ラレス、先山門ヘ行幸ヲ成奉ランタメナリ、越後守義顯、矢軍ニテ姑ク時ヲ移シ、義貞今ハ内裏ヘ參ラレヌラント覺ユル程ニ成テ、三千餘騎ヲ二手ニ分テ、東西ヨリトツト喚テ懸入、大勢ニ颯ト亂合、火ヲ散シテソ闘タル、只今迄御

方ニ有テ敵ニナリヌル大友宇都宮カ兵共ナレハ、越後守ヲ見知テ、自餘ノ勢ニハ目ヲ懸ス、此ニ取籠彼ニヨセ合セテ、打留メントシケルヲ、義顯打破テハ圍ヲ出取テ返テハ追退ケ、七八度迄自ラ戰ハレケルニ、鎧ノ袖モ兜ノシコロモ皆切落サレテ、深手アマタ所負ケレハ、天正本云、義顯、馬三頭平、類三所迄切ラル、云々、半死半生ニ切成レテ、僅ニ京ヘ歸給フ  
○毛利家本云、義顯進退七八度迄戰ハレケルカ、深手負半死半生ニ切成レテ、僅ニ京ヘ歸入、内裡ノ南殿ノ庭上ニ、馬ノ上ニ抱ラレテ參ケルヲ、主上觀覽有テ、此上ハ山門ヘ臨幸ナルヘシトテ、則行幸ヲソ急レケル

正月十日<sup>(2)</sup> 天皇、神器ヲ奉ジテ、東坂本ニ行幸シ、大宮彼岸所ヲ行在ト爲シ給フ。義貞・義助以下諸將扈從ス。

〔三刀屋文書〕(諸家文書) △、六三、二〇

出雲國三刀屋大田莊藤卷村地頭左兵衛尉宇佐輔景(中脱カ)

今年<sup>三</sup>建武 正月十日、令發向山崎、致軍忠、同日行幸□□仕、於叡山任左衛門尉(左衛門尉ノ誤)

中之旨、伯耆四郎左衛門尉(伯耆卷ニ據レバ、名和、長年ノ三勇高光ナリ)并安東彌二郎入道等、令見知者也、同時合戰、伯耆中務丞相共、於一條河原、并桂河以下所々致軍忠、迄于西山峰堂、令發向



之條、御見知之上、伯耆中務丞以下、同時合戰顯然也、然者、云行幸供奉之功、云度々軍忠、無隱上者、賜御證判、彌欲抽忠節、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年二月日

左兵衛尉輔景

進上御奉行所

承了(名和長年)  
(花押)

名和長年

〔南狩遺文〕

東寺所藏後七日御修法卷裏書

建武三年

法務大僧正法印大和尚位弘真金剛分、

八日、任例始行御修法、但十日逆徒亂入京洛、聖主臨幸山門之間、兼雖存儲、臨期物念、不及續一紙之交名、返渡道具於本寺、奉隨天蹕畢、而今得正平勳修之便宜、令注置建武請僧之名字耳、

〔阿蘇文書〕

九、六二、九五八

阿蘇筑後守宇治惟澄謹言上、

宇治惟澄

欲早被經御沙汰、任嚴重輪旨、令旨預御遵行、筑前國下座郡、豊後國大佐井郷、同國日田莊、肥前國曾禰崎莊、肥後國守富庄以下條々子細事、(中略)

一豊後國日田莊(日田郡)地頭職事、

右莊園者、去建武三年山門臨幸之刻、惟時(宇治)依勅定、忝奉懷内侍所、東坂本彼岸所ニ奉入之間、勸賞仁被行、下賜輪旨畢、

正平十一年六月日

〔公卿補任〕

三 建武三丙子年正月十日、東軍入京、主上幸坂本、

〔園太曆〕

十七、觀應二

天下穢中、賢所渡御有無例、(中略)一不被憚穢中例、

建武三年正月十日、行幸叡山、賢所同有渡御、東夷襲來洛中之故也、(中略)同月廿七日以後、於洛中連日合戰、同月卅日、同合戰、東夷沒落、(中略)右例、大概注進如例、(件カ)

三月三日

左大史小槻清澄

〔梅松論〕

(前文、本日、山崎ノ官軍)

同十日の夜、山門へ臨幸ある、則内裏焼亡しけり、近

比は閑院殿より以來は、是こそ皇居の御名殘也しに、こはいかにとおどろきかなしまぬ人ぞなかりけり、同時に卿相雲客以下親光、正成、長年が宿所も片時の灰燼となりしこそ淺ましけれ、傳へきく秦の軍破れて咸陽宮、阿房宮を焼はらひけるは、異朝の事なればおもひ(やる)ばかりなり、壽永三年平家の都落もかくやとおぼ

建武三年延元元年

四九三

宇治惟時  
内侍所ヲ  
奉ジテ東  
坂本彼岸  
所ニ遷ス

内裏焼亡



日吉社に  
御座

えてあはれなり、(下文十一日、  
條ニ收ム)

〔神皇正統記〕(前文ハ去年十一月、  
十九日ノ條ニ收ム)

關々を固められしかど、次の年丙子の春正月十日、官軍又破れて高氏既に近づく、依て比叡山東坂本に行幸して、日吉の社にぞまし／＼ける、内裏も則ち焼けぬ、累代の重寶も多く失せにけり、昔よりのためしなき程の亂逆なり、(下文十三日、  
條ニ收ム)

〔大乘院日記目録〕一 三年延元元年也正月十日、東坂本行幸、内裏炎上、

〔參考太平記〕卷第十四 後醍醐天皇臨幸山門、附勅使河原丹三郎自害事

山崎大渡ノ陣破レヌト聞ヘケレハ、京中ノ貴賤上下、俄ニ出來タル事ノ様ニ、周章フタメキ倒レ迷テ、車馬東西ニ馳違ヒ、藏物財寶ヲ上下ヘ持運フ、義貞義助北條家本  
作ニ義顯、イマタ馳參ラサル前ニ、主上ハ山門ヘ落サセ給ハントテ、三種ノ神器ヲ玉體ニ添テ、鳳輦ニ召レタレトモ、駕輿丁一人モナカリケレハ、四門ヲ固テ侍フ武士共、鎧著ナカラ徒立ニ成テ、御輿ノ前後ヲソ仕リケル、吉田内大臣定房公、車ヲ飛セテ參セラレタリケルカ、御所中ヲ走廻テ見給フニ、ヨク○ヨク  
脱カ近侍ノ人々モ周章タリケリト覺テ、明星日ノ札二間ノ御本尊迄、皆拾置レタリ、内府心閑ニ、青侍共ニ執持セテ參セラレケルカ、如何シテ見落シ給ヒケン、玄象毛利家本  
有ニ鈴鹿、牧馬遠磨ノ御袈裟、毘須

山門行幸

義貞以下  
鳳輦ヲ守

羯摩カ作リシ五大尊、取落サレ(ケ脱カ)ルコソ淺マシケレ、公卿殿上人三四人コソ、衣冠正

タシテ供奉セラレタリケレ、其外衛府ノ官ハ、皆甲冑ヲ著シ、弓箭ヲ帶シテ、翠花ノ

前後ニ打圍ム、此二三年間、金勝院、天正本、作三十四年、爲得、按、元  
弘三年平高時滅、至建武三年、實四年也、天下僅ニ一統シテ、朝恩ニ

誇リシ月卿雲客、指タル事モナキニ、武具ヲ嗜ミ、弓馬ヲ好ミテ、朝儀道ニ違ヒ、禮法

則ニ背シモ、早カ、ル不思議出來ルヘキ前表ナリト、今コソ思知レタレ、新田左兵

衛督毛利家本誤  
作ニ左衛門、脇屋右衛門佐、并ニ江田、大館、堀口、美濃守、里見、大井田、田中、籠澤、以下

ノ一族二十餘人、二十、今川家、毛利家、北條家、金勝院、南都、天  
正本、作三十三、西源院本、二、作三、無餘字、千葉介、宇都宮、美濃將監、仁科、高梨、

菊池以下、外様ノ大名八十餘人、其勢僅ニ萬餘騎、二萬、今川家  
本、作三、千、鳳輦ノ跡ヲ守禦シテ、千  
葉

ノ騷シカリシ有様、只安祿山カ潼關ノ軍ニ、官軍忽ニ打負テ、玄宗皇帝自蜀ノ國ヘ

落サセ給ヒシニ、六軍翠花ニ從ヒテ、劍閣ノ雲ニ迷ヒシニ、異ナラス、爰ニ信濃國住

人、今川家、北條家、南都、  
天正本、作ニ武藏、勅使河原丹三郎、丹三郎、毛利家  
本作ニ中務丞、大渡ノ手ニ向タリケルカ、宇治モ

山崎モ破レテ、主上早何地トモナク、東ヲ差テ落サセ給ヒヌト、披露有ケレハ、危キ

ヲ見テ命ヲ致スハ、臣ノ義ナリ、我何ノ顔有テカ、亡朝ノ臣トシテ、不義ノ逆臣ニ從

ハシヤト云テ、三條河原ヨリ、父子三騎引返シテ、鳥羽ノ作路羅城門ノ邊ニテ、腹カ

建武三年、延元元年



キ切テ死ニケリ、

〔参考太平記〕

卷第十四 東坂本皇居附御願書事 西源院本

主上已ニ東坂本ニ臨幸成テ、大宮ノ彼岸所ニ御座アレトモ、イマタ參スル大衆一人モナシ、サテハ衆徒ノ心モ變シヌルニヤト、叡慮ヲ惱サレケル處ニ、藤本房英憲僧都參テ、申出タル言モナク、涙ヲ流シテ、大床ノ上ニ畏テソ候ケル、主上御座ノ内ヨリ、叡覽アリテ、名字ヲ委シク尋仰ラル、サテ其後御硯ヤ有ト仰ラレケレハ、英憲急キ硯ヲ召寄テ、御前ニサシ置、自宸筆ヲ染ラレテ、御願書ヲアソハサレ、是ヲ大宮ノ神殿ニ籠ヨト、仰下サレケレハ、英憲畏テ、右方權禰宜行親右方、今山川ヲ以テ是ヲ家本作左方納メ奉ル、暫アリテ圓宗院法印定宗圓宗、金勝院本作同宿五百餘人召具シテ參リタリ、君大ニ叡威有テ大床ヘ召ル、定宗御前ニ跪テ申ケルハ、桓武皇帝ノ御宇ニ、金勝院本十三年ニ、皇帝ハ帝都ヲ建、云々、桓武建、帝都、詳載、第十二卷、可并見、高祖大師當山ヲ開基シテ、百王鎮護ノ伽藍ヲ立ラレ候シヨリ以來、朝家ニ悅アル時ハ、九院舉テ掌ヲ合、山門ニ愁アル日ハ、百司均シク心ヲ傾ラレスト申ス事候ハス、眞ニ佛法ト王法ト相比スル故、比叡山ト云事、人トシテ知スト云者候ヘカラス、此上本文有脱句、今以異本補之、サレハ逆臣朝廷ヲ危ントスルニ依テ、忝モ萬乘ノ聖主、吾山ヲ御憑有テ、臨幸成テ候ハンスルヲ、サミシ申ス衆徒ハ一人モ

大宮彼岸所ニ御座

英憲僧都

法印定宗

官軍宿營

官軍ノ兵糧

アルマシキニテ候、身不肖ニ候トモ、定宗一人忠貞ヲ存スル程ナラバ、三千ノ衆徒、貳心ハアラシト思召候ヘシ、供奉ノ官軍サコソ窮屈ニ候ラメ、先御宿ヲ轉シテ進ラセ候ヘシトテ、二十一箇所ノ彼岸所、其外坂本、戸津、比叡辻、坊々家家ニ札ヲ打テ、諸軍勢ヲ宿シケル、其後又南岸坊僧都、道場坊祐覺、同宿千餘人召具シテ、先内裏ニ參シ、ヤカテ十禪師ニ立上リテ、天正本云、大鐘ヲナラシ、云々、大衆ヲ起シ、僉議ノ趣ヲ院々谷々ヘ觸送リケル間、三千ノ衆徒悉甲冑ヲ帶シテ馳參、先官軍ノ兵糧トテ、錢貨六萬貫、米穀七千石、波止土濃ノ前ニ積タリケレハ、祐覺是ヲ奉行シテ、諸軍勢ニ配分ス、サテコソイマタ醫王山王モ、我君ヲ捨サセ給ハサリケリト、敗軍ノ士卒悉憑シキ事ニハ思ヒケレ、

正月十一日 尊氏、京都ニ入り、洞院公賢ノ第二居ル。結城親光、伴リ降り、大友貞載ト闘ヒテ死ス。

〔梅松論〕

前文十日 建武三年正月十一日午刻許に將軍都に責入給ひて、洞院殿公賢實公の御所に御座有しに、降參の輩注すに暇あらず、かゝりける所に、イ事多かりし中に結城太田

大夫判官親光が振廻、誠に忠臣の儀をあらはしければ、みる人は申に不及、聞傳ける族イ類までも讚ぬ者こそなかりけれ、以下、親光ノ討死ノ狀ヲ載スレドモ略ス

建武三年、延元元年



〔日御崎社文書〕

地誌 亭 △六、二、九七三

承了(花押)

出雲國大野莊(秋鹿郡)内加治屋村惣領三崎三郎次郎日置政高謹言上、

欲早預御注進合戰軍忠事、

右政高去建武三年十月廿一日佐々木美作大夫判官秀貞相共、美作國發向、今月十一日、京都

責入、同十三日、勢多馳參、大將軍付于御著到、同十六日、關山合戰之時、懸前致散々軍

忠、乍被射乘馬、敵二騎打留、中間源五郎男打死畢、將又同日、三條河原于合戰、於御前

敵六騎打留、分取壹人仕、此等次第、御見知分明也、然早賜御證判、爲備于後證面目、恐

々謹言上如件、(建武三年正月日附)

〔武家年代記〕

下 卷第 同(建武三年)正十一、將軍家御歸洛

〔參考太平記〕

卷第 十四 尊氏入洛附結城親光討死事

明レハ正月十一日、元弘日記裏書作三十日、保曆間記作十三日、神明鏡、梅松論、同本文將軍八十萬騎ニテ都へ入給フ、兼テ

ハ合戰事故ナクシテ入洛セハ、持明院殿ノ御方ノ院宮々ノ御中ニ、一人御位ニ即

奉リテ、天下ノ政道ヲハ、武家ヨリ計ヒ申ヘシト議定セラレタリケルカ、持明院ノ

法皇儲君、一人モ殘ラセ給ハス、皆山門へ御幸成タリケル間、將軍自ラ萬機ノ政ヲ

尊氏持明院ヲ立テ

シ給ハン事モ叶フマシ、天下ノ事如何スヘキト、案シ煩テソオハシケル、下略

正月十二日 天皇、綸旨ヲ西上中ノ結城宗廣ニ賜ヒテ、速ニ行在ニ詣ラ

ン事ヲ命ジ給フ。又、是日、足利直義、書ヲ大友氏泰ニ與へ、義貞討伐ノ爲、

一族及ビ豊後・肥前ノ兵ヲ率中テ坂本ニ向ハシム。

〔白川文書〕

撰軒文書 纂所收 △六、二、九七七

令參洛之由被聞食、尤以神妙也、此間爲御祈禱、臨幸日吉社、被相待東國軍兵、悉可被

對治朝敵之由、所被思食也、不廻時刻馳參、可致忠節、於恩賞、殊可有其沙汰者、天氣如

此、悉之以狀、

元弘三年(建武三年)正月十二日

(備前立明方) 左少辨

結城上野入道館

〔註〕 宗廣、義貞親王ヲ奉ジテ、北島顯家ト共ニ西上中ナリ、明日、是軍、近江ニ至ル

コトヲ載ス、

〔大友文書〕

立花伯爵所藏 △六、二、九七八

新田右衛門佐義貞以下輩等討伐事、早相催一族、并豊後肥前國軍勢、馳向坂本、可抽

軍忠之狀如件、

建武三年、延元元年



建武三年正月十二日

左馬頭(花押)

大友千代松殿

(註) 足利尊氏氏泰ヲ招キシコト、去年十二月十三日ノ條ニアリ。

正月十三日<sup>(1)</sup> 奥州ノ北畠顯家、義良親王ヲ奉ジ、東國ノ新田一族ト共ニ西上シテ、是日、近江ニ至ル。其ノ將新田大館幸氏、賊ノ觀音寺城ヲ陥イレテ戰死ス。明日、奥羽軍、湖ヲ渡リテ叡山ノ官軍ニ合ス。

奥羽軍湖ヲ渡リテ官軍ニ合ス

〔神皇正統記〕(前文ハ十日) 條ニ收ム) か、りし間に、陸奥守鎮守府將軍顯家卿、この亂を聞き、親王を先にたて奉り、陸奥、出羽の軍兵を卒して責め上る。同十三日近江國につきて事の由を奏聞す、十四日に江を渡りて坂本に參りしかば、官軍大きに力を

北畠親房義良親王ヲ奉リテ上洛

得て、山門の衆徒迄も萬歳をよばひき。

山田矢橋ヲ渡ルニ

〔梅松論〕(上文一日ノ) 條ニ收ム) 去元弘三年御一統の時、北畠亞相禪門、准后腹の三の宮を懷き奉て出羽陸奥兩國の守として管領ありしほどに、五十四郡の軍勢を卒して後詰の爲に不破の關を越てむかふよし聞えけり(中略、八日ノ條ニ收ム) 去程に正月十三日より三ケ日の間、山田矢橋の渡船にて、宮井北畠禪門、出羽陸奥兩國の勢ども雲霞のごとく東坂本に參着しければ頓て大宮の彼岸所を皇居として三塔の

衆徒殘らず隨ひ奉る、(下文十六日) 條ニ收ム)

〔參考太平記〕<sup>卷第十五</sup> 北畠顯家率奥州勢著坂本事

義貞顯家鎌倉挾撃ノ計畫成功セズ

去年<sup>建武二年</sup>十一月ニ、義貞朝臣討手ノ大將承テ、關東へ下向セラレシ時、奥州國司北畠中納言顯家卿ノ<sup>准后源親房子</sup>方へ、合圖ノ時ヲ違へス攻合スへキ由、綸旨ヲ下サレタ

顯家上洛

ケルカ、大軍ヲ起ス事、容易カラサル間、兎角延引ス、剩路スカラノ軍ニ日數ヲ送ケル間、心計ハ急レケレトモ、此彼ノ逗留ニ依テ、箱根ノ合戰ニハ、ハツレ給ヒケリ、サレトモ幾程モナク、鎌倉ニ打入給ヒタレハ、將軍ハ、早箱根竹下ノ戰ニ打勝テ、聽テ上洛シ給ヒスト申ケレハ、サレハ跡ヨリ追テコソ上ラメトテ、夜ヲ日ニ繼テソ

新田一族參加ス

上洛セラレケル、<sup>天正本云、顯家ハ尊氏ノ跡ヲ追テ六萬餘騎ニテ攻上リ、足利陸奥守家長ハ、出羽奥州ノ兵ヲ相從ヘテ、又顯家ノ跡ヲ追上リ給ヒ云々</sup>サル程ニ、越後上野常陸下野ニ殘リタル新田一族、并ニ千葉宇都宮カ手勢共、是ヲ聞傳、此彼ヨリ馳加

リケル間、其勢程ナク五萬餘騎ニ成ニケリ、<sup>五萬、天正本作二十萬</sup>鎌倉ヨリ西ニハ手サス者モ無リケレハ、夜晝馬ヲ早メテ、正月十二日<sup>按、元弘日記裏書、西源院本作二十三日、事也</sup>、近江愛智河宿ニ著レケ

大館幸氏觀音寺城ヲ陷ス

リ、<sup>按、此時義良親王與顯家至坂本、而本文未及會載、義良顯家始赴奥州、及義良此時至坂本也</sup>其日大館中務大輔<sup>金勝院本云、名義親、非也、西源院本及系圖、作幸氏、爲得、按、大館宗氏子幸氏、屬顯家、赴京、也、按、氏賴者、時信子也、法名崇永、小字千手丸、其比イマタ幼稚</sup>氏、屬顯家、赴京、也、按、氏賴者、時信子也、法名崇永、小字千手丸、其比イマタ幼稚ニテ、<sup>按、建武三年氏賴十一歲</sup>楯籠リタル觀音寺ノ城郭ヲ攻落シテ、<sup>今川家、毛利家、金勝院、北條家、南都、天正本有三大將以下字、者非也、時氏賴逃而</sup>

建武三年、延元元年



湖上渡海

出敵ヲ討事都テ五百餘人五百、天正本翌日早馬ヲ先立テ、事ノ由ヲ坂本ヘ申サレタ  
リケレハ、主上ヲ始進ラセテ、敗軍ノ士卒悉悦ヲナシ、志ヲ蘇セシメスト云者ナシ、  
即道場坊助註記祐覺ニ仰附ラレ、湖上ノ船七百餘艘ヲ點シテ、志那濱ヨリ一日梅  
論作三十一日カ中ニソ渡サレケル、顯家至叡山者、神皇正統記作正爰ニ宇都宮紀清兩黨、主ノ催促  
ニ依テ、五百餘騎ニテ打連タリケルカ、宇都宮ハ、將軍方ニ在ト聞ヘケレハ、面々ニ  
暇ヲ請色代シテ、志那濱ヨリ引分レ芋洗ヲ廻テ、京都ヘコソ上リケレ、

〔元弘日記裏書〕 正月十日、義良親王、并顯家卿等、率東軍參洛、(十四日)十二日參觀山、

〔和漢合符〕四後醍醐 三丙正月十日、陸奥鎮守府將軍顯家、聞亂率軍來、同十四日、渡

江州湖水、

〔保曆間記〕第五(前文ハ一日)主上叡山ヘ行幸ならば、尊氏入洛して、あやまり申さ  
ざる由をのべ申所に、奥羽よりあきいゑの卿、兩國の勢を相具して、ひんがし坂本  
につきしかば、山門の大衆、あひともに正月十六日に京都へよせて合戦す、尊氏天  
命を恐れ、引退ば、顯家卿、義貞以下追懸せめ戦、尊氏かなひがたふして鎮西に落下  
たれば、主上則還御ならせ給ふ、

〔尊卑分脈〕清和源氏 幸氏中務權大輔、大館孫二郎、(建武三正八江州

大館幸氏  
戦死ス

〔宮下過去帳〕(上野) 十二日、建武三年五月十二日、江州觀音山ニ而討死、大館中務  
權太輔幸氏、

〔七卷册子〕 同十四日、陸奥國ヨリ親王ヲ先立奉リ、陸奥守鎮守府將軍顯家卿コ  
ノ亂ヲ聞、陸奥出羽ノ軍兵數萬人ヲ率シテ今日東坂本ニツクノヨシ、官軍大ニ力  
ヲ得ノヨシ云々、同日江州觀音寺ノ城合戦、城中ノ凶徒没落、行方ヲシラス、官軍大  
館中務大輔幸氏カ軍士コレヲ攻破ルト云々、同日尊氏卿ノ命ヲ受、細河津師、同刑  
部大輔頼春、陸奥守顯氏以下數萬人、江州ニ發向、三井寺ニ陣ス、彼寺ノ衆徒凶徒ニ  
同意カト云々、

正月十三日(2) 高師直等ノ賊軍、勢多ノ供御瀨ニ陣ス。(西上セル官軍ヲ)

〔日御崎社文書〕地誌 亨(十一日)

〔吉川家什書〕六 六、六、二、九、八、六、

安藝國宮、莊地頭周防次郎四郎親家申、

正月十三日、屬御手、罷向供御瀨、同十六日、打破粟田口、於法勝寺西門致合戦、忠節畢、  
其夜固中御門河原口、同十七日、警固西坂本畢、同十九日、罷向八幡山、同井野谷口、抽  
軍忠候了、此等次第、御檢見上者、爲後證可賜御判候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年、延元元年



(建武三年五月七日)  
附武田信武證判

〔小早川什書〕<sup>六</sup>

〔毛利文書〕<sup>百五</sup>

(何レモ十六日)  
<sup>十一</sup> (ノ條ニ收ム)

〔吉川家什書〕<sup>三十</sup>

(建武三年三月日附)

〔成言上書〕<sup>一</sup>

〔黃薇古簡集〕<sup>一</sup>

(二月七日)  
<sup>條ニ收ム</sup>

正月十六日 尊氏、細川定禪等ヲ遣シテ、園城寺ヲ援ケシム。是日、拂曉、義貞、北畠顯家ト共ニ園城寺ヲ攻メテ之ヲ陷シ、更ニ追撃シテ關山ニ戰フ。是日正午、義貞等、凶徒ヲ追ヒテ、粟田口ヨリ三條河原ニ至リ陣ヲ取ル。尊氏・直義、之ヲ邀ヘテ粟田口・十禪師・法勝寺等ニ戰フ。新田軍ノ將船田義昌・由良某等戰死ス。義貞、奮戰セシモ利アラズ、夕刻、鹿谷ニ退ク。

〔梅松論〕<sup>(前文十三日)</sup>

三井寺は元より御方なりける程に、園城寺を燒拂ふべき

十六日朝 義貞顯家 三井寺ヲ 攻陷ス

よし聞へければ、合力の爲に荒手なればとて、細川の人々を大將として四國中國の軍勢、正月十六日拂曉に發向しければ、同時に義貞を大將として、兩國の勢は北畠殿の子息國司顯家卿に隨て三井寺に向ふ、大道と濱端と二手にて數刻責戰所に、三井寺の衆徒の手より破られて、則當寺燒拂はれて、武家の勢悉く京中へ引返す、是に依て兩大將、二條河原に打立給ふ、御勢上はたゞすの森、下は七條河原まで來し所に、午の時計に粟田口の十禪師の前より錦の御旗に中黒の旗さし添て、義

船田入道 由良左衛門 官軍戰死 退

官軍鹿谷 退ク

貞大將として三條河原の東の岸に西に向ひてひかへたり、御方は大勢にて鶴翼のかこみをなし、數千騎の軍兵旗を虚空に飄し、時の聲天地をおどろかし互に射矢は雨のごとし、劍戟を掛るにいとまあらず、入亂て戰し程に、人馬の肉むら山のごとし、河には紅を流し、血を以て楯をうかべし戰も是には過じとぞ覺えし、官軍には千葉介、義貞一人當千の船田入道、由良左衛門尉を始として千余人討とらる、御方にも手負討死多かりける、暮に及んで宮方負軍にみえし時、御方勝に乗じて責戰しに、義貞白旗をさし、親光が父結城白河上野入道と共に千餘騎にして返合々々、白河の常住院の前へ中御門河原口を懸し時は、何たまるべしともみえざりし所に、小山結城一族二千餘騎にて入替て火を散して戰し程に、敵討負て鹿の谷の山に引上りしが、残りすくなにぞ見えし、是は十六日酉の終之、敵の上野入道も御方の小山結城も共に一族なりし程に、互に名乗合て戰し間、討死兩方百余人、敵も御方も同家の紋なれば、小筋の直垂を着たりしが、後々の合戰には定めて御方打あるべしとて、小山結城の勢は右の袖を割て胃にぞ付たりける、同十七日、兩侍所佐々木備中守仲親、三浦因幡守貞連、三條河原にて頭の實檢ありしかば千余とぞ聞えし、去程に官軍は山上雲母坂中靈山より赤山社の前に陣を

建武三年、延元元年

五〇五



取御方は糺河原を先陣として京白河にみちみてり(下文二十七、日條ニ收ム)

〔田代文書〕三 六、六二、九九三

承了(花押)

田代豊前市若丸申、今月十三日、馳向大津西浦、屬大將細河侍從殿御手、同十六日、合戰於濱面、懸先相戰之候間、若黨高岡彦三郎宗房、中間彌三郎男打死仕候畢、此條備中國住人新見山戸木十郎、久下彌五郎以下輩所見及候也、以同日京都合戰、於三條河原、同抽軍忠候了、以此旨可有御披露候、恐惶謹言(建武三年正月十九日附)

〔山内首藤文書〕十 六、六二、九九四

備後國山内首藤三郎通繼申軍忠事、

(中略)正月十六日、於三井寺合戰、太刀討分捕仕訖、殊手者若黨山下余介令討死、安氏余作、門田清吉被疵之條、同所合戰之間、備後國重貞、安藝國時親令見知所也、然早下賜御證判、爲備龜鏡、恐々言上如件(建武三年正月十一日附)

〔日御崎社文書〕地誌本 亨(十一日) 〔池田文書〕備前 日ノ條ニ收ム(去年十二月十一日) 〔眞乘院文書〕前田侯 七、日ノ條ニ收ム(七、日ノ條ニ收ム) 〔和田文書〕松樹孝 六、六二、九九六

〔元弘日記裏書〕 延元元年正月十六日、園城寺合戰、官軍有利、雖入洛、官軍三舍、

〔朽木古文書〕甲十 六、六二、一〇〇六

佐々木出羽四郎義氏申、屬于當御手、去正月十六日、於法勝寺合戰之時、抽軍忠、同廿七日、三條河原所々合戰之時、捨(命)命致散々合戰畢、然後迄于兵庫島御共仕、所致忠勤也、所詮賜御判、可備龜鏡候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言(建武三年正月廿八日附、某證判)

〔小早川什書〕 六、六二、九八六

安藝國安木町村地頭逸見四郎有朝申、屬御手、正月十三日、罷向供御瀨勤役所之處、同十六日、付御手、打破栗田口、於十禪師法勝寺西門、有朝旗差彦三郎被射右足畢、證人柏村又六、入野又三郎存知上者、可有御尋候、致所々合戰忠節候畢、其夜同中御門河原口、同十七日、馳向西坂本、致警固、同十九日、罷向八幡山、戌亥角固役所、抽軍忠候畢、此次第御檢見上者、爲後證可賜御判候、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言(建武三年五月七日附、武田信武證判)

〔毛利文書〕百五 六、六三、二

三戸孫三郎頼顯申、屬御手、正月十三日、罷向供御瀨、打破栗田口、致十禪師法勝寺南大門三條河原所々合戰、盡忠節候畢、其夜固二條河原口、同十七日、馳向西坂下、致警固、同十九日、相向八幡山西尾預役所、一族相共警固仕了、合戰次第御見知之上者、爲

建武三年、延元元年

十六日濱面合戰

三條河原合戰

十六日三井寺合戰

二十日法勝寺合戰 廿七日三條河原合戰

供御瀨勤 十六日栗田口合戰 寺御門河原合戰 中御門河原合戰 十七日西坂本合戰 十九日八幡山合戰



後證可下給御判候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、(建武三年五月六日、附武田信武證判)

〔吉川家什書〕六十(十三日ノ) 〔吉川家什書〕三十(建武三年三月日附、熊九代景成言上書) 〔鎮西古

文書編年録〕戸次家(去年十二月十一日ノ條ニ收ム) 〔野上文書〕(諸家文書)(去年十二月十一日ノ條ニ收ム)

〔進藤文書〕(楓軒文書)(去年十二月二十日ノ條ニ收ム) 〔黃薇古簡集〕(備前)(二月七日ノ條ニ收ム)

〔源威集〕下(羽後) 六、一九三〇六、園城寺濫觴奇瑞千万多之、殊源家舊好條々載之、去

建武三子正月十六日、官軍大將賴貞顯家卿大勢凶從(龍カ)爲先當寺奇來間、雖防戰、寺家盡力、衆徒多被疵、殞命刻、爲回祿佛像經卷灰燼、悲淚于今不乾ノ處、

〔參考太平記〕卷第 十五 園城寺戒壇事

細川定禪  
三井寺ニ  
入ル

山門貳心ナク君ヲ擁護シ奉リテ、北國奥州ノ勢ヲ相待由聞ヘケレハ、義貞ニ勢ノ屬又前ニ、東坂本ヲ急キ攻ラルヘシトテ、細川卿律師定禪、同刑部少輔按三系圖、少輔、西大輔、爲得、金勝院本云、名紀行、非也、毛利家、天正本、作、頼春、爲得、并陸奥守ヲ、金勝院本云、名資時、非也、毛利家、天正本、作、頼氏、爲得、大將トシテ、六萬餘騎ヲ存、ヨモ貳心アラシト憑レケル故ナリ、隨テ衆徒忠節ヲ致サレハ、戒壇造營ノ事、武家殊ニカヲ加ヘ、其功ヲ成ヘキ由、御教書ヲ成サル、

〔參考太平記〕卷第 十五 三井寺合戰附當寺鐘俵藤太事

大館氏明  
ノ獻策

三井寺攻  
撃

官軍部署

東國ノ勢、既ニ坂本ニ著ケレハ、顯家卿、義貞朝臣、其外宗徒ノ人々、聖女ノ彼岸所ニ會合シテ、合戰ノ評定アリ、何様一兩日ハ、馬ノ足ヲ休テコソ、京都ヘハ寄候ハメト、顯家卿宜ヒケルヲ、大館左馬助明申サレケルハ、長途ニ疲レタル馬ヲ、一日モ休候ハ、中々血下リテ、四五日ハ物ノ用ニ立ヘカラス、其上此勢坂本ヘ著タリト、敵縦聞及フ共、頼テ寄ヘシトハ、ヨモ思寄候ハシ、軍ハ不意ニ起テ、必敵ヲ拉ク習ナリ、只今夜ノ中ニ、志賀辛崎ノ邊迄打寄テ、未明ニ三井寺ヘ押寄、四方ヨリ関ヲ作テ攻入程ナラハ、御方治定ノ勝軍トコソ存候ヘト申サレケレハ、義貞朝臣モ、補判官正成モ、此議誠ニ然ルヘク候ト同セラレテ頼テ諸大將ヘソ觸ラレケル、今上リノ千葉勢勢、金勝院本、作、伊マタ宵ヨリ千餘騎ニテ、志賀里ニ陣ヲ取、大館左馬助、額田、羽川、六千餘騎ニテ、作、六十、非也、夜半ニ坂本ヲ立テ、辛崎濱ニ陣ヲ取、戸津、比叡辻、和爾堅田ノ者共ハ、小舟七百餘艘ニ取乗テ、澳ニ浮テ明ルヲ待、山門ノ大衆ハ二萬餘人、大略徒立ナリケレハ、如意越ヲ搦手ニ廻、追手ノ鬨聲ヲ揚ハ、此上有三脫字、今ニ落シ合セント、鳴ヲ靜メテ待明ス、サル程ニ坂本ニ大勢ノ著タル有様、舟ノ往反ニ見ヘテ夥シカリケレハ、三井寺ノ大將細川卿律師定禪、高大和守カ方ヨリ、京都ヘ使ヲ馳テ、東國ノ勢坂本ニ著テ、明日寄ヘキ由、其聞ヘ候、急御勢ヲ添ラレ候ヘト、

建武三年延元元年



義貞顯家  
等三井寺  
ヲ攻ム

千葉新介  
戰死

三度迄申サレタリケレ共關東ヨリ何勢カ其程迄多クハ上ルヘキツ勢ハ大略宇  
 都宮紀清兩黨ノ者共トコソ聞ユレ其勢縱誤テ坂本へ著タリトモ宇都宮京ニ在  
 ト聞ヘナハ頓テ主ノ許ヘコソ馳來ンスラントテ將軍事トモシ給ハサリケレハ  
 三井寺へハ勢ノ一騎ヲモ添ラレス夜既ニ明方ニ成シカハ源中納言顯家卿二萬  
 餘騎新田左兵衛督義貞三萬餘騎脇屋堀口額田鳥山ノ勢鳥山下、金勝院  
本載三羽川一萬五千餘  
 騎今川家本、作三一  
千五百餘騎志賀辛崎濱路ニ駒ヲ進押寄テ後陣遲シトソ待ニケル前陣ノ勢先  
 大津ノ西浦松本宿ニ火ヲカケテ聞ノ聲ヲ揚三井寺ノ勢共兼テヨリ用意シタル  
 事ナレハ西源院本云、唐院ヨリ下リ合テ、  
下居近松ニテ散々ニ射ル、云々南院ノ坂口ニ下合テ散々ニ射一番ニ千葉介千  
 餘騎ニテ推寄一二ノ木戸ヲ打破リ城ノ中へ切テ入三方ニ敵ヲ受半時許聞フタ  
 リ細川卿律師定禪カ横合ニ懸リケル四國ノ勢六千餘騎ニ六千、西源院  
本作三六萬取籠ラレテ  
 千葉新介矢庭ニ討レニケレハ其手ノ兵百餘騎百、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、  
天正本、作三百、本文此下作三百五十騎答ノ  
 敵ヲ討ント懸入懸入戰テ百五十騎討レニケレハ後陣ニ讓テ引退二番ニ顯家卿  
 二萬餘騎ニテ二萬、毛利家本作三萬、  
前已作三二萬、相繼、入替亂合テ攻戰フ其勢一軍シテ馬ノ足ヲ休レハ  
 三番ニ結城上野入道伊達信夫ノ者共五千餘騎入替テ面モ掉ス攻戰フ其勢三百  
 餘騎討レテ引退ケレハ敵勝ニ乗テ六萬餘騎ヲ二手ニ分テ濱面ヘソ打テ出タリ



大津市比叡山ヲ望ム 八四



ケル、義貞本文、脱「義貞」二字、今依「異本」補之、是ヲ見テ三萬餘騎ヲ一手ニ合セテ、利兵堅ヲ破テ進マレ  
 タリ、細川大勢ナリトイヘトモ、北ハ西源院本、大津ノ在家マテ燒ル最中ナレハ、通り  
 得ス、東ハ湖海ナレハ、水深シテ、廻ントスルニ便ナシ、僅ニ半町ニモタラヌ細道ヲ、  
 只一巡ニ前マントスレハ、和爾堅田ノ者共カ、渚ニ舟ヲ漕並テ射ケル横、矢ニ防カ  
 レテ、懸引自在ニモ無リケリ、官軍是ニ力ヲ得テ、透間モナク懸リケル間、細川カ六  
 萬餘騎ノ勢五百餘騎討レテ、三井寺ヘソ引返シケル、額田、堀口、江田、大館金勝院本、七  
 百餘騎ニテ、逃ル敵ニ追スカフテ、城ノ中ヘ入ントシケル處ヲ、三井寺ノ衆徒五百  
 餘人、木戸ノ口ニ下塞テ、命ヲ捨鬪ケル間、寄手ノ勢百餘人、塹ノ際ニテ討レケレハ、  
 後陣ヲ待テ進ミ得ス、其間ニ城中ヨリ木戸ヲオロシテ、堀ノ橋ヲソ引タリケリ、義  
 助是ヲ見テ、云甲斐ナキ者共ノ作法カナ、僅ノ木戸一ニ支ラレテ、是程ノ小城ヲ攻  
 落サスト云事ヤアル、栗生、篠塚ハナキカ、アノ木戸取テ引破レ、畑、互理ハナキカ、切  
 テ入トソ下知セラレケル、栗生、篠塚是ヲ聞テ、馬ヨリ飛テ下、木戸ヲ引破ラント、走  
 寄テ見レハ、塀ノ前ニ深ニ二丈餘ノ塹ヲ掘テ、兩方ノ岸屏風ヲ立タルカ如クナルニ、  
 橋ノ板ヲハ、皆ハネハツシテ、橋桁計ソ立タリケル、二人ノ者共如何シテ渡ルヘキ  
 トテ、左右ヲキツト見ル處ニ、傍ナル塚ノ上ニ、面三尺許有テ、長五六丈モアルラン



ト覺ヘタリケル大率都婆二木アリ、爰ニコソ究竟ノ橋板ハ有ケレ、率都婆ヲ立ルモ、橋ヲ渡スモ、功德ハ同事ナルヘシ、イサヤ是ヲ取テ渡サント云儘ニ、二人ノ者共走寄テ、小脇ニ挾テ、エイヤト拔、土ノ底五六尺掘入タル大木ナレハ、傍リノ土一二尺カ程クワツト崩レテ、率都婆ハ念ナフ拔ニケリ、彼等二人、二木ノ率都婆ヲ輕々ト打カタク、堀ノハタニツキ立テ、先自讃ヲコソシタリケレ、異國ニハ鳥獲樊噲、我朝ニハ、和泉小次郎接、名親衛、源公衡、子、清和帝裔也。朝夷奈三郎名義秀、和田義盛子、和是皆世ニ雙ナキ大力ト聞ユレトモ、我等カカニ幾程カ勝ルヘキ、云トコロ傍若無人ナリト思ハン人ハ、寄合テ力根ノ程ヲ御覽セヨト云儘ニ、二木ノ率都婆ヲ、同様ニ向ノ岸ヘソ倒シ懸タリケル、率都婆面平ニシテ、二木相並タレハ、宛モ四條五條ノ橋ノ如シ、爰ニ畑六郎左衛門時、能、且理新左衛門金勝院本云、名政重、下倣之。二人橋ノ爪ニ有ケルカ、御邊達ハ、橋渡ノ判官ニ成給ヘ、我等ハ合戦ヲセント戲レテ、二人共ニ橋ノ上ヲササラト走渡リ、塹ノ上ナル逆茂木共取テ引除、各木戸ノ脇ニソ著タリケル、是ヲ防キケル兵共、三方ノ土矢間ヨリ、鎗長刀ヲ差出シテ、散々ニ鏖ケルヲ、且理新左衛門、十六迄奪テソ捨タリケル、畑六郎左衛門是ヲ見テ、ノケヤ且理殿、其扉引破テ、心安ク人々ニ合戦セサセント云儘ニ、走懸リ右ノ足ヲ舉テ、木戸ノ關ノ木ノ邊ヲ二踏三踏ソ踏タリケル、餘

畑、且理

一ノ木戸ヲ破ル

三井寺陥落

舟田經政策ヲ獻ス

ニ強ク踏レテ、二筋渡セル八九寸ノ關ノ木、中ヨリ折テ、木戸ノ扉モ扉柱モ、同クトウト倒レケレハ、防カントスル兵五百餘人、四方ニ散テ颯ト引、一ノ木戸已ニ破レケレハ、新田ノ三萬餘騎ノ勢、城ノ中ヘ懸入テ、先合圖ノ火ヲコソ揚タリケル、是ヲ見テ、山門ノ大衆二萬餘人、如意越ヨリ落合テ、則院々谷々ヘ亂入、堂舍佛閣ニ火ヲ懸テ、喚叫テソ攻タリケル、猛火東西ヨリ吹懸テ、敵南北ニ充滿タレハ、今ハ叶ハシトヤ思ヒケン、三井寺ノ衆徒共、或ハ金堂ニ走入、猛火ノ中ニ腹ヲ切テ伏、或ハ聖教ヲ抱テ、幽谷ニ倒レ轉フ、多年止住ノ案内者タニモ、時ニ取テハ行方ヲ失フ、況四國西國ノ兵共、方角モ知ヌ煙ノ中ニ、目ヲモ見上ス迷ヒケレハ、只此彼ノ木ノ下岩ノ陰ニ疲レテ、自害ヲスルヨリ外ノ事ハ無リケリ、サレハ半日許ノ合戦ニ、大津松本三井寺ノ内ニ、討レタル敵ヲ數ルニ、七千三百餘人ナリ、

〔參考太平記〕

卷第十五

正月十六日京合戦附船田入道討死事

三井寺ノ敵事故ナク攻落シタリケレハ、長途ニ疲タル人馬、一兩日機ヲ扶テコソ、又合戦ヲモ致サメトテ、顯家卿坂本ヘ引返サレケレハ、其勢二萬餘騎ハ、彼越ニ相從フ、新田左兵衛督モ、同坂本ヘ歸ラントシ給ヒケルヲ、舟田長門守經政金勝院本、作、經馬、馬ヲ叩テ申ケルハ、軍ノ利勝ニ乘時、逃ルヲ追ヨリ外ノ手段ハ非ト存候、此合戦ニ打

建武三年、延元元年



追撃戦

漏サレテ、馬ヲ棄、物具ヲ脱テ、命計ヲ助ラント落行候敵ヲ追懸テ、京中へ押寄ル程ナラハ、臆病神ノ附タル大勢ニ引立ラレ、自餘ノ敵モ、定テ機ヲ失ハシカ、サル程ナラハ、官軍敵ノ中へ紛レ入テ、勢ノ分際ヲ敵ニ見セスシテ、此ニ火ヲカケ、彼ニ関ヲ作リ、縦横無礙ニ懸立ル者ナラハ、ナトカ足利殿御兄弟ノ間ニ近ツキ奉リテ、勝負ヲ仕ラテハ候ヘキ、落候ツル敵、ヨモ幾程モ隔リ候ハシ、何様一追追懸テ見候ハヤト申ケレハ、義貞我モ此儀ヲ思ヒツル處ニ、イシクモ申タリ、サラハ頼テ追懸ヨトテ、又旗ノ手ヲ下シテ、馬ヲ進メ給ヘハ、新田ノ一族五千餘人<sup>五千、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作二</sup>ヲ追懸タル、敵今ハ遙ニ隔リヌ<sup>五十、爲</sup>其勢三萬餘騎、走ル馬ニ鞭ヲ進テ、落行敵ヲ追懸タル、敵今ハ遙ニ隔リヌ<sup>得、</sup>ラント覺ユル程ナレハ、逃ルハ大勢ニテ遅ク、追ハ小勢ニテ早カリケレハ、山階邊ニテ漸敵ニソ追附ケル、由良、長濱、吉江、高橋<sup>金勝院本、載、</sup>眞前ニ進テ追ケルカ、大敵ヲハ欺クヘカラストテ、廣ミニテ敵ノ返シ合ツヘキ所迄ハ、サマテ追ス、遠矢射懸射懸、関ヲ作ル計ニテ、靜々ト是ヲ追、道迫リテ、而モ敵ノ行前難處ナル山路ニテハ、カサヨリ落シ懸テ、透間モナク射落シ斬伏ケル間、敵一度モ返シ得ス、只我先ニトソ落行ケル、サレハ手ヲ負タル者ハ、其儘馬人ニ踏殺サレ、馬ニ離タル者ハ引兼テ、力ナク腹切ケリ、其死骸谷ヲウメ溝ヲ埋ミケレハ、追手ノ爲ニハ、道平ニ成テ、彌輪

由良長濱  
吉江高橋  
黒田船田

京都合戦  
新田軍部

足利ノ陣

義貞ノ戦

敵軍中ニ  
潜入セシム

寶ノ山谷ヲ平クルニ異ナラス、將軍三井寺ニ軍始タリト聞ヘテ後、黒煙天ニ覆テ見ヘケレハ、御方如何様負軍シタリト覺ルソ、急キ勢ヲ遣セトテ、三條河原ニ打出先勢汰ヲソシ給ヒケル、懸ル處ニ、栗田口ヨリ馬煙ヲ立テ、其勢四五萬騎カ程<sup>毛利、</sup>引テ出來タリ、誰ヤラント見給ヘハ、三井寺へ向シ四國西國ノ勢共ナリ、<sup>作四五百、</sup>誠ニ皆軍手痛クシタリト見ヘテ、薄手少々負ヌ者モナク、鎧ノ袖、兜ノ吹返ニ、矢三筋四筋折懸ヌ人モ無リケリ、サル程ニ新田左兵衛督、二萬三千餘騎<sup>前作三萬、</sup>ニ分テ、一手ヲハ、將軍塚ノ上へ擧、一手ヲハ眞如堂ノ前ヨリ出シ、一手ヲハ法勝寺ヲ後ニ當テ、二條<sup>毛利家本、</sup>河原へ出シテ、則相圖ノ煙ヲソ擧ラレケル、自ラハ華頂山ニ打上テ、敵ノ陣ヲ見渡シ給ヘハ、上ハ河合森ヨリ、下ハ七條河原マテ、馬ノ三頭ニ手繩ヲ打懸、鎧ノ袖ニ袖ヲ重テ、東西<sup>西源院、天正本、</sup>南北四十餘町カ間<sup>天正本作、</sup>立ル計ノ地モ見ヘス、身ヲ側テ打圍タリ、義貞朝臣、弓杖ニスカリ下知セラレケルハ、敵ノ勢ニ、御方ヲ合スレハ、大海ノ一滴、九手カ一毛ナリ、只尋常ノ如クニ軍ヲセハ、勝コトヲ得難シ、相互ニ面ヲ識シレタラシム侍共、五十騎ツ、手ヲ分テ、笠驗ハ取捨、旗ヲ卷テ、敵ノ中ニ紛入テ、此彼ニ控々、暫ク相待ヘシ、將軍塚へ上セツル勢、既ニ軍ヲ始ムト見ハ、此陣ヨリ兵ヲ進テ關シムヘシ、其時ニ至テ、御邊達、敵ノ前後



新田ハ平好ムノ懸ヲ  
師泰將軍  
塚ヲ責メ  
テ敗ル  
脇屋義助  
堀口貞満  
大館氏明

左右ニ旗ヲ差擧テ、馬ノ足ヲ靜メス。前ニ在カトセハ、後ヘヌケ、左ニ在カトセハ、右ヘ廻テ、七縱八横ニ亂テ敵ニ見スル程ナラハ、敵ノ大勢ハ、却テ御方ノ勢ニ見ヘテ、同士打ヲスルカ、引テ退カ、尊氏此二ツノ中ヲ出ヘカラスト、韓信カ謀ヲ出サレシカハ、諸大將ノ中ヨリ、逞兵五十騎ツ、勝リ出シテ、二千餘騎毛利家、西源院、天正本、作三、二十六、按、以五十騎爲三、一、探、則三百人也、各一様ニ中黒ノ旗ヲ卷テ、紋ヲ隱シ、笠驗ヲ取テ、袖ノ下ニ斂メ、三井寺ヨリ引殿レタル勢ノ眞似ヲシテ、京勢ノ中ヘソ馳加リケル。敵懸ル謀有トハ、將軍思寄給ハス、宗徒ノ侍共ニ向テ下知セラレケルハ、新田ハ、イツモ平場ノ懸ヲコソ好ムト聞シニ、山ヲ後ニ當テ、頓テモ懸出ヌハ、如何様小勢ノ程ヲ敵ニ見セシト思ヘル者ナリ、將軍塚ノ上ニ取アカリタル敵ヲ置テハ、イツ迄カ守上ヘキ、師泰彼ニ馳向テ、追散セト宣ケレハ、越後守、畏テ承候ト申テ、武藏相模ノ勢二萬餘騎ヲ率シテ、雙林寺ト中靈山トヨリ、二手ニ成テソ上タリケル。爰ニハ脇屋右衛門佐、堀口美濃守、大館左馬助、結城上野入道以下三千餘騎ニテ向タリケルカ、其中ヨリ逸物ノ射手六百餘人ヲ勝リテ、馬ヨリ下シ、小松ノ陰ヲ木楯ニ取テ、指詰引詰散々ニソ射サセタリケル。嶮シキ山ヲ上兼タリケル武藏相模ノ勢トモ、物具ヲ洞サレテ、矢場ニ伏、馬ヲ射ラレテ、ハネ落サレケル間、少猶豫シテ見ヘケル處ヲ、得タリ賢シト三千

全軍激戰

潛入兵起

餘騎ノ兵共、拔連テ大山ノ崩ルカ如ク、眞例ニ落シ懸タリケル間、師泰カ兵二萬餘騎、一足ヲモタメス、五條河原ヘ颯ト引退、爰ニテ杉本判官西源院本、杉本作、杉原、金勝院本、松本判官高包、曾我二郎左衛門モ金勝院本云、名祐信、恐非也、祐信、曾我太郎之名也、仕三朝、其子孫不、當、先祖名、金勝院本亦載、以北源六政就、討レニケリ、官軍態長追ヲ受テ、關ヲ作ル、官軍ノ二萬餘騎ト、將軍ノ八十萬騎ト、入替入替天地ヲ響シテ戰タル。漢楚八ケ年ノ戰ヲ一時ニ集メ、吳越三十度ノ軍ヲ百倍ニナストモ、猶是ニハ過ヘカラス、寄手ハ小勢ナレ共、皆心ヲ一ニシテ、懸ル時ハ一度ニ颯ト懸テ、敵ヲ追マクリ、引時ハ手負ヲ中ニ立テ、靜ニ引、京勢ハ大勢ナリケレトモ、人ノ心調ハスシテ、懸ル時モ汰ハス、引時モ助ケス、思々心々ニ聞ケル間、午刻ヨリ酉終マテ、六十餘度ノ懸合ニ餘、西源院、天正本、作五、寄手ノ官軍、每度勝ニ乘スト云事ナシ、サレトモ、將軍方大勢ナレハ、討ルレトモ、勢モスカス、逃レトモ、遠引セス、只一所ニミコラヘ居タリケル處ニ、最初ニ紛レテ敵ニ交リタル一揆ノ勢兵、將軍ノ前後左右ニ、中黒ノ旗ヲ差擧テ、亂合テソ戰ヒケル、何レヲ敵、何レヲ御方トモ辨ヘ難ケレハ、東西南北喚叫テ、只同士打ヲスルヨリ外ノ事ソ無リケル、將軍ヲ始奉リテ、吉良石堂高上杉ノ人々金勝院、天正本、載、高山、天正本、又載、吉見桃井、今川、荒川、是ヲ見テ、御方ノ者共カ敵ト成合テ、後矢ヲ射ルヨト思ハレ



足利軍總退却

細川定禪ノ奇襲策

ケレハ、心ヲ置合テ、高上杉ノ人々ハ、山崎ヲ指テ引退キ、將軍吉良石堂仁木細川ノ人々ハ、丹波路ヘ向テ落給フ、官軍彌勝ニ乗テ、短兵急ニ拉ク、將軍今ハ逃ル所ナシト思召ケルニヤ、梅津桂河邊ニテハ、鎧ノ草摺疊上テ、腰ノ刀ヲ拔ントシ給フ事、三箇度ニ及ケリ、サレトモ將軍御運ヤ強カリケン、日既ニ暮ケルヲ見テ、追手桂河ヨリ引返ケレハ、將軍モ姑松尾葉室ノ間ニ引ヘテ、梅酸ノ渴ヲソ休ラレケル、爰ニ細川卿律師定禪、四國ノ勢共ニ向テ宣ケルハ、軍ノ勝負ハ、時ノ運ニ依事ナレハ、強ニ恥ナラネトモ、今日ノ負ハ、三井寺ノ合戰ヨリ事始リツル間、我等カ瑕瑾、人ノ嘲ヲ遁レス、サラハ態他ノ勢ヲ雜ヘスシテ、花ヤカナル軍一軍シテ、天下ノ人口ヲ塞カハヤト思フナリ、推量スルニ新田カ勢ハ、終日ノ合戰ニ草臥テ、敵ニ當リ變ニ應スル事自在ナルマシ、其外ノ敵共ハ、京白河ノ財寶ニ目ヲ懸テ、一所ニ在ヘカラス、其上赤松筑前守、僅ノ勢ニテ、下松ニ控テ有ツルヲ、無體ニ討セタランモ口惜カルヘシ、イサヤ殿原、蓮臺野ヨリ北白河ヘ打廻テ、赤松カ勢ト成合、新田カ勢ヲ、一當當テ見ント宣ヘハ、藤橘伴ノ者共、仔細候マシトソ同シケル、定禪斜ナラス喜テ、態將軍ニモ知セ奉ラス、伊豫讚岐ノ勢中ヨリ、三百餘騎ヲ勝リテ、北野ノ後ヨリ上賀茂ヲ經テ、番ニ北白河ヘソ廻リケル、糺ノ前ニテ三百餘騎ノ勢十方ニ分テ、下松、藪里、靜

新田軍敗退

舟田入道大館、由良、高田等戰死

義貞ト定禪ノ武略

堀口右馬之介

原、松崎、中賀茂、三十餘箇所ニ火ヲ懸テ、此ヲハ打捨テ、一條二條ノ間ニテ、三處ニ關ヲソ揚タリケル、實モ定禪律師推量ノ如ク、敵京白河ニ分散シテ、一處ヘ寄ル勢少カリケレハ、義貞義助一戰ニ利ヲ失テ、坂本ヲ指テ引返シケリ、處々ニ打散タル兵共、俄ニ周章テ引ケル間、北白河、粟田口ノ邊ニテ、舟田入道、大館左近藏人、由良三郎左衛門尉由良、北條家、南都本、作三良田、高田七郎左衛門金勝院本作高田右衛門佐、而載江田九郎、二階堂判官、久下孫六左衛門、藤島平太、鳥羽管、以下宗徒ノ官軍數百騎討レケリ、卿律師頓テ早馬ヲ立テ、此由ヲ將軍ヘ申サレタリケレハ、山陽山陰兩道ヘ落行ケル兵共、今川家、北條家、南都本、其勢三千人、云々、皆又京ヘソ立歸ル、義貞朝臣ハ、僅ニ二萬騎ノ勢ヲ以テ、按、段首云、義貞率三萬餘騎、追、北攻、京、今云三二萬、者、組、將軍ノ八十萬騎ヲ懸散シ、定禪律師ハ、亦三百餘騎ノ勢ヲ以テ、官軍ノ二萬餘騎ヲ追落ス、彼ハ項王カ勇ヲ心トシ、是ハ張良カ謀ヲ宗トシテ、智謀勇力、イツレモ取々ナリシ人傑ナリ、

(註) 本文二十七日ノ鴨河原合戰ト混敍セルモノ多ケレドモ、記述ノマ、ニ此處ニ掲グ。

〔保曆間記〕第五條(十三日ノ)

〔宮下氏過去帳〕(上野) (十六日)

正月十七日 武田信武等ノ賊徒西坂本ニ馳向ヒ警固ス。〔黃薇古簡集〕



〔小早川什書〕〔毛利文書〕(何レモ十六日ノ條ニ收ム)〔吉川家什書〕(十三日ノ條ニ收ム)

正月十八日 足利直義、義貞等ノ北國ニ没落スベキヲ誤察シ、本郷泰光ニ令シテ、兵ヲ近江萱津方面ニ出シ、其ノ路次ヲ打塞ガシム。

〔古文書〕淺草文 本郷大和守 △六、三、一、

新田義貞、同與黨事、可逃下北國旨、早馳越近江國、萱津以下要害所々、打塞路次、可誅伐落人等之狀如件、

建武三年正月十八日

(直書) 左馬頭 剛

(本郷泰光) 美作次郎藏人殿

〔註〕 二十七日條太平記ニ記セル正成ノ策謀ニ陥リシ賊方ノ誤算ト併セ考フベシ。

正月十九日 武田信武等ノ賊徒、八幡山ヲ守ル。

〔毛利文書〕百五十一 〔小早川什書〕六 〔黃薇古簡集〕一 (十六日ノ條ニ收ム)

正月二十日<sup>(1)</sup> 足利直義、義貞等ノ敗北ヲ告ゲテ、内藤教廉ノ兵ヲ召ス。

〔萩藩閥閱録〕五十八 内藤次郎左衛門 △六、三、一、

新田義貞以下輩没落了、早速馳參可致軍忠之狀如件、

建武三年正月廿日

(教廉) 高田原内藤左衛門二郎殿

(直書)

正月二十日<sup>(2)</sup> 先ニ東山道ヨリ尊氏追討ニ遣サレシ梟王・洞院實世等ノ官軍、東坂本ニ歸著ス。

〔参考太平記〕卷第十五 正月二十七日合戰附大智院宮彈正尹宮著御坂本事

懸ル處ニ、去年十二月ニ當作三十一日、諸本第十四卷云、建武二年十一月、一宮尊良親王、發三向關東、同月大智院宮彈正尹宮、又發京、今作十二月、非也。一宮關東へ

御下有シ時、搦手ニテ東山道ヨリ、鎌倉へ御下有シ大智院宮、彈正尹宮、禪正尹宮、今川家、金勝院、西源院、南都本、作尾張宮、天正本作尾崎宮。

竹下箱根ノ合戰ニハ、相圖相違シテ、逢セ給ハサリシカトモ、

甲斐、信濃、上野、下野ノ勢トモ馳參シカハ、御勢雲霞ノ如クニ成テ、鎌倉へ入セ給フ、

此ニテ事ノ様ヲ問ヘハ、新田竹下箱根ノ合戰ニ打負テ引返ヌ、尊氏朝臣北ヲ追テ

上洛セラレヌ、其後奥州國司顯家卿、亦尊氏朝臣ノ跡ヲ追テ、攻上ラレ候ヌト申

ケル、サラハ何様道ニテ新田蹈留ラハ、合戰有ヌヘシ、鎌倉ニ逗留スヘキ様ナシト

テ、公家ニハ洞院左衛門督實世、持明院右衛門督入道右衛門、金勝院、天正本、作左兵衛、西源院本作右兵衛、諸本第十四卷作兵衛、而今

作右衛門者、恐非也、金勝院本云、号源雄、亦與前組、信濃國司堀河中納言金勝院、西源院本云、名光繼、園中將基隆金勝院本作基隆、前後組、且據系

圖、非二條少將爲次、武士ニハ島津上野入道上野、西源院本作上總、諸本第十四卷作上總、今相組是、是、

建武三年、延元元年

五二一

東山道軍  
鎌倉ニ入

歸西



按、了光、蓋義 同筑後前司 金勝院本云、名中彌、 大友猿子ノ一黨 西源院本不載、大友一 落合ノ一族、饗庭、石谷、  
 頼綱、伊木、津志、中村、村上、信濃 本文脱、信濃字、今依、與本、補之、 源氏、仁科、高梨、志賀、眞壁 金勝院本載、山田、木曾、更科、 是  
 等ヲ宗徒ノ者トシテ、都合其勢二萬餘騎、正月二十日ノ晚景ニ、東坂本ニソ著ニケ  
 ル、官軍彌勢ヲ得テ、翌日ニモ頓テ京都ヘ寄ント議シケルカ、打積キ惡日ナリケル  
 上、餘ニ強ク乗タル馬共ナレハ、皆スクミテ更ニハタラキ得サリケル間、兎ニ角ニ  
 延引シテ、今度ノ合戰ハ二十七日ニソ定ラレケル (下文二十七日、ハ條ニ收ム)  
 [七卷册子] 同廿日、去年東山道ノ搦手トシテ東國エ下向ケル大智院宮彈正  
 尹宮使別當實世卿以下、軍兵數萬人ヲ率シテ申ノ刻、東坂本ニ着スト云々、官軍彌  
 イキホヒヲ得ト云々、

正月二十五日 是頃、日向ノ官軍伊藤祐廣、肝付兼重等、賊徒ト戰フ。足  
 利方、是ヲ義貞與同之仁ト稱ス。

[薩藩舊記] 前集十三 眞本野田 △、六、三、一三、  
 土篠原武右衛門家藏

新田右衛門佐義貞誅伐事、去年被下關東御教書訖、而肝付八郎兼重以下輩、令同意  
 義貞、於日向國所々舉旗、既及合戰之由、當國守護代、并島津莊總政所等、依馳申、所差  
 遣羽月四郎右衛門尉元眞也、早相催一族、馳向彼所、可被退治候、仍執達如件、

建武三年正月廿五日

廣武又次郎入道殿

太宰少貳 (諸家文書ニハ、花押ヲ載セタリ)

[薩藩舊記] 前集十三 眞本高岡 △、六、三、一三、  
 土富滿大右衛門家藏

薩摩國邪堂院富光九郎道貞、馳向日向國諸縣郡八代、新田右衛門佐義貞與黨之仁、  
 伊東藤内左衛門尉肅慶、以下輩爲誅伐、去月廿九日、押寄彼城、捨身致合戰、土持左衛  
 門太郎茂被疵候、且土持七郎、同新兵衛尉、總政所親類、參河國參河公、同橋内兵衛尉  
 以下、於戰場雖見知候、爲後證可入申候也、恐惶謹言 (建武三年二月四日附、大前遣、貞ヨリ土持左衛門太郎宛)

正月二十七日 義貞等ノ官軍、山ヲ下リテ京都ニ攻寄ス。義貞、賀茂河  
 原ニ尊氏・直義ノ大軍ヲ擊破シ、之ヲ桂川ニ追ヒ退ケタレトモ、細川定禪  
 ノ軍ニ敗レテ兵ヲ退ク。二十八日、官軍、再ビ山ヲ下リテ神樂岡ニ戰フ。  
 三十日、官軍、糺河原以下諸所ニ戰ヒ、勝利ヲ獲テ、尊氏ヲ丹波ニ追フ。  
 是日、天皇、京都ニ還幸シ給フ。

[梅松論] (前文十六日、條ニ收ム) 同正月廿七日辰刻に敵二手にて河原と鞍馬口を下りにむ

かふ所に、御方も二手にて時を移さず掛合て、入替て數刻戰しに、御方討負て河原  
 を下りに引返しければ、敵利を得て手重く懸りける、兩大将御馬を進められて思

建武三年、延元元年

五二三

賀茂河原  
 足利軍敗



上杉戦死

尊氏桂ニ退却

細川定禪戦死

定禪義貞軍ヲ破ル

新田義貞公篇

召切たる御氣色みえし程に、勇士ども我も〜と御前にすゝみて防戦し所に、上杉武庫禪門を始として三浦因幡守、二階堂下總入道行全、曾我太郎左衛門入道、所々に返合返合て打死しける間に、河原を下りに七條を西へ、桂を越て御陣を召る、彼人々命を捨てて忠節を致しけるこそ難有けれ、去程に御方大宮を下りに、作道を山崎へ一手にて返引し、爰に先立て千本口を下りに敵むかふべしとて、細川の人々大將として四國勢内野の右近馬場邊に控て相待所に、爰には敵むかはずして、下京に烟あまた所々、にみえて時の聲しきりに聞えければ、細川の人々中御門を東へむかふ所に、河原口にて錦の旗さしたる大勢に懸合て退散し、旗指討取て旗をうばひ取、西坂本まで責詰て、假内裏焼拂ひ勝鬨作て河原を下りに打て行所に、又大勢二條河原より四條邊迄さゝへたり、御方かとみる所に、義貞以下宗徒の敵控たる間、細川定禪兄弟おめき叫で懸りし程に、此勢も散々にちらされて粟田口苦集滅路に趣てぞ落行ける、洛中に充滿しける敵共悉追拂て、七條河原にひかへて兩大將を尋申所に、在地の者共云けるは、御方の御勢は二手にて、一手は七條を西へ、一手は大宮を南へ、作道をさして引給ひけると申ければ、細川の人々いそぎ桂川を馳渡りて、亥刻計に御陣に參て京中の敵追拂ひたるよし申されける間、即

二十八年日神樂岡戦

葛西某戦死義貞ト誤ララル

義貞重代の鎧薄金

三十日紀河原合戦足利軍敗北

打立て七條を東へ入らせ給ひしに、同河原にて夜あけしかば廿八日なり、さしも御方の大勢洛中を引退しに、細川の人々相殘て敵を打散しければ、御威再三也、されば忝も御自筆の御書を以錦の御直垂を兵部少輔顯氏に送給也、弓矢の面目何事か是にしかんとて見聞の輩彌忠を盡し命を軽くしけるとかや、其比は卿公定禪をば鬼神のやうにぞ申ける、去程に同日の申の時計に、又山の勢神樂岡を下るあいだ、御方の軍兵馳向て責戦し程に、越前國住人白河小次郎義貞と號して討て頸を取、赤威の鎧をはぎ取て持來る間、諸人大慶の思ひをなす所に、是は義貞にてはあらず、葛西の江判官三郎左衛門が頸なり、存日に、義貞に顔色こつがら少も替らず、赤威の鎧を着たりけるを、聞ゆる義貞重代の鎧薄金と同毛なる間、一旦大將討取たりとて御方のよろこびけるも斷也、翌日廿九日は合戦なし、一昨日山崎へ引退し御方少々歸參しける、同正月晦日の夜半計より糺河原の合戦初りて今日を限りと戦しかども、御方の軍破れて二階堂信濃判官行周討死す、去年八月の初、武將東夷を静めむ爲に都を御出有て、相摸次郎諷訪の祝以下退治の間、海道の所々の合戦を致して、鎌倉に御下向の同冬、君と臣との間に御心よからざる哀有て、矢矧河の戦より東士利をうしなひて箱根の籠りたりしが、又足柄の合戦より御

建武三年、延元元年



尊氏篠村  
ニ陣ス

かた勝し程に、其儘責上て洛中に亂入、雌雄兩年に及ぶ間、弓折矢つき、馬疲人氣をうしなひし故に御方の戰破て、其日の夕に丹波の篠村に御陳を召る、(下文二月三日條ニ收ム)

〔能登妙嚴寺文書〕

△、六、三、一九

目安

一大和國野田九郎左衛門尉賴經申、

去正月十日、奉落高倉内親王於邊都、其後、馳向山城、爲北畠侍從家大將軍、爾處相催群勢、可致京都後寄之由、令談合群勢等之處、面々領掌之間、至于賴經者、其子細爲言上、同廿六日、馳參山門、合申西室殿之刻、同廿七日、御合戰之間、馳向戰場、致軍忠畢、然者、賜御威令旨、重欲致軍忠問事、

一齋藤上總左衛門尉佐利、同舍弟兵衛尉忠利申、

去正月廿七日、致合戰、馳參山門、同卅日、抽軍忠畢、

一田島安房左衛門二郎行春申、

去正月十日、奉落高倉内親王於邊都、數日令祇護、(於力)同廿七日、致京都合戰、馳參山門、同卅日、抽軍忠畢、

卅日、抽軍忠畢、

右彼輩等、當御所奉公之間、於同日同所、致合戰畢、

高倉内親  
王

新田貞政

於外様支證者、新田民部大夫貞政、癸巳、廿七日合戰見知了、於卅日合戰者、牧田彌九郎光政、齋藤左衛門入道宗德所見了、  
右各賜御威令旨、重爲致軍忠、目安言上如件、

建武三年二月日

〔忽那文書〕

△、六、三、二一、  
(伊豫)

無相違(花押)

伊豫國忽那島東浦(風早)地頭次郎左衛門尉重清、致軍忠由事、

右尊氏直義爲誅罰、下賜討手給旨、屬大將軍洞院左衛門督殿(實世)御手、發向山陽道之、致隨分之軍忠、令參洛畢、隨而自山門西坂本、去正月廿七日、爲同御手馳向搦手賀茂河原、責下上北小路河原口、捨身命致合戰、被射馬畢、同廿八日、馳向大手致合戰、同晦日、馳向搦手致散々合戰之上、重爲四條河原、相向朝敵入高橋黨、致散々合戰、責落畢、次依大將軍仰、火口河原口在家懸火畢、次馳向内野、責付丹州追山畢、此等子細御見知之上者、賜御一見書、備向後龜鏡、彌爲致弓箭面目、言上如件、

建武三年二月三日

〔眞乘院文書〕

前田侯爵所藏(七日ノ條ニ收ム)

〔三刀屋文書〕

諸家文書(十日、叡山行幸ノ條ニ收ム)

建武三年、延元元年

五二七

二十七日  
賀茂河原  
合戰

三十日合  
戰  
丹波大江  
山



〔薩藩舊記〕

前集十三 入來本田氏藏 △六三三二二

本田左衛門尉久兼軍忠事、

右屬于島津上總前司入道々鑑貞久之手、去正月廿七日、賀茂河原合戰之時、致先懸、被切斂乘馬、同廿八日、於神樂岡之下、及散々之合戰、打取御敵三人、同卅日、二條大宮、并西七條合戰之時、致軍忠之次第、下野六郎、同七郎、被見知之間、有御尋之時、不可有其隱、然早給恩賞、彌向後欲抽軍忠、仍恐々言上如件、(建武三年三月十一日附島津貞久證判)

〔薩藩舊記〕

前集十三 山田氏文書 △六三三二二

島津式部孫五郎入道々慶(山田宗久)謹言上、

欲早依度々軍忠、預御注進、給恩賞事、

右道慶最前、馳參御方、去正月廿七日、鴨河原合戰之時、致軍忠之條、即御見知畢、同廿八日、召捕直伯耆守長年若黨和賀尾彌太郎、并兵衛次郎、令具參多々須河原、屬于當御手申入之處、可被誅之、由直被仰下被切畢、同卅日、於五條河原致合戰之條、島山小松孫太郎見知畢、然早且預御注進、且爲賜御承判、恐々言上如件、(建武三年三月日附)

〔進藤文書〕

楓軒文書(幕所收) (去年十二月二十七日ノ條ニ收ム)

〔池田文書〕

備前(何レモ去年十二月十一日ノ條ニ收ム)

〔山内首藤文書〕

長門(十一) 〔玉燭寶典第七裏書〕(尊氏二階堂行周) (何レモ去年十二月十一日ノ條ニ收ム)

〔元弘日記裏書〕 今年元延正月十日(中)官軍有利雖入洛、官軍三舍、廿七八日有合戰、同三十日、凶徒沒落丹波國、

〔園太曆〕

(正月十日、山門行幸條ニ收ム)

〔建武三年以來記〕 同月(正月)卅日、彼卿(尊氏)以下沒落京都、下向鎮西畢、今日以前、於洛中度々有合戰、

〔公卿補任〕

十三 正月晦日、東軍沒落西國、

〔建武三年以來記〕

主上今日(正月三十日)還幸河東慈眼僧正坊、

〔神皇正統記〕

後醍醐天皇(正月) 同(正月) 十六日より合戰はしまりて、卅日終に朝敵をおい

おとす、やかて其夜還幸し給、

〔大乘院日記目錄〕

一 卅日還幸、

〔西明寺文書〕

(山城) △六三三四五

爲朝敵追罰、被召群勢處、馳參條神妙之由、依阿蘇宮令旨、執達如件、(建武三年正月卅日附、前少進奉大山崎上下保神)

〔參考太平記〕

(前文ハ二十日ノ條ニ收ム)

既ニ其日ニ成ヌレハ、人馬ヲ休ン爲ニ、宵ヨリ楠結

城伯耆三千餘騎ニテ西坂ヲオリ下テ、下松ニ陣ヲ取、顯家卿ハ、三萬餘騎ニテ、毛利家

建武三年、延元元年

三十日御還幸

二十七日合戦官軍配置



官軍神樂岡ヲ攻ム

妙觀院因幡懸者全

本作三千、非也、前  
後作三萬、今祖師、  
赤山ニ陣ヲ取、山徒ハ一萬餘騎ニテ、一萬、金勝院、本、作三萬、龍花越ニ廻テ、鹿谷ニ陣ヲ取、新田左  
兵衛督兄弟ハ、二萬餘騎ノ二萬、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作三萬、勢ヲ率シ、今道ヨリ向テ、北白河  
ニ陣ヲ取、北白河、金勝院、天正本、作三萬、大手搦手都合十萬三千餘騎、按、攻レ京兵上所載通計、八萬三千也、今祖師、皆、宵ヨリ  
陣ヲ取寄タレトモ、敵ニ知セシト、態籌火ヲハ燒サリケリ、合戦ハ明日辰刻ト定ラ  
レケルヲ、機早ナル若大衆共、武士ニ先ヲセラレシトヤ思ヒケン、マタ卯刻ノ始ニ  
神樂岡ヘソ寄タリケル、此岡ニハ宇都宮、紀清兩黨、城郭ヲ構テソ居タリケル、サレ  
ハ、左右ナク寄著テ、人ノ攻ヘキ様モ無リケルヲ、助註記祐覺カ同宿共三百餘人、一  
番ニ木戸口ニ附テ、堀ヲ隔テ闘ケルカ、高槽ヨリ大石數多投懸ラレテ引處ニ、南岸  
圓宗院カ同宿トモ五百餘人、入替テソ攻タリケル、是モ城中ニ名譽ノ精兵トモ多  
カリケレハ、走廻テ射ケルニ、多ク物具ヲ洞サレテ、叶ハシトヤ思ヒケン、皆持楯ノ  
陰ニ隠レテ、新手代レトソ招キケル、爰ニ妙觀院ノ因幡懸者全村トテ、三塔名譽ノ  
惡僧アリ、鏢ノ上ニ大アラ目ノ鎧ヲ重テ、備前長刀ノシノキサカリニ長刀、西源院、南都本、作三太刀、  
菖蒲形ナルヲ脇ニ挟ミ、篋ノ太サハ、尋常ノ人ノ褻目カラニスル程ナル、三年竹ヲ  
モキツケニ推、削テ、長船打ノ鐵ノ、五分整程ナルヲ、管木迄ナカコヲ打通ニシテネ

神樂岡ヲ陷ス

楠、結城、名和

チスケ、沓卷ノ上ヲ琴ノ絲ヲ以テ、ネタマキニ卷テ、三十六差タルヲ森ノ如クニ負  
ナシ、態弓ヲハ持ス、是ハ手撞ニセンカ爲ナリケリ、切岸ノ面ニ二王立ニ立テ名乗  
ケルハ、先年三井寺ノ合戦ノ張本ニ召レテ、越後國ヘ流サレタリシ、妙觀院高因幡  
全村ト云ハ、高、北條家、金勝院、南都本、作、惡、西源院本作、荒、我事ナリ、城中ノ人々、此矢一ツ進ラセ候ハン、遊サ  
レテ御覽候ヘト云儘ニ、上差一筋拔出テ、櫓ノ矢間ヲ手撞ニソ撞タリケル、此矢誤  
マタス、矢間ノ陰ニ立タリケル鎧武者ノ、センタンノ板ヨリ、後ノ總角附ノ金物迄、  
裏表二重ヲ洞テ、矢サキニ二寸許出タリケル間、其兵櫓ヨリ落テ、二言モイハス死ニ  
ケリ、是ヲ見ケル敵共、アナ夥シ、凡夫ノワサニ非スト懼テ、色メケル處ヘ、禪智房  
護聖院ノ若者トモ千餘人拔連テ攻入ケル間、宇都宮神樂岡ヲ落テ、二條ノ手ニ馳  
加ル、是ヨリシテソ、全村ヲ手撞ノ因幡トハ名附ケル、山法師鹿谷ヨリ寄テ、神樂岡  
ノ城ヲ攻ル由、兩黨ノ中ヨリ申ケレハ、將軍頓テ後攻ヲセヨトテ、今川細川ノ一族  
ニ、三萬餘騎ヲ差副テ遣サレケルカ、城ハ早攻落サレ、敵入替ケレハ、後攻ノ勢モ、徒  
ニ京中ヘソ歸ケル、サル程ニ楠判官結城入道、伯耆守三千餘騎ニテ、糺ノ前ヨリ押  
寄テ、出雲路ノ邊ニ火ヲ懸タリ、將軍是ヲ見給ヒテ、是ハ如何様神樂岡ノ勢共ト覺  
ルソ、山法師ナラハ、馬上ノ懸合ハ心ニクカラス、急キ向テ驅散セトテ、上杉伊豆守、  
建武三年、延元元年



楠流ノ楯

顯家ト尊氏ノ合戦

義貞義助貞満氏明ノ奮戦

スハヤ例ノ中黒ヨ

島山修理大夫、足利尾張守ニ、五萬餘騎ヲ差副テソ向ラレケル、楠ハ元來勇氣無雙ノ上、智謀第一ナリケレハ、一枚楯ノ輕々トシタルヲ、五六百帖ハカセテ、板ノ端ニ懸金ト壺トヲ打テ、敵ノ驅ントスル時ハ、此楯ノ懸金ヲ懸、城ノ楯楯ノ如ク、一二町カ程ニ一本二、毛利家本作三三ツキ並ヘテ、透間ヨリ散々ニ射サセ、敵ヒケハ、究竟ノ懸武者ヲ五百餘騎勝リテ、同時ニハツト驅サセケル間、防手ノ上杉島山カ五萬餘騎、楠カ五百餘騎ニ五百、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作八百、揉立ラレテ、五條河原ヘ引退、五條、金勝院、本作三三條敵ハ是計カト見ル處ニ、奥州ノ國司顯家卿、二萬餘騎ニテ、粟田口ヨリ推寄テ、車大路ニ火ヲ懸ラレタリ、將軍是ヲ見給ヒテ、是ハ如何様北畠殿ト覺ルソ、敵モ敵ニコソヨレ、尊氏向ハテハ叶フマシトテ、自ラ五十萬騎ヲ率シ、四條五條ノ河原ヘ馳向テ、追ツ返ツ入替入替、時移ル迄ソ戦ハレケル、尊氏卿ハ、大勢ナレトモ、軍スル勢少シテ、大將已ニ戦ヒ草臥給ヒヌ、顯家卿ハ小勢ナレハ、入替ル勢無シテ、諸卒忽ニ疲レヌ、兩陣互ニ戰屈シテ、忿ヲ抑ヘ、馬ノ息續居タル處ヘ、新田左兵衛督義貞、脇屋右衛門佐義助、堀口美濃守貞満、大館左馬助氏明、三萬餘騎ヲ三手ニ分三萬、前作二萬、今相組、天正本、作二千、非也、雙林寺、將軍塚、法勝寺ノ前ヨリ、中黒ノ旗五十餘流差セテ、二條河原ニ雲霞ノ如クニ、打圍タル敵ノ中ヲ、眞横様ニ懸通リテ、敵ノ後ヲ截ント京中ヘコソ懸イラレケル、敵是ヲ

義貞、尊氏ヲ狙フ  
里見、島山  
賊軍總退却

正成ノ獻策

見テ、スハヤ例ノ中黒ヨト云程コソアレ、鴨川白河京中ニ稻麻竹葦ノ如クニ打圍フタル大勢トモ、馬ヲ馳倒シ弓矢ヲカナクリ捨テ、四角八方ヘ逃散事、秋ノ木ノ葉ヲ山下風ノ吹立タルニ異ナラス、義貞朝臣ハ態鎧ヲ脱易馬ヲ乗替テ、只一騎敵ノ中ヘ懸入懸入、何クニカ尊氏卿ノオハスラン、選ヒ打ニ討ント窺給ヒケレトモ、將軍運強クシテ、遂ニ見ヘ給ハサリケレハ、力ナク其勢ヲ十方ヘ分テ、逃ル敵ヲ追セラレケル、中ニモ里見島山ノ人々、僅ニ二十六騎ノ勢ニテ、今川家本作二百五十騎丹波路ノ方ヘ落ケル敵二三萬騎有ケルヲ、萬、天正本、作百將軍ニテソオハスラント心得テ、桂河ノ西迄追ケル間、大勢ニ返合ラレテ、一人モ殘ラス討レニケリ、サテコソ十方ニ分テ追ケル兵モ、ソ、ロニ長追ナセソトテ、皆京中ヘハ引返シケル、角テ日已ニ暮ケレハ、楠判官總大將ノ前ニ來テ申ケルハ、今日ノ御合戦、不慮ニ八方ノ衆ヲ傾クト申セトモ、サシテ討レタル敵モ候ハス、將軍ノ落サセ給ヒケル方ヲモ知ス、御方僅ノ勢ニテ、京中ニ居候程ナラハ、兵皆財寶ニ心ヲ懸テ、如何ニ申トモ、一處ニ打寄事有ヘカラス候、去程ナラハ、前ノ如ク又敵ニ取テ返サレテ、度方ヲ失フ事、治定有ヘシト覺候、敵ニ少モ機ヲ附ヌレハ、後ノ合戦シニクキ事ニテ候、只此儘ニテ今日ハ引返サセ給ヒテ、一日馬ノ足ヲ休メ、明後日ノ程ニ寄テ、今一當手痛ク戦フ程ナラハ、ナ

建武三年延元元年



官軍京ヲ引キ上グ

尊氏京都ニ歸ル

朝敵ノ故カ

略正成ノ謀

義貞顯家正成等戰死ト流言セシム

トカ敵ヲ十里二十里カ外迄追靡ケテハ候ヘキト申ケレハ、大將實モトテ、坂本ヘソ引返サレケル、將軍ハ今度モ丹波路ヘ引給ハント、寺戸ノ邊マテオハシマシタリケルカ、京中ニハ敵一人モ殘ラス、皆引返シタリト聞ヘケレハ、又京都ヘソ歸給ヒケル、此外八幡山崎、宇治勢多、嵯峨仁和寺、鞍馬路ヘ懸リテ落行ケル者共モ、是ヲ聞テ、皆我モ我モト立歸リケル、入洛ノ體コソ恥カシケレトモ、今モ敵ノ勢ヲ見合スレハ、百分カ一モナキニ、毎度カク追立ラレ、見苦キ負ヲノミスルハ、直事ニアラス、我等朝敵タル故カ、山門ニ咒詛セラル、故カト、謀ノ拙キ所ヲハ聞テ、人々怪シミ思ハレケル、心ノ程コソ愚ナレ、

尊氏都落附、藥師丸歸京事

楠判官山門ヘ歸テ、翌日朝律僧ヲ二三十人毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作三三人作り立テ、京ヘ下シ、此彼ノ戰場ニシテ、尸骸ヲソ求サセケル、京勢怪シミテ、事ノ由ヲ問ケレハ、此僧トモ悲歎ノ涙ヲ押テ、昨日ノ合戰ニ、新田左兵衛督殿天正本載、義助北畠源中納言殿、楠判官已下、宗徒ノ人々七人迄、討レサセ給候程ニ、供養ノ爲ニ、其尸骸ヲ求候ナリトソ答ヘケル、將軍ヲ始奉リテ、高上杉ノ人々是ヲ聞テ、アナ不思議ヤ、宗徒ノ敵共カ、皆一度ニ討レタリケル、サテハ勝軍ヲハシナカラ、官軍京ヲハ引タリケル、何クニカ

官軍没落ヲ裝フ

官軍京都ニ費下ル

其首共ノ有ラン、取テ獄門ニ懸大路ヲ渡セトテ、敵御方ノ尸骸トモノ中ヲ求サセケレトモ、是コソト覺シキ首モ無リケリ、餘ニアラマホシサニ、爰ニ面影ノ似タリケル首ヲ二ツ、獄門ノ木ニ懸テ、新田左兵衛督義貞、楠河内判官正成ト、書附ヲセラレタリケルヲ、如何ナルニクサウノ者カシタリケン、其札ノ側ニ、是ハニダ首ナリ、マサシケニモ書ケル虚事カナト、秀句ヲシテソ書副テ見セタリケル、又同日夜半許ニ、楠判官下部トモニ松明ヲ二三千燃シ連サセテ、小原鞍馬ノ方ヘソ下シケル、京中ノ勢トモ是ヲ見テ、スハヤ山門ノ敵トモコソ、大將ヲ討レテ、今夜方々ヘ落行ケニ候ヘト申ケレハ、將軍モ實モトヤ思ヒ給ヒケン、サテハ落サヌ様ニ、方々ヘ勢ヲ差向ヨトテ、鞍馬路ヘハ三千餘騎、小原口ヘ五千餘騎、勢多ヘ一萬餘騎、宇治ヘ三千餘騎、嵯峨仁和寺ノ方迄洩サヌ様ニ固メヨトテ、千騎二千騎差分テ、勢ヲ置レサル方モ無リケリ、サテコソ、京中ノ大勢大半減シテ、殘ル兵モ、徒ニ用心スルハ無リケリ、去程ニ官軍宵ヨリ西坂ヲオリ下テ、八瀬、藪里、鷺森、下松ニ陣ヲ取、諸大將ハ皆一手ニ成テ、二十九日西源院本作、晦日、按、長曆、建武三年正月小盡、晦即二十九日也、梅松論以三、二、十九日晦日、爲三兩日、則正月爲三、大盡、予、可、疑、梅松論出、子、下、可、并、見、卯刻ニ二條河原ヘ押寄テ、在々處々ニ火ヲカケ、三所ニ圍ヲソ揚タリケル、京中ノ勢ハ、大勢ナリシ時タニモ、叶ハテ引シ軍ナリ、マシテ勢ヲハ大略方々ヘ分遣サレヌ、敵寄

建武三年、延元元年



賊軍退却  
尊氏丹波  
曾地ニ落  
ツ

ヘシトハ夢ニモ知ヌ事ナレハ、俄ニ周章フタメキテ、或ハ丹波路ヲ指テ引モアリ、或ハ山崎ヲ志テ逃ルモアリ、心モ發ラヌ出家シテ、禪律ノ僧ニ成モアリ、官軍ハサマテ遠ク追サリケルヲ、跡ニ引御方ヲ、懸ル敵追ソト心得テ、久我暇、桂河邊ニハ、自害ヲシタル者モ數ヲ知スソアリケリ、況ヤ馬物具ヲ棄タル事ハ、足ノ踏所モ無リケリ、將軍ハ、其日丹波ノ篠村ヲ通り、曾地ノ内藤三郎左衛門入道道勝カ館ニ著給ヘハ、四國西國ノ勢ハ、山崎ヲ過テ、芥河ニソ著ニケル、親子兄弟骨肉主從互ニ行方ヲ知ス落行ケレハ、討レタル者ヲモ生テソ有ラント憑ミ、生タル者ヲモ討レテソ死シツラント悲ム、此上、本文有「脱文」、今依「異本」補之。

〔參考太平記〕卷第十五 後醍醐天皇自山門還幸（本文、二月十一日條ニ收ム）

〔大友田原系圖〕（豐後） △、六、十七、六八〇。直貞（號大友、號田原、豐前藏人三郎入道、法名正覺、

貞廣（號田原、豐前守、豐前司、豐前六郎藏人、又新藏人、法名觀意、

建武元年十一月晦日、豐後國香賀地庄地頭職三分貳、河邊安壽、同三分一、時、貞廣直幸爲勳功之賞可領知之旨、後醍醐天皇被下綸旨、散位長兼被傳之矣、

建武三年正月十一日、唐橋室町合戰、惣領大友左近將監親時爲討死之時、結城太田判官觀光之一族、分取於次郎左衛門之頭矣、（貞廣）

建武三年正月十六日、二條河原合戰爲魁、同日右肩被射疵、同日右足甲切疵、又被切於乘馬畢、建武三年正月晦日、内野官廳合戰、右肘被射疵、刺被切殺乘馬果毛畢、

建武三年六月六日、山門西坂本合戰之時、左額被射疵、并腰大傷、丸被疵、

建武三年八月廿八日、自二條河原至吉田口爲魁、左手指四被切疵矣、同日同所又被切乘馬七箇所畢、

建武三年十月廿日、依于軍忠被疵、賜尊氏公御感之御下文矣、

右記之外正月以來同至八月、鄰都所々合戰致軍忠、同四年正月三日、下賜直義公御感之證判矣、且又若黨數輩討死或被疵者、載別紙了焉、

觀應二年正月廿九日、爲軍功之賞、尊氏公御感之御證判、豐後國々東郷（領人下、下賜之矣、

文和元年十一月廿二日、爲勳功之賞、義詮公豐後國日出庄（戶次院前次郎、朝臣、下賜之矣、

文和二年二月、於筑前國針摺原戰死、

二月一日 尊氏、丹波篠村ニ陣シ、同八幡宮ニ土地ヲ寄附ス。

〔三寶院文書〕（山城） △、六、三、五二、

寄附 篠村八幡宮、

丹波國佐伯莊地頭職事、

右爲天下泰平所願成就、所寄附如件、

建武三年二月一日

（尊氏） 源朝臣（花押）

二月三日<sup>(1)</sup> 尊氏、丹波ヲ發シ、是日、兵庫ニ到ル。傍ラ、持明院ノ院宣ヲ賜ラント策ス。

〔梅松論〕（前文、去月二十七） 翌る建武三年二月朔日、猶都に責入べき其沙汰有とい

建武三年、延元元年



二月三日  
尊氏兵庫  
ニ着ツ  
摩耶城ニ  
陣セント  
ノ意見

兵庫ヲ陣  
ト定ム

へども、退て功をなすは武略の道なりとて、細川イナシの入々赤松以下西國の輩を案内者として申されけるは、先御陳を攝津の國兵庫の島にうつされて、當所の船を點じて、兵糧イとし等人馬の息をつがせて、諸國の御方に志を同して同時に都に責入べしとて、三草山通に播磨のいなみ野に出て、同二月三日、兵庫の島に御着有處に、赤松入道圓心參て申けるは、當所は要害の地にあらず、御座痛敷候、兩大將をば圓心が摩耶の城にうつし奉り、軍勢は當津に陳を取べし、兵庫と摩耶の間五十町、よし申處に、或勇士の云、圓心が意見其儀なきにあらずといへども、是は當御陳計の御用心の義イなり、去年より天下二に分れて、諸國に敵御方對面して勝負を決せぬ國おほかるべし、一夜にても兩大將城に御座あらば、遠方に聞及ては、敵は利を得て御方は力を落すべし、始終の利こそ大切なれ、何ぞ御陳摩耶にうつされがたきものイかと申ければ、其時圓心、當所は要害にあらざるに依て愚意の及處を申上候計也、更に諸國の事思ひもよらず、遠方の聞え尤大切なる間、縦城に御座候共御出有べきにてこそ候べけれと赤松此儀に同じければ、當處御陳に定めらる、(下文ハ十ニ收ム)

〔風雅和歌集〕(九旅歌)

世中さはかしく侍ける比(三三)みくさの山をとおりて、大く(四)ら谷といふところにて、  
前大納言尊氏

今むかふかたはあかしの浦なからまた晴やらぬわか思ひかな

〔参考太平記〕(前文ハ去月二十七日ノ條ニ收ム)

サレトモ將軍ハ正シク別事無テ、尾宅宿ヲ過サセ給候ナリト、分明ニ云者アリケレハ、兵庫湊河ニ落集リタル勢ノ中ヨリ、丹波へ飛脚ヲ立テ、急キ攝州へ御越候へ、勢ヲ集テ頓テ京都へ攻上リ候ハント申ケレハ、二月二日將軍會地ヲ立テ、攝津國へソ越給ヒケル、天正本云、尊氏ハ、仁木、細川、土岐存孝、佐々木、宗徒ノ兵ヲ引具シテ、攝津國へ越給フ、云々、此時熊野山ノ別當四郎法橋道有カ天正本未依異本改之、藥師丸トテ童體ニテ御供シタリケルヲ、將軍喚寄給テ忍ヤカニ宣ケルハ、今度京都ノ合戦ニ、御方毎度打負タル事、全ク戦ノ咎ニ非ス、熱事ノ心ヲ案スルニ、只尊氏ヒタスラ朝敵タル故ナリ、サレハ如何ニモシテ、持明院殿ノ院宣ヲ申賜テ、天下ヲ君ト君トノ御争ニ戒テ、合戦ヲ致サハヤト思フナリ、御邊ハ、日野中納言殿ニ所縁有ト聞及へハ、是ヨリ京都へ歸上テ、院宣ヲ伺ヒ申テ見ヨカシト仰ラレケレハ、藥師丸畏テ承リ候トテ、三草山ヨリ暇申テ、則京へソ上リケル、尊氏請レ賜テ持明院殿院宣者、梅松論爲ニ赤松圓心所ニ諫、而出テ子豊島河原合戦下ニ詳註ニ下段ニ可ニ合見

豊島河原合戦事

建武三年・延元元年

尊氏攝津  
ニ越ス  
尊氏藥師  
丸ヲ遣シ  
テ持明院  
ノ院宣ヲ  
賜ラント  
策ヲス  
日野中納  
言



尊氏湊河  
ニ附ク

宇都宮武  
田等官軍  
ニ降ル

新田義貞公篇

五四〇

將軍湊河ニ著給ヒケレハ、機ヲ失ツル軍勢トモ、又色ヲ直シテ、方々ヨリ馳參リケル間、程ナク其勢二十萬騎ニ成ニケリ、此勢ニテ頓テ攻上リ給ハ、又官軍京ニハ、タマルマシカリシヲ、湊河ノ宿ニ、其事トナク三日迄逗留有ケル間、宇都宮五百餘騎道ヨリ引返シテ、官軍ニ屬シ、八幡ニ置レタル武田式部大輔モ、堪兼テ、降人ニ成ヌ、其外此彼ニ隱居タリシ兵トモ、義貞ニ屬シケル間、官軍彌大勢ニ成テ、龍虎ノ勢ヲ振ヘリ、(下文ハ二月十一日ノ條ニ收ム)

二月三日<sup>(2)</sup> 名和長年、播磨近江寺衆徒ニ旨ヲ傳ヘテ、尊氏直義ヲ伐タシム。

〔近江寺文書〕(附) △六、三、五五

足利尊氏并直義爲誅罰衆徒之中、於宿老者致御祈禱精誠、至于若輩者令發向、可被抽軍忠、於恩賞者、不可有子細之狀、依仰執達如件、

建武三年二月三日

(名和長年)  
伯耆守

近江寺衆徒御中

二月四日 尊氏、京都ニ於テ義貞ニ打勝チ難キヲ告ゲテ、大友貞順ヲ招ク。

〔大友文書〕(二)

(立花伯耆守所藏)

△六、三、五七

於京都者、新田義貞一族を追落、雖龍叡山、洛中要害難治也、不過時刻馳參可誅伐與、黨凶徒等、然者殊可有恩賞候之狀如件、

建武三年二月四日

(尊氏)  
(花押)

大友近江次郎殿

二月五日<sup>(1)</sup> 尊氏、島津忠兼・廣峯貞長ヲシテ、義貞ノ受領タル播磨ニ下向シテ一族ヲ催サシム。

〔島津文書〕(色川) 三 △六、三、五八

(尊氏)  
(花押)

(合脱カ)  
下向播州、相催一族、一日可抽軍忠之狀如件

建武三年二月五日

(島津忠兼)  
周防五郎三郎殿

〔廣峯文書〕(乾)

(播磨) △六、三、五九

令下向播州、相催一族、不日可(抽)軍(忠)之狀如件、

建武<sup>(三)</sup>年<sup>(二)</sup>二月五日

(廣峯)  
(花押)

建武三年、延元元年

五四一



廣峯 [ ] (又太郎貞長へ宛テ)  
タルモノナルヘシ)

二月五日(2) 肥後ノ人稅所延繼、足利方ノ義貞追伐ノ檄ニ應ジテ、小貳賴  
尙ニ著到ヲ報ズ。

〔相良文書〕(肥後) 二十七 △六、三六二

依被誅伐新田右衛門佐義貞、肥後國稅所新兵衛尉延繼馳參候、以此旨可有御披露  
候、恐惶謹言、

建武三年二月五日

右兵衛尉延繼(裏判)

(少貳賴尙)  
承了(花押)

進上 御奉行所

二月六日 新田ノ一族、楠木正家ト共ニ佐竹ノ族ト常陸ニ戰フ、

〔金砂兩山大權現大緣起〕(諸寺文書 纂四所收) △六、三六四

上總入道義篤公(貞義ノ誤、下之ニ倣フ) 當山御籠城之事、建武三年二月、入道將軍賴義公十二  
代佐竹上總入道義篤公、依爲將軍之味方、以後醍醐天皇之勅命、新田之氏族楠木一  
家、卒數萬之軍兵、責於常陸國、義篤公又構於當山城、鄣防官軍、及數日雖防戰、城堅固  
而不落、正成(正家ノ誤) 謀曰、去治承之昔、此祖佐竹別當秀義、背右大將軍之御旨、籠此城

新田・楠  
ノ一族  
陸ヲ責ム

之時、二品自以東八箇國之軍兵、圍而雖責之所元來究竟之要害、終不得拔之、謀伯父  
藏人義季、而求歸忠而降之、非計策不可有利云々、因茲雖回策、佐竹普代之將卒、義重  
勵忠、不得何求、良久而謀於那珂之一族、而既及危殆處、足利之氏族、將軍方之兵、殿馳  
來而救之、官軍忽敗、濱而終御運開當山、

〔常陸密藏院藏古文書〕 △六、二五〇三

子息五郎義直、六郎義冬、軍忠事、於義直者、去年七月廿四日、武藏國鶴見合戰之時、致  
討死、至義冬者、今年二月六日、於常陸國久慈西郡、誅伐楠木判官正成代之時、同致討  
死、餘殊所感思也、於恩賞者、追可有其沙汰之狀如件、(建武三年九月廿八日 附佐竹上總入道(貞義)宛)

〔藥王院文書〕一 △六、三六三、(延元々年五月 四日附某證判)

著到 常陸國

右佐竹幸乙丸代、云入野七郎次郎 [ ] 助房、自今年去建武三月、二月廿五日至、于今、馳

籠當(備)○久慈郡(今那)茨連(那)左近藏人正家(楠)之楯及合戰之○遲參仕候也、仍著到如件、

二月七日 賊徒武田信武ノ據リシ八幡山、陥ル。

〔黃薇古簡集〕(備前) △六、三六七

波多野彦八郎景氏申、今年正月十二日、屬于御手京著仕、同十三日、馳向供御瀬、同十

建武三年、延元元年

五四三



十九日八幡城ニ籠ル八幡山ノ苦戦

新田義貞公篇

五四四

六日、山僧以下凶徒等令下洛之間、自當所致後縮馳出法勝寺前、致至極軍忠、追登山上訖、同十七八兩日、發向西坂本、同十九日馳籠八幡城、迄于同二月七日致忠畢、爰彼合戰最中、將軍家御下向兵庫島之間、御敵等得理天寄來、取圍彼城之間、雖欲馳參御坐當島、敢以不叶所存之間、唯於當所可討死仕旨存之、已被趣于自害之庭事度々也、而不慮雖存命仕、倩案忠勤淺深、是併等于討死功者哉、然者奉捨大將、落失軍勢多之、所詮早任事實、可給御證判候、恐惶謹言(建武三年二月廿五日附武田信武證判)

武田兵庫助殿

一見狀

於八幡城被合戰之時、當手軍勢數千騎雖多落失、殘留被致合戰忠之條、殊以神妙候、於恩賞者、無相違候様、可令注進狀如件(建武三十二年二月廿五日附信武ヨリ、波多野彦八郎へノ感狀)

〔參考太平記〕(三日ノ條ニ收ム)

二月八日 義貞、播磨近江寺衆徒ニ令シテ、赤松則村ノ攝津摩耶城ヲ攻撃セシム。義貞、左中將ト押署セル事、是日ノ書狀ニ初見ス。

〔近江寺文書〕

〔播磨〕

△六三七一

尊氏與同凶徒等、播磨摩耶城(武庫)云々、不日馳向彼所、可被致軍忠之狀如件、

五〇 義貞公軍令狀(五五九頁参照)

四九 義貞公軍令狀



播磨明石郡押部谷村 近江寺藏



三好吉川 元光氏藏



建武三年二月八日

近江寺衆徒中(近江寺ハ播磨明石郡近江村ニアリ)

左(義貞)中將(花押)

(註)

大日本史料ニ曰、義貞ノ押署ニ左中將トアルハ、此ヲ初見トス、サレドモ、拜

除ノ月日ヲ詳カニセズ、太平記ニハ攝津ヨリ凱旋セシ時ノ事トセリ、ト。

又二月三日條ノ梅松論ニ則村、尊氏ニ其陣ヲ摩耶城ニ取ラン事ヲ薦メシ

事ト參照スベシ。

二月十一日 前日、楠木正成、尊氏ト攝津打出西宮濱ニ戰フ。是日、義貞等、又豊島河原ニ尊氏ト戰ヒ、之ヲ兵庫ニ走ラス。

〔梅松論〕

(前文ハ三日ノ條ニ收ム)

去程に先度御教書を給る周防の守護大内豊前守、長門の

守護厚東入道兩人兵戰五百艘、當津に參じたりければ、此荒手を以都へ責登るべしとして二月十日、兵庫を御立有ける所に、宮方にも楠大夫判官正成和泉河内兩國の守護として攝津の國西宮濱に馳合て、追つ返しつ終日戰て兩陣相支ふる所に、夜に入て如何思ひけむ、正成没落す、翌日十一日、細川の人々大將として周防長門の勢を相隨て責上る間、義貞は同國瀬川の河原にて懸合て爰を限に責戰ける程に、細川阿波守和氏の舍弟源藏人頼春は深手を負給けり、合戰(イタガヒ)在(イ)にしそむじて、兩

建武三年、延元元年

五四五

正成、尊氏ト西宮濱ニ戰フ

義貞、尊氏ト瀬川ニ戰フ



則村、  
落ヲ九  
氏ニ州  
薦ム

則村、  
氏ニ院  
ヲ申請  
ス事ハ  
ス

陳を取て相支へ、人馬の息をぞつがせける、か、<sup>イナシ</sup>りける處に、夜更<sup>イナシ</sup>て赤松入道<sup>イナシ</sup>圓心<sup>イナシ</sup>、  
潜に將軍の御前に参りて申けるは、縦此陳を打破て都へ責入といふとも、御方疲  
て大功をなしがたし、しばらく御陳を西國へ移されて軍勢の氣をもつがせ、馬を  
も休、弓箭干戈の用意をも致して重て上洛有べき歟、凡合戦には旗を以て本とす、  
官軍は錦の御旗を先だつ、御方は是に對向の旗なきゆへに朝敵に相似たり、所詮  
持明院殿は天子の正統<sup>イナシ</sup>にて御座あれば、先代滅亡以後定而叡慮心よくもあるべ  
からず、急<sup>イナシ</sup>に院宣を申くだされて錦の御旗を先立<sup>イナシ</sup>らるべき也、去年御合戦に御方  
利をうしなひし事は、大將軍西の方に有しゆへに、關東より御發向の時、毎度戦の  
利なかりし也、然といへども、御運に依て御上洛相違なし、今西國より責上り候は  
ば洛中の敵<sup>イナシ</sup>は大將軍の方にむかふべき間、旁御本意を達せらるべし、先四國へは  
細川の一家下向あるべし、中國攝津國<sup>イナシ</sup>播磨兩國をば圓心ふまゆべきなり、鎮西の  
事は太宰筑後入道妙恵が子三郎將監貳人今に供奉す、先達て妙恵御教書給間、定  
て忠節を致すべし、大友左近將監が去七月、京都にて親光が爲に討死す、家督千代  
松丸は幼稚の間、一族家人數百人當陳に祇候す、中國四國九州の軍勢を相隨て季  
月の内に御歸洛何の疑ひかあらん、先摩耶城の麓に御座有べしと再三忠言をも

尊氏兵庫  
ニ至ル

西宮濱手  
ノ合戦

十一日打  
出山ノ戦

六月六日  
西塔口戦

六月十三  
日西塔  
面合戦

て申ける程に、夜半計に瀬川の御陣を退て、十二日卯刻に兵庫に入御有<sup>(下文十二日  
條ニ收ム)</sup>

〔萩藩閥録〕<sup>百廿一ノ一</sup> △、六、三、七、六、

石見國周布郷總領地頭御神本彦次郎藤原兼宗申軍忠事、

今月十日、於西宮濱手、抽隨分軍忠之間、自身被疵<sup>頭被</sup>、畢、并若黨川井十郎家保令打  
死者也、此等次第御檢知上者、賜御證判、可備向後龜鏡候、此旨可有御披露候、恐惶謹  
言<sup>(建武三年  
二月日附)</sup>

〔入江文書〕<sup>一</sup> △、六、三、七、六、

目安 豊前藏人三郎直貞法師<sup>法名正曇</sup> 申軍忠條々、

一 今年<sup>建武</sup> 二月十一日、於攝津國打出山之戰場、總領<sup>大友</sup>同一族等相共致合戦、若  
黨彌太郎<sup>右足</sup>、藤三郎<sup>右足</sup>、被疵之條、大炊四郎<sup>大</sup>以下一族等見及訖、  
一 同年六月六日、馳向西塔口、若黨兵衛三郎<sup>右肘</sup>、六郎<sup>右膝</sup>、右衛門次郎<sup>右足甲</sup>、中間  
次郎太郎<sup>右肩</sup>、各所被疵也、

一 同十三日、西塔千束峯合戦、中間又次郎<sup>右目下被射</sup>、同十八、十九、廿日三箇日、攻上於  
西塔南中尾、日夜抽戦功、十八日、中間又六<sup>左肩</sup>、孫三郎<sup>右肘</sup>、廿日、若黨草地七郎<sup>右膝</sup>、  
各被疵訖、

建武三年、延元元年



六月晦日  
吉田河原  
合戦

新田義貞公篇

五四八

一同月晦於吉田河原之軍陣、愚息五郎三郎直幸、兩度懸先追落御敵、若黨野依平六分取頸一訖、

一凡自六月五日、及同廿日、晝夜不離戰場、抽動原之上、去正月京都合戰之時、正曇父子三人、每度懸先、自身各被疵、親類若黨等、討死、手負、既及廿餘人之間、於兵庫島、被經御注進訖、加之、將軍家鎮西御下向之時、云在國云御上洛、不退令祇候、度々合戰、每度致拔群戰功之條、總領御存知之上者、任傍例、且賜御一見狀、且欲預注進、仍目安如件、

建武三年八月日

承候畢沙彌(花押)

〔真乘院文書〕(前田公爵) (正月七日ノ) (多田院文書) (去年十一月二十)

〔元弘日記裏書〕 (同) 卅日、凶徒沒落丹波國、後沒落攝津國兵庫浦、顯家卿義貞

朝臣等發向、

〔參考太平記〕(前文ハ三日) 二月五日、顯家卿、義貞朝臣、十萬餘騎ニテ都ヲ立テ、其日

攝津國芥河ニシテ著レケル、將軍此由ヲ聞給ヒテ、去ハ行向テ合戦ヲ致セトテ、將軍舍弟左馬頭ニ十六萬餘騎ヲ

軍勢二月六日巳刻ニ、ハシタナク豊島河原ニテソ行合ケル、按三梅松論、此合戦日時、及勝敗、前後甚殊、詳出子下、可并考、互ニ旗ノ手ヲ下シテ、東西ニ陣ヲ張南北ニ旅ヲ屯ス、奥州國司眞先ニワタリ合テ、

二月六日  
豊島河原  
合戦

脇屋義助

楠正成

賊兵庫ニ  
退ク

大友厚東  
隊内ノ船  
隊土居得能  
ノ船隊

小清水ニ  
對陣

軍利アラス引退テ息ヲ續ハ、宇都宮入替テ一面目ニ備ント攻戦フ、其勢二百餘騎討レテ引退ケハ、脇屋右衛門佐、二千餘騎ニテ入替タリ、敵ニハ仁木細川高島山北北條家、南都本、先日ノ恥ヲ雪メント、命ヲ棄テ戦フ、官軍ニハ、江田大館里見鳥山、是ヲ破ラレテハ、何クヘカ引ヘキト、身ヲ無ニ成テソ防キケル、サレハ互ニ死ヲ輕クセシカトモ、遂ニ雌雄決セスシテ、其日ハ戰ヒ暮シテケリ、爰ニ楠判官正成後馳ニテ下リケルカ、合戦ノ體ヲ見テ、面ヨリハ懸ラス、神崎ヨリ打廻テ、濱ノ南ヨリソ寄タリケル、西源院本云、楠ヲクレ馳ニ下ケルカ、合戦ノ體ヲ見テ、ヒソカニ己カ勢七百餘騎ヲ、左馬頭ノ兵、終日ノ軍ニ戰ヒ草臥タル上、敵ニ後ヲ裏レシト思ヒケレハ、一戰モセテ、兵庫ヲ指テ引退、義貞頓テ追懸テ、西宮ニ著給ヘハ、直義ハ猶相支テ、湊河ニ陣ヲソ取レケル、同七日ノ朝ナキニ、遙ノ澳ヲ見渡セハ、大船五百餘艘順風ニ帆ヲ舉テ、東ヲ指テ馳タリケル、何方ニツタ勢ニカト見ル處ニ、二百餘艘ハ楫ヲ直シテ、兵庫ノ島ヘ漕入、三百餘艘ハ、帆ヲツイテ、西宮ヘソ漕寄ケル、是ハ大友厚東、大内介カ、將軍ヘ上リケルト、伊豫土居得能カ、御所方ヘ參リケルト、漕連テ昨日迄ハ同湊ニ泊リタリシカ、今日ハ兩方ヘ引分テ、心々ニソ著タリケル、新手ノ大勢、兩方ヘ著ニケレハ、互ニ兵ヲ進メテ、小清水ノ邊ニ馳向將軍方ハ目ニ餘ル程ノ大勢ナリケレトモ、日比ノ兵、新手ニ

建武三年、延元元年

五四九



新手ノ合戦

土居得能ノ奮戦

セサセントテ、軍ヲセス、厚東大友ハ、又強ニ我等計カ大事ニ非スト思ヒケレハ、サシモ勇メル氣色モナシ、官軍方ハ、雙ヘテ云ヘキ程ナキ小勢ナリケレトモ、元來ノ兵ハ是人ノ大事ニ非ス、我身ノ上安否ト思ヒ、新手ノ土居得能ハ、今日ノ合戦、云甲斐ナクシテハ、河野ノ名ヲ失フヘシト、機ヲ礪心ヲ勵セリ、サレハ兩陣イマタ聞ハサル前ニ、安危ノ端、機ニ顯レテ勝負ノ色暗ニ見タリ、サレトモ新手ノ驗ナレハ、大友厚東、大内カ勢三千餘騎三、西源院本作二、一番ニ旗ヲ進メタリ、土居得能後ヘツト懸拔テ、

○今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、並云、大友厚東、大内カ勢、一番ニ旗ヲ進メタリ、土居得能是ヲ見テ、他ニ讓ラサル所ナリト思ヒケレハ、二千餘騎ノ勢ヲ二、西源院本作三、一面ニ立テ、矢一筋ツ、射違ル程コソアレ、拔連テ打入、厚東、大友介一太刀打シテ、颯ト左右ヘ別ルレハ、土居得能後ヘツト懸拔ケル、下同、接是本文

打出宿ニ戦フ

左馬頭ノ控ヘ給ヘル打出宿ノ西ノ端ヘ西源院本作、河下、倣之、懸通り、葉武者共ニ目ナ懸ソ、大將ニ組ト下知シテ、風ノ如クニ散シ、雲ノ如クニ集テ、叫テ懸入、懸入テハ戰、戰フテハ懸拔、千騎カ一騎ニ成迄モ、引ナト互ニ恥シメテ、面モ掉ス聞ヒケル間、左馬頭

直義兵庫ニ退ク

叶ハシトヤ思ハレケン、又兵庫ヲ指テ引給フ、

○天正本云、土居得能餘ニ手痛ク當リシカハ、直義ノ兵、數輩討レシ中ニ、佐竹常陸介ハ、左馬頭ニ懸リケル敵ヲ遮ラントテ、大敵ニ當リケル間、敵三人斬落シ、我身モ痛手負テ引退ケレハ、左馬頭叶ハシトヤ思ハレケン、又兵庫ヲサシテ引給

下同、本文

千度百度戰ヘトモ、御方ノ軍勢ノ軍シタル有様、見ルニ叶ヘシトモ覺サリケレハ、將軍モ早速屈ノ體見ヘ給ヒケル處ヘ、大友宗貞參テ、今ノ如クニテハ、何トシテモ御合戦ヨカルヘシトモ覺候ハス、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、此下云、我等カ昨日參進テ候コソ、然ヘキ御運ト覺ヘ候、下同、本文、幸ニ船共數多候ヘハ、只先筑紫ヘ御開キ候ヘカシ、少貳筑後入道モ貞御方ニテ候ナレハ、九國ノ勢、多ク屬進ラセ候ハ、頓テ大軍ヲ動シテ、京都ヲ攻ラレ候ハンニ、何程ノ事カ候ヘキト申ケレハ、將軍クニモトヤ思召ケン、懸テ大友カ舟ニソ乗給ヒケル、

(下文十二日、條ニ收ム)

〔参考太平記〕卷第十五 後醍醐天皇自山門還幸附義貞兄弟臨時除目事

去月晦日按、本文以二十九日爲三晦日、公輔補任亦同、然則當時之書與三長曆符合、梅松論前所記難信、逆徒都ヲ落シカハ、二月二日天正本、及公輔補任、作二四日、歷代皇紀、皇年代略記、同、本文、未知孰是、主上山門ヨリ還幸ナリテ、花山院ヲ皇居ニ成レニケリ、歷代皇紀、皇年代略

建武三年、延元元年

尊氏、大友ノ船ニ走ス

還幸



記云、因<sub>三</sub>内裏兵火、同八日、義貞朝臣豊島打出ノ合戦ニ打勝テ、則朝敵ヲ萬里ノ波ニ漂以<sub>二</sub>花山院<sub>一</sub>爲<sub>三</sub>皇居<sub>二</sub>ハセ、同降人ノ五刑ノ難ヲ宥テ、京都へ歸給フ、事ノ體由々敷ソ見ヘタリケル、其時ノ降人一萬餘騎、皆元ノ笠驗ノ紋ヲ書直シテツケタリケルカ、墨ノ濃薄キ程見ヘテ、顯ニシルカリケルニヤ、其次ノ日、五條ノ辻ニ高札ヲ立テ、一首ノ歌ヲソ書タリケル、

義貞ハ左  
邊中將  
ハ右衛門  
佐任  
ラハ右衛門  
佐任  
ラハ右衛門  
佐任

二筋ノ中ノ白ミヲ塗隠シ金勝院本云、二筋ノ白ミヲ墨ニ塗隠シ云々ニタニタシケナ笠驗カナ都鄙數箇度ノ合戦ノ體、君殊ニ寂感淺カラス、則臨時ノ除目ヲ行ハレテ、義貞ヲ左近衛中將ニ任セラレ、義助ヲ右衛門佐ニ任セラレケリ、

二月十二日 尊氏、兵庫ヨリ乗船シテ鎮西ニ逃ル。十三日、官軍、播磨佐用郡櫻山ニ勝利ヲ獲。尊氏、西航ノ途中、恣ニ、光嚴院ヨリ義貞追討ノ院宣ヲ拜受シ、諸豪ヲ催シツ、二十日、赤間關ニ達ス。

〔梅松論〕

（前文ハ十一日ノ條ニ收ム）

雖然下御所は尙立歸テ摩耶の麓に御座有ければ、いかにも都にむかひて命を捨て御所存なりしほどに將軍御問答類に有しに依て兵庫に御歸有、同酉時計より船共（一）に誰乘（二）てはじむとなかりしかども、大勢込乗ける有様あはたゞしかりし夏共也、雖然昔治承に頼朝義兵の始、石橋の合戦に打負

尊氏等乗  
船

官軍へ降  
参スル人

戌時ニ出  
室津

船三百餘  
艘

て、眞鶴が崎より御船に召れし時は土肥次郎實平、岡崎四郎義實以下主従七人、安房上總を心ざし給ひし海上にては三浦小太郎義盛参じけり、誠に忠信とみえしかば、頼母敷ぞおぼしめされける、御ふね安房の國獵島に着ければ、時刻をうつさず東八ヶ國残らず相隨て御本意を達られき、又頼義義家も奥州の征伐の時、七騎になり給ふ事あり、始の負は御當家の佳例也と申輩多かりけり、去程に供奉仕一方の大將共の中に七八人京都へおもむくあり、降参とぞ聞えし、此輩はみな去年關東より今に至まで戦功を致す人々なり、雖然御方敗北の間いつしか旗を卷胃をぬぎ、笠印を改ける心中共こそ哀なれ、此等を見るにつけても義を重くし、命を軽くする勇士は彌忠節を盡べき色をぞ顯しける、戌の時計に御座船を出さる、俄に西風吹けり、是はたつと云て追手なりければ、寅の刻計に播磨の室の津に御着あり、去夜兵庫にて御舟に乗をくれける人々、多く陸地を経て當所に馳参しける、忠節尤神妙なり、相隨ひ奉る船三百餘艘也、此度は播磨の灘にて順風なれば、渡海せぬ大事の渡なり、若此風なくば御浮沈たるべき所に、併佛神の御加護也とて下御所、舍利御剣を渡海の間にて龍神に手向て海底にしづめらる、當津に一兩日御逗留有て、御合戦の評定區々也けるに、或人の云、京勢は定て襲來べし、四國九州



細川  
四國  
ヲシ  
テメ  
シム  
ム

播磨  
ヲ赤  
松  
三石  
城  
今河  
ヲ置  
尾道  
ニ  
桃井  
ヲ安  
藝田  
ニ  
新田  
大島  
足利  
高防  
長門  
經  
明院  
ヲ持  
宣受  
ヲ院  
今ハ  
義朝  
ノ敵  
ノカ  
ラズ  
ズ

二月  
廿日  
赤間  
關ニ  
着ス

尊氏等  
兵切  
ノ腹  
カ切  
カ切  
カ切

太平  
記ニ  
ナシ

十三日  
櫻山  
合戦

に御着あらん以前の御うしろをふせがむ爲に、國々に大將をとゞめらるべきかと申ければ、尤可然と上意にて、先四人は細川阿波守和氏、源藏人頼春、掃部介師氏、兄弟三人、同従弟兵部少輔顯氏、卿公定禪、三位公皇海、帶刀先生直俊、大夫將監政氏、伊豫守繁氏、兄弟六人、以上九人なり、阿波守と兵部少輔兩人成敗として、國にをいて、勳功の輕重に依て恩賞を行ふべき旨仰付らる。播磨は赤松、備前は尾張親衛松田の一族を相隨て三石の城にとめらる。備中は今河三郎四郎兄弟、頼尾道に陣を、取、安藝國は桃井の布河、近作小早川一族を差置る。周防國は大將新田の大島兵庫頭守、大内豊前守、長門國は大將尾張守、守護厚東太郎入道、かくのごとく定置れて、備後の頼に御着有所に、三寶院僧正賢俊、于時日野禪師、勅使として、持明院より院宣を下さる。文章常のごとし、天下の事計ひ申さるべき趣也。是に依て人々勇あへり、今は朝敵の義あるべからずとて、錦の御旗を上べき由、國々の大將に仰遣されけるこそめでたけれ、不計御遠行有だにも御いたはしきに、舟路の事は將軍を始奉り、勇士どもにもいまだなれぬおほかりけるに、まん／＼たる海上に御座船、其外數百艘の舟共、半天の雲に逆登る心地して、行衛することも白浪の立歸るべき故郷は、前途程遠して、雲行客の跡を埋め、岸の松類に吹風、旅泊の夢を破り、まどろ

むひまもなければ、舊里の空わすれやらぬに、命を限りの道なれば、心ばそさもいふばかりなし、うきながらつれなく、いきの松原の生て歸らむ事はしらねども、日敷へぬれば、建武三年二月廿日、長門國赤間の關に波風のわづらひなく、御舟着給ふ。

〔難太平記〕(前文昨年十二月五日條ニ收ム) 其後九州御退の時、兵庫魚御堂と云所にて、みな腹切

の著到付られしに、細川卿房は御舟にめさるべしと申し、行けり、故入道殿ハ、是にて御腹めさるべしと張行申し、けり、此事を後日に錦小路殿の常に御物語有しハ、此二ク度には、既にや御せむどとおぼしめし、定しを、兩人の異見うしろあはせなりき、よき武者の心は同じかるべしと思ふに、此ちがひめハ、今に不審也と仰有し也、此事などハ、殊更無隱間、太平記にも申入度存ずる事也、若さる御沙汰やとて、今注し付する者也。

〔元弘日記裏書〕 十三日、櫻山(播磨佐用郡ニ櫻山村アリ) 合戦、官軍有利、凶徒没落西海。

〔神皇正統記〕(後醍醐天皇幸ノ條ニ收メタリ) 尊氏等猶攝津國にありときこそえしか

は、かさねて諸將をつかはす、二月十三日、又これをたいらけつ、朝敵は船にのりて西國へなんおちにけり、諸將および官軍はかつ／＼かへりまひりしを、(下文ハ、三月十日、義貞親



王御元服ノ  
條ニ收ム

〔大友文書〕立花伯爵藏

△六三三八七

新院(光嚴)の御氣色によりて、御邊を相憑て鎮西に發向候也、忠節他にことに候間、兄弟におきては、猶子の儀にてあるへく候謹言、

二月十五日

尊氏(御判)

大友千代松殿

〔阿曾沼文書〕(周防)

△六三三八八

新田義貞與類、於安藝國峰起云々、相語軍勢可令誅伐、縱雖爲非職輩、致軍忠者、就注進可有恩賞、且云路次往反船、且云浦々島々船、可點定之狀如件、

建武三年二月十六日

阿曾沼(花押)

阿曾沼二郎殿

〔三池文書〕(碩田藏)

△六三三八九

可誅伐新田義貞與黨人等之由、所被下院宣也、早相備一族、馳參赤間關、可致軍忠、於恩賞者、可有殊沙汰之狀如件、

建武三年二月十七日

尊氏(花押)

安藝空助殿

〔參考太平記〕(前文十一日)

諸軍勢是ヲ見テ、スハヤ將軍コソ御舟ニ召レテ落サ

セ給ヘト、メキ立テ、取物モ取敢ス、乗後レシトアハテ騒ク、舟ハ僅三百餘艘ナ

リ、金勝院本作二乗ントスル人ハ二十萬騎ニ餘レリ、一艘ニ二千人、毛利家、北條家、南都、計二百艘一

コミ乗ケル間、大船一艘乗沈メテ、一人モ殘ラス失ニケリ、自餘ノ船トモ是ヲ見テ、

サノミ人ヲハ載シト、纜ヲ解テ差出ス、乗後レタル兵トモ、物具衣裳ヲ脱捨テ、遙ノ

澳ニ游出テ、船ニ取附ントスレハ、太刀長刀ニテ切殺シ、櫓カイニテ打落ス、乗得ス

シテ渚ニ歸ル者ハ、徒ニ自害ヲシテ、磯越波ニ漂ヘリ、尊氏卿ハ、福原ノ京ヲサヘ追

落サレテ、長汀ノ月ニ心ヲ傷シメ、曲浦ノ波ニ袖ヲ濡シテ、心ツクシニ漂泊シ給ヘ

ハ、義貞朝臣ハ、百戰ノ功ヲ高シテ、數萬ノ降人ヲ召具シ、天下ノ士卒ニ將トシテ、花

ノ都ニ歸給フ、憂喜忽ニ相易リテ、ウツ、モサナカラ夢ノ如クノ世ニ成ニケリ、

〔參考太平記〕卷第十六 尊氏下向筑紫事

建武三年二月八日、西源院本、及元弘日記裏書、神皇正統記、作二十三日、梅松論作二十二日、尊氏卿兵庫ヲ落給ヒシ迄ハ、相從フ

兵僅ニ七千餘騎有シカ共、備前兒島ニ著給ヒケル時、京都ヨリ討手馳下ラハ、三石

邊ニテ方ヨトテ、尾張左衛門佐氏賴氏賴、金勝院本作二高經、非也、諸異本或作三石橋左衛門佐和義、詳出二于下、未知孰是、至西國峰起段、本文及今出川家、金勝院、西源院

建武三年延元元年

五五七



四國

筑前多々良濱ニ着ク

佐竹義教ヲ東國ニ仁木頼章ヲ丹波ニ

三石城

細川ヲ四國ニ

本、又作三右衛門佐、並相繼、可。田井、飽浦、松田、内藤ニ附テ留メラレ、細川卿律師定禪、同刑

部大輔義教ヲハ、東國ノ事心元ナシトテ返サル、金勝院、西源院本云、細川定禪、同刑部少輔ヲハ、四國ノ勢ニ附テ讚岐ニ殘サレヌ、云々、按、金勝

院、西源院本、作刑部少輔、非也、金勝院本云、名義氏、者、亦非也、且第十五卷作、紀行、相繼、天正本作、頼春、爲得、本文所謂義教者、佐竹刑部大輔義教也、系圖作、義厚、今川家、毛利家、北條家、南都、天正本云、佐竹義教往、東國、細川定禪、同頼春、赴、四國、由是見之、則本文細川定禪、同刑部大輔下、漏、頼春字、及赴、四國、之文、義教、其外ノ勢共ハ、金勝院、上瀬、佐竹字、因、佐竹、細川、混爲、二人也、諸異本說詳出、于下、讀者當、并考知、本文脫誤、耳、

西源院本、各暇申テ、己カ國々ニ留リケル間、今ハ高上杉仁木、畠山吉良、石堂ノ人々、作、中國勢、

吉良、金勝院本作、山名、武藏、相模ノ勢ノ外ハ相隨兵モ無リケリ、筑前國多々良濱、湊ニ、著給ヒケル日ハ、金勝院本云、二月十三日多々良濱ニ著、云、其勢僅ニ五百人ニモ足ス、云、諸異本及梅松論說不、同、並見、于下、

○今川家、毛利家、北條家、南都、天正本並云、建武三年二月八日、將軍ハ兵庫奥御堂

ニテ、佐竹刑部大輔義教ヲ召テ、東國ノ事心元ナク覺ユレハ、急馳下テ義兵ヲ舉、御方ノ機ヲ失ハヌ様ニ相計フヘシトテ、武略ノ爲ニ歸サル、仁木頼章ヲハ、今川家本

作、頼春、丹波ヘ遣サル、北條家、南都本云、備前兒、石橋左衛門佐和義ニ、今川家本作ニ、田井、飽浦、内藤、松田一族共ヲ附テ、三石邊ニ支ヘテ、京ヨリ討手下ラハ、防ケトテ停ラル、非也、

浦、内藤、松田一族共ヲ附テ、三石邊ニ支ヘテ、京ヨリ討手下ラハ、防ケトテ停ラル、細川定禪、同刑部大輔頼春ヲハ、一族ヲ引マトメ、四國勢ヲ附テ、京都ヲ襲ヘトテ

讚岐ニ殘シ、此下天正本不、同、別出、于下、上杉民部大輔ヲハ、上杉、毛利家本作ニ、上野、石見ヘ遣サル、方々ノ計略ヲ運シ、北條家、南都本云、中國ノ兵ハ各、山名、石堂、畠山、高、上杉、小田、宇都宮、横地、勝間田ヲ

新院ノ輪旨

義貞教書

始トシテ、東國ノ兵少々召具セラル、同二月十三日、多々良濱ニ著給フ、

〔保曆間記〕五 同二月都におはします後伏見院の御子、今は先帝新院と申也、しのび

て尊氏のもとへ倫旨をなさるゝ、早く凶徒等をしりぞけて、君を本位につけ奉る

べきとなり、將軍九州にてかの倫旨を拜見してより、菊池が大勢にうちかちしか

ば、西國の勢ことくくしたがりける、かくて九國二島の勢を引具して責のぼる

一たん天命を恐れてこそ有つれ、此勅命を蒙うへは、道すがらの戦に打かたん事

うたがひなしとて、いみさにいさみ攻のぼる、(下文五月二十、五日條ニ收ム)

二月十九日 義貞、吉川實經ニ令シテ、尊氏、直義等ヲ追討セシム。

〔吉川家什書〕十三、實經御代、△六、三、一〇、

(圖版五〇参照)尊氏、直義以下輩没落畢、早率一族、尋搜凶徒在所、可被誅伐、有殊軍忠者、可被抽賞之

狀如件、

建武三年二月十九日

左中將(花押)

吉河辰熊とのへ

二月二十四日 朝廷、原一族ニ令シテ、尊氏、直義ノ黨與ノ越後ニ在ル者ヲ討タシム。

建武三年、延元元年

五五九



〔原宇右衛門所藏文書〕〔風軒文書集〕六、三、一一二、

二月廿四日附、左少辨奉、原一族輩宛

尊氏直義已下凶徒與黨散在越後國云々、早可令誅罰者、天氣如此、悉之、

二月二十九日<sup>(1)</sup>、延元ト改元ス。

〔皇年代私記〕〔中院一品記〕〔管見記〕〔參考太平記〕〔其他〕

二月二十九日<sup>(2)</sup>、尊氏、筑前葦屋津ニ着ク。同日、菊池武敏、足利黨ノ小貳貞經ヲ有智山城ニ攻メテ自殺セシム。是時、官軍、中黒ノ旗ヲ舉グ。尋デ三日、武敏、尊氏ト多々良濱ニ戦ヒテ敗績ス。

〔梅松論〕〔訛磨文書〕〔中村家文書〕〔菊池武朝申狀〕〔阿蘇大宮司惟澄申狀〕〔鎮西古文書編年録〕〔薩藩舊記〕〔宗像文書〕〔阿蘇文書〕

〔參考太平記〕卷第十六 少貳菊池合戦附妙慧自害并宗應藏主事

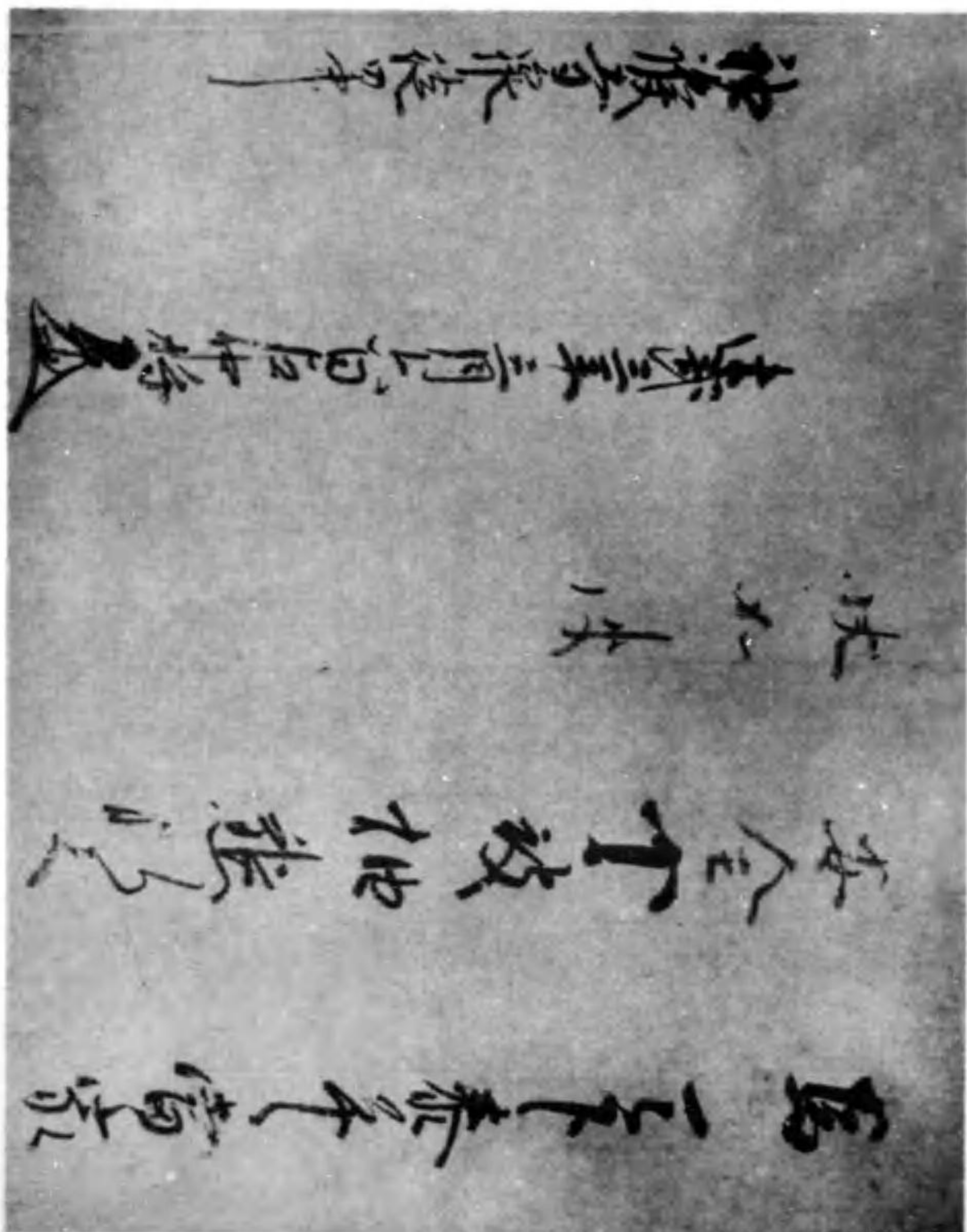
菊池ハ手合ノ合戦ニ討勝テ門出吉ト悦テ、臆テ其勢ヲ率シ、少貳入道妙慧カ楯籠タル、内山城ヘソ推寄ケル、少貳宗徒ノ兵ヲハ皆頼尙ニ附テ、其勢過半水木ノ渡ニテ討レヌ、城ニ殘ル勢僅三百人ニモ足サリケレハ、三百、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作三百、菊池カ大勢ニ叶フヘキトモ覺ス、サレトモ城ノ要害嚴シカリケレハ、切岸ノ下ニ敵ヲ直下シテ、防戦事數日ニ及ヘリ、菊池新手ヲ入替、入替夜晝、今川家、北條家、南都本、云々、十方ヨリ

菊池、  
内山、  
攻ム



五二 回 包 紙

京都高尾神社寺藏



五二 義貞公自筆御教書 各古屋市西區堀田町東門邊、左衛門氏藏



城内ニ中  
黒旗ヲ舉

少貳貞經  
自殺

義貞教書

同包紙

攻ケレトモ、城中ノ兵一人モ討レズ、金勝院、西源院本云、兵討レタルモノ少ク、云々、矢種モイマタ盡サリケレ

ハ、如何ニ攻ルトモ、落サルマジ物ヲト思ケル處ニ、少貳カ一族等西源院本作少貳、新原田對馬守、俄

ニ心變シテ、詰ノ城ニ引上リ、中黒ノ旗ヲ舉テ、我等聊所存候間、宮方へ參候ナリ、御

同心候へシヤト、妙慧カ方へ云遣シケレハ、一言ノ返答ニモ及ハス、苟モ存へテ義

無ランヨリハ、死シテ名ヲ殘サンニハ如シト云テ、持佛堂へ走入、腹カキ切テ伏ニ

ケリ、郎等百餘人モ、堂ノ大牀ニ並居テ、同音ニ聲ヲ出シ、一度ニ腹ヲソ切タリケル、

三月六日 義貞、神護寺衆徒ニ令シテ祈禱セシム。

〔關戶守彦所藏文書〕(名古屋市) (現在ハ京都市下京區五條通堺、堀詰町) (町東湯淺七左衛門氏所藏ス)

爲天下泰平當家安全、可被抽懇祈之狀如件、

建武三年三月六日

左中將(義貞)花押

神護寺衆徒御中

〔神護寺文書〕(京都)

(右書狀包紙)

神護寺衆徒御中

義貞

三月八日 新田左馬亮經政、足利黨トシテ、相馬光胤ノ奥州小高城ニ著

建武三年、延元元年

五六一



到ヲ附ス。

〔相馬文書〕 一 △六、三、一八七

相馬彌次郎胤胤申、

右奉屬大將斯波殿(家長御手)親父重胤問爲□責上鎌倉致度々合戰忠之處任

斯波殿□□書并親父重胤事書、今月八日令下國、成□族等押寄楯令對治候畢、仍

小高城□等著到(次第不同)

相馬九郎胤胤 同子息九郎五郎胤□

同與一胤房 相馬七郎時胤 (中、十名略)

新田左馬亮經政 (中、三十名略)

右著到如件 惣領代子息彌次郎

建武三年三月三日

進上 御奉行所 (氏家遺書) 承了(花押)

〔註〕 元弘三年五月十五日條萩藩閩閱錄本月十六日(2)條參照、

三月九日 尊氏直義、義貞等誅伐ノ院宣ヲ名トシテ諸國ノ將士ヲ招キ、且、上洛ノ準備及ビ其ノ參加ヲ命ズ。是事、是日ヨリ四月ニ及ブ。

院宣

〔吉川家什書〕十六親家御代 △六、三、一九一

可被誅伐新田義貞與類之由、院宣并御教書(院宣並ニ御教書見エヌ)如此、早云一族等、云甲乙人等、急速相催之、不日可被馳參、於恩賞者、殊可有其沙汰也、仍執達如件、

建武三年三月九日

宮莊地頭周防次郎四郎殿 (親家)

〔日向記〕 △六、三、二〇九 (建武三年三月十日附、園圃) (土持新兵衛宣榮宛)

新田右衛門佐義貞與黨以下誅伐事、所被下院宣也、爰菊池武敏并維直(字治)雖揚旗、或打取之、或沒落畢、(下略)

〔新編彌寢氏世錄正統系圖〕 二 △六、三、一七六

新田右衛門佐義貞與黨以下誅伐事、所被下院宣也、爲所々要害警固、不日可馳參之、狀如件、

建武三年三月十日

彌寢孫二郎殿 (清成)

(尊氏) (花押)

兵船準備ヲ命ズ

大隅國津々浦々船事、爲御上洛之兵船、不謂大小、相副守護人悉點之、繼夜於日可被

建武三年、延元元年

五六三



注申員數、次水手棍取事、嚴密可被致其用意之狀、依仰執達如件

建武三年三月十二日

武藏權守(花押)

彌寢郡司殿

〔野上文書〕(諸家文書) △六三二二一

新田右衛門佐義貞與黨誅伐事、所被下院宣也、差遣一色右馬助入道(賴行)於豐後國高勝寺之城(即チ政球)畢、隨彼催促可抽軍忠狀如件(建武三年三月十三日附錄、氏ヨリ野上次郎三郎(廣資宛))

〔都甲文書〕(豐後) △六三一七三

新田右衛門佐義貞與黨以下凶徒等誅伐事、所被下院宣也、不廻時刻、馳參御方、致軍忠者、可有恩賞之狀如件(建武三年三月十四日附錄、義ヨリ都甲四郎(惟世宛))

〔島津文書〕(色川) 三 △六三二二四

新田義貞黨類等爲誅伐之、近日京都可有發向之一族相共可被致合戰之忠也、仍執達如件(建武三年三月十五日附錄、左近大夫將監(石橋和義)ヨリ島津周助五郎三郎(忠兼宛))

〔古證文〕七 △六三二五二

新田右衛門佐義貞與黨誅伐事、相催一族、致軍忠者、可有恩賞之狀如之(件)

建武三年三月廿二日

尊氏(判)

飯島小三郎とのへ

〔萩藩閥録〕(五十八) 内藤次郎左衛門 △六三二五三

新田右衛門佐義貞與黨誅伐事、所被下院宣也、仍今月廿八日可令上洛也、發向之時、可抽軍忠之狀如件

建武三年三月廿三日

尊氏(御判)

長田内藤次郎殿

〔宇都宮古文書〕(略前同文、建武三年三月廿六日附錄、宇都宮因幡權守宛) △六三二五三

〔吉川家什書〕(十三) 實經御代 △六三一九二 (前掲吉川家什書三月九日附錄、同文) 建武三年三月廿四日附錄、吉河辰熊宛)

〔新編彌寢氏世錄正統系圖〕二 △六三二三四

新田右衛門佐義貞與黨誅伐事、所被不院宣也、爰肝付八郎兼重以下凶徒、構城、擲云々、所差遣島津上總入道々鑑也、可致軍忠之狀如件(建武三年三月廿六日附錄、尊氏ヨリ彌寢郡司(清成)一族中宛)

〔薩藩舊記〕(前集、前同文、別府) 十三(女子代宛) 〔薩藩舊記〕(前同文、重久椽宛) △六三二三四

〔吉川家什書〕(十三) 實經御代 △六三二五四

新田右衛門佐義貞與黨誅伐事、所被下院宣也、來月三日可上洛也、早速可責上京都之狀如件

建武三年、延元元年

五六五

今月二十八日上洛スベシ

來月三日上洛スベシ



建武三年三月卅日

吉河辰熊殿

〔毛利文書〕

百五（前掲吉川家什書三月九日附同文）十一（建武三年四月二日附三戸孫三郎宛）△、六、三、一、九二、

〔薩藩舊記〕

前集十三 △、六、三、二三八、

新田右衛門佐義貞與黨以下凶徒等誅伐事被下院宣也相催一族可致軍忠之狀如件（建武三年四月五日附左馬頭直義ヨリ調所彦三郎敦復宛）

三月十日 朝廷、是日、義良親王ニ元服ヲ加へ、陸奥大守ニ任ジ給フ。尋テ北畠顯家ト共ニ任國ニ赴カシメ給フ。又、是頃、尊氏等追討ノ爲、義貞ヲシテ西國ニ發向セシメ給フ。義貞、病ノ爲、發向遲延ス。因テ先ヅ、大館氏明・江田行義等ノ諸將ヲ發向セシム。

〔御遊抄〕

御元服 親王御元服加冠以下例、

儀良親王、延元元三月十日、加冠、右大臣公賢公

理髮

〔蛙鈔〕

重親王著例、赤色關腋袍總角、延元々三十、義良親王元服也、

〔神皇正統記〕

後醍醐（上文ハ去月十二）天皇（日ノ條ニ收ム）東國の事おほつかなしとて、親王も又かへらせ給ふへし、顯家卿も任所に歸るへきよしおほせらる、義貞は筑紫へつかはさ

義良親王  
陸奥太守

義貞筑紫  
ニ發向

勾當内侍

仁木頼章  
丹波高山  
寺城ニ據  
赤松則村  
白旗城ニ據

る、かくて親王元服し給ひ、直に三品に敍し、陸奥太守に任し、此國の太守ははしめたることなれと、たより有とてそ任し給ふ、勸賞によりて、同母の御兄四品成良のみこをこえ給ふ、顯家卿はわさと賞をは申うけさりとそ、義貞朝臣ハ筑紫へ下りしか、播磨國に朝敵の黨類ありとて、先是を對治すへしとて日を送りし程に、五月にもなりぬ（下文ハ五月二十）

〔參考太平記〕

卷第十六 西國蜂起官軍進發附顯家下向奥州事

去程ニ將軍筑紫ニ没落シ給ヒシ刻、四國西國ノ朝敵共、氣ヲ損シ度ヲ失テ、或ハ山林ニ隠レ、或ハ所縁ヲ尋テ、新田殿ノ御教書ヲ賜ハラヌ人ハ無リケリ、此時若義貞、早速ニ下向セラレタラマシカハ、一人モ降參セヌ者ハ有マシカリシヲ、其比天下第一ノ美人ト聞ヘシ勾當内侍ヲ、按系圖、世尊寺經尹女、行房妹也、而太平記諸本第二十卷、作行房女、未知孰是、内裏ヨリ賜ハリタリケルニ、暫カ程モ別ヲ悲テ、三月ノ末迄、西國下向ノ事、延引セラレケルコソ、誠ニ傾城傾國ノ驗ナレ、是ニ依テ丹波國ニハ、久下、長澤毛利家、西源院、天正本、作中澤、荻野、波波伯部ノ者共、仁木左京大夫頼章ヲ大將トシテ、高山寺ノ城ニ楯籠リ、播磨國ニハ、赤松入道圓心、白旗蜂ヲ城郭ニ構テ、討手ノ下向ヲ支ントス、美作ニハ、菅家、江見、弘戸ノ者共、院本不載、菅家弘戸、奈義、能仙、諸異本前後不同、詳而載、和南三郷、註、于船坂合戰段、菩提寺城ヲ拵テ、菩提、今川家、天正本、作、國中ヲ

建武三年、延元元年



美作菩提寺城

備前ノ甲斐河ノ三石城ノ勢

顯家奥州ニ下向

義貞ニ尊氏追討ノ病氣ニテ延引大館江田、先發ス

新田義貞公篇

掠メ領ス、備前ニハ、田井、飽浦、内藤、頼宮、松田松、西源院本作、福林寺ノ者共、石橋左衛門レ船、恐非也、佐ヲ本文及今出川家、金勝院、西源院本、並與前組、大將トシテ、甲斐河金勝院本作、三石、二箇處ノ城ヲ願、諸本説、見テ尊氏下、向筑紫一段、可并考、構テ、船路陸路ヲ支ントス、備中ニハ、庄、眞壁、陶山、成合、新見金勝院本作、多地部ノ者共、勢山ヲ切塞テ、勢山、金勝院本作、鳥モ翔ラヌ様ニ構ヘタリ、是ヨリ西、備後、安藝、周防、長門ハ申ニ及ハス、四國九州モ、悉附テハ叶フマシカリケレハ、將軍方ニ志ナキモ、皆從靡カスト云事ナシ、處々ノ城郭、國々ノ蜂起、夥シク京都ヘ聞ヘケレハ、先東國ヲ敵ニ成テハ叶マシトテ、北畠源中納言顯家卿ヲ、鎮守府將軍ニナシテ按、顯家、以建武二年十一月十二日、爲鎮守府將軍、今爲建武三年任、非也、奥州ヘ下サル、

新田左中將義貞ニハ、十六箇國ノ管領ヲ許サレ、尊氏追討ノ宣旨ヲ成レケル、義貞命ヲ蒙テ、既ニ西國ヘ立ントシ給ヒケル刻、瘡病ノ心地煩シカリケレハ、先江田兵部大輔行義、大館左馬助氏明二人ヲ、播磨國ヘ差クタサル、其勢二千餘騎、三月四日京ヲ立テ、同六日書寫坂本ニ著ニケリ、(下文ハ十六日ノ條ニ收ム)

(註) 江田、大館等先發ノ日、太平記ニ四日トスレドモ、信據シ難キニヨリ、神皇正統記ニヨリ、今義良親王元服ノ日ニ合致ス。

三月十六日(1) 新田軍、播磨ノ斑鳩笹山ニ於テ赤松則村ノ軍ヲ破リ、更ニ、

朝日山、那波大島城等ニ敵ヲ破リテ進ム。

〔海老名文書〕(播磨) △、六、三、一九五、

三月十六日、朝日山合戦、  
 白旗城ニ、  
 鮮魚淵戰、  
 播磨九ヶ城ヲ陷ス

播磨國矢野莊内那波浦地頭海老名尊補丸代間三郎泰知申、今年三月十六日、イカルガサ、樂山合戦之時(掛西郡ニ)、於樂々山北峯、抽軍忠之次第、宇野左衛門太郎、宗清高鼻和平五所見及也、次楯籠當城墪、致合戦之忠勤候了、其段柏原兵衛三郎入道見知之上、城中無其隱候、將又於當領内、鯨鱈淵、度々致野伏合戦之刻、或、被遂御實檢畢、或分捕或生捕浦上彦三郎、五月十九日、召渡白旗城者也、其後屬于守護(赤松)、手、馳向當國九ヶ所城墪、悉責落畢、然早預御注進、且賜一見之御判、可備後證候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年十一月廿日 菅原泰知(裏判)  
 進上 御奉行所 承候了(花押)

立申紛失事

海老名源三郎景知申文書紛失事、

右子細者、播磨國矢野莊内別名下司職者、賜文治二年御下文、知行無相違之處也、(中略)

建武三年、延元元年



新田軍那波浦大島城ヲ陷ス

新田軍船取ル

義貞書狀

同包紙

新田義貞公書

五七〇

下知狀以下讓狀等、於建武三年、故赤松殿播磨國被構白旗城之刻、自最初楯籠景知畢、依之新田義貞與類、寄來那波浦大島城之間、以景知若黨等雖致合戰、彼沒落訖、然間云當所云景知宿所、被放火之刻、件重書等悉以令紛失畢、雖然留案備、此條無其隱之上者、申請御存知人々證判、爲備後證龜鏡、仍紛失之狀如件、

康永二年八月日

源景知(花押)ノ下ニ、紛失證明)連署アリ、今略ス)

〔法隆寺文書〕 △六、三、一九七、

法隆寺雜掌申、播磨國鷓鴣莊(榊東)堺事、申狀進覽之、子細見于狀候歟、於當莊數日取陣候之間、爲官軍令損亡候了、訴訟事任道理、可有申御沙汰候哉、恐惶謹言、

五月八日

左中將義貞(花押)

進上 四條中納言殿

鷓鴣堺事

(右書狀包紙)

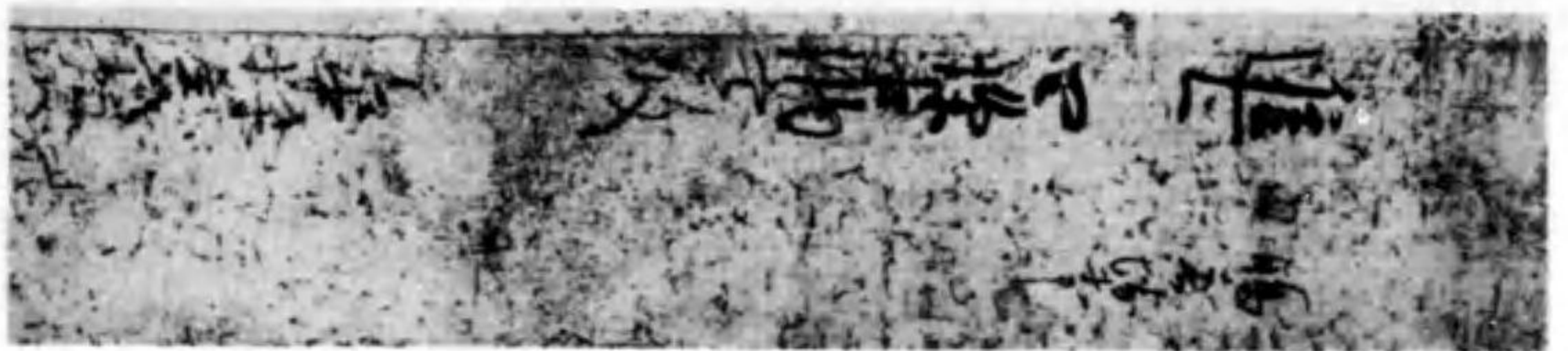
進上 四條中納言殿

左中將義貞

〔萩藩閩閱錄〕 百廿一ノ一 △六、三、一九六、

石見國周布郷惣領地頭御神木彦次郎藤原兼宗申軍忠事、

共二宮内省圖書寮藏  
史料編纂所藏寫眞複製



五四 同包紙



五三 義貞公自筆四條隆資卿宛書狀



三月晦日  
城ヲ攻撃

四月二日  
ヨリ廿三日  
マデ  
勤  
役所ニ

新田赤松  
兩軍  
ニ戦フ

去三月十六日奉屬御手、同晦日攻上播州、赤松城大手南面城戸口致合戰、同四月一日二日四日十一日十七日、抽拔群軍忠之時、自身被疵被射、就中同四月四日後卷御敵等寄來之間、最前馳向、召進生虜一人之間、即被誅畢、加之承峯役所警固、從四月二日至同廿三日、無退轉令勤仕畢、此等次第御檢知之上者、賜御證判、可備向後龜鏡候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

延元々々年四月廿三日

藤原兼宗 狀 裏在判

御奉行所圖

〔參考太平記〕

卷第(前文ハ十日ノ條ニ收ム)

赤松入道是ヲ聞テ、敵ニ足ヲタメサセテハ叶フ

マシトテ、備前金勝院本作、備中、非也。播磨兩國ノ勢ヲ合テ、天正本云、圓心嫡子範資ニ、備前播磨ノ勢ヲ指添、云々。書寫坂本へ推寄ケル間、江田、大館、室山ニ金勝院、天正本、作朝日山。出向テ相戦フ、赤松軍利無シテ、官軍勝ニ乘シカハ、江田大館勢ヲ得テ、西國ノ對治輒カルヘキ由、類ニ羽書ヲ飛セテ京都へ注進ス、

三月十六日<sup>(2)</sup> 新田經政代、田島小四郎、足利黨トシテ、相馬光胤ニ從ヒ、結城宗廣ノ軍ト宇多莊ニ戦フ。

〔相馬文書〕 一、六、三、二、四、四

建武三年、延元元年



相馬彌次郎光胤申軍忠事、  
右白川上野入道(宗廣)家人等、宇多莊熊野堂楯築間、今月十六日馳向彼所、致合戰分  
取手負事、

相馬九郎五郎胤景分取二人

須江八郎分取一人、白川上野入道家人(中三人)

新田左馬亮經政分取一人、田島小四郎

標葉孫三郎教隆分取一人

東條七郎衛門尉分取一人、相馬助房家人、被取一

木幡二郎討死畢

右此外雖有數輩切捨、略之畢、仍追散敵對治畢、

建武三年三月十七日

總領代子息彌次郎光胤

進上 御奉行所

(氏家遺跡) 承了(花押)

(註) 元弘三年五月十五日條萩藩閔閱錄、本月八日條參照、

三月二十七日 義貞、播磨伊和社領ニ兵士ノ濫妨スルヲ停ム。

〔伊和神社文書〕(播磨) △六、三、二六一

禁制 播磨國一宮(赤粟郡須行) 村ニアリ

右於當社領、軍勢以下甲乙人等、不可致濫妨狼藉之狀如件

延元々年三月廿七日

左中將 [在御判]

此新田殿御教書者、弘山安樂寺御黨被成也、其時申口神官伊和村殿、大井祝、保倉祝、講衆式部殿、如性、宮門六郎殿、

三月三十日 義貞、西國ニ發向シ、是日ヨリ、赤松則村ノ播磨白旗城ヲ攻圍シ、翌月ニ互ル。又別軍ヲ派シテ、船坂・三石ニ向ハシメ、中國經略ノ歩ヲ進ム。

〔萩藩閔閱錄〕百廿一ノ一、周布吉兵衛 〔海老名文書〕(何レモ十六日) ノ修ニ收ム

〔春日神主祐賢記〕(大和) △六、三、二〇八 建武年中、賜將軍家御願書、當寺管作 重有

御牒狀、因茲學侶致丹誠之處、新田右衛門佐之軍破畢、其後御開鎮西之刻、白旗一流、自男山八幡飛來播州赤松高山、則號曰白旗城、重禪門自見靈夢、春日大明神、爲將軍御擁護、可有御影向云云、

〔石井三宅系譜〕(新田氏研究) 一九六頁

新左衛門尉信高 延元元年五月十八日於赤松城屢々抽軍忠神妙之由、賜御威狀、大館左京權(氏明)太夫奉之、(中略)同六月朔日、石井新左衛門尉信高、佐々木縣五郎入道代彌四郎信尊等軍忠有之、自左京權太夫被達御奉行所有注進書、

建武三年、延元元年

五七三



(註) 大館左京權大夫ニツキテハ延元三年十一月十九日條參照、

〔參考太平記〕卷第十六 義貞攻白旗城事、

義貞西國進發 賀古河ニテ勢揃ヘ  
斑鳩宿 則村、義貞ヲ謀ル  
守護職補任ノ論旨

去程ニ左中將義貞ノ病氣能成テケレハ、五萬餘騎ノ勢ヲ率シテ、西國ヘ下リ給フ後陣ノ勢ヲ疎汰ン爲ニ、播磨國賀古河ニ、四五日逗留有ケル程ニ、宇都宮治部大輔公綱金勝院本有同字、紀伊常陸介、菊池次郎武季菊池家譜無武季、三千餘騎ニテ下著ス、其外攝津國、播磨、丹波、丹後ノ勢共西源院本不載丹波、金勝院本丹後作因幡、思々ニ聘參シケル間、程ナク六萬餘騎ニ成ニケリ、サラハ、驍ヲ赤松カ城ヘ寄テ攻ヘシトテ、斑鳩宿迄打寄給タリケル時、赤松入道圓心、小寺藤兵衛尉金勝院本作三浦法眼、ヲ以テ、新田殿ヘ申サレケルハ、圓心不肖ノ身ヲ以テ、元弘初大敵ニ當リ、逆徒ヲ攻退候シ事、恐ハ第一ノ忠節トコソ存候シニ、恩賞ノ地、降參不義ノ者ヨリモ猶賤シク候シ間、一旦ノ恨ニ依テ、多日ノ大功ヲ捨候キ、去ナカラ兵部卿親王ノ御恩、生々世々忘難ク存候ヘハ、全ク御敵ニ屬シ候事、本意トハ存セス候、所詮當國ノ守護職ヲタニ、論旨ニ御辭狀ヲ副テ、下シ賜リ候ハ、元ノ如ク御方ニ參テ、忠節ヲ致ヘキニテ候ト申タリケレハ、義貞是ヲ聞給ヒテ、此事ナラハ仔細アラシト仰ラレテ、驍ヲ京都ヘ飛脚ヲ立、守護職補任ノ論旨ヲソ申成レケル、其使節往反ノ間、已ニ十餘日ヲ過ケル間ニ、圓心城ヲ拵スマシテ、當國ノ守護國

天ヲ戴テ天命ヲ欺ンヤ  
白旗城ヲ圍ム  
義助ノ獻策  
中國經略

司ヲハ、將軍ヨリ賜リテ候間、手ノ裏ヲ返ス様ナル論旨ヲハ、何カハ仕候ヘキト、嘲哂シテコソ返サレケル、新田左中將是ヲ聞給ヒテ、王事盛コトナシ、縱恨ヲ以テ、朝敵ノ身トナルトモ、天ヲ戴テ天命ヲ欺ンヤ、其儀ナラハ、爰ニテ數月ヲ送ルトモ、彼カ城ヲ攻落サテハ通ルマシトシテ、天正本云、菊池、宇都宮、紀伊常陸ヲ始トシテ、宗徒ノ兵白旗ノ城ヲ攻、云々、六萬餘騎ノ勢ヲ以テ、白旗城ヲ百重千重ニ取圍テ、夜晝五十餘日、息ヲモ繼ス攻タリケル、懸リケレ共此城四方皆峻岨ニシテ、人ノ上ルヘキ様モナク、水モ兵糧モ澤山ナル上、播磨美作ニ名ヲ得タル射手共、八百餘人迄籠リタリケル間、攻レトモ攻レトモ、只寄手手負討ル、計ニテ、城中恙ナカリケリ、脇屋右衛門佐是ヲ見給テ、左中將ニ向テ申サレケルハ、先年正成カ籠リタリシ金剛山城ヲ、日本國ノ勢共カ攻兼テ、結局天下ヲ覆サレシ事ハ、先代ノ後悔ニテ候ハスヤ、僅ノ小城ニ取懸リテ、ソ、ロニ日數ヲ送り候ハ、御方ノ軍勢ハ皆兵糧ニ疲、敵陣ノ城ハ彌強リ候ハンカ、其上尊氏既ニ筑紫九箇國ヲ平ケテ、上洛スル由開ヘ候ヘハ、彼カ近ツカヌ前ニ、備前、備中ヲ退治シテ、安藝、周防、長門ノ勢ヲ屬ラレ候ハテハ、ユ、シキ大事ニ及候ヌトコソ覺候ヘ、去ナカラ今迄攻懸タル城ヲ、落サテ引ハ、天下ノ嘲共成ヘク候ヘハ、御勢ヲ少々殘サレ、自餘ノ勢ヲ船坂ヘ差向ラレ、先山陽道ノ路ヲ開テ、中國勢ヲ附、推テ筑紫ヘ御下



船坂山攻

候へカシト申サレケレハ、左中將此議尤宜覺候トテ、聽テ宇都宮ト菊池カ勢ヲ差副、伊東大和守頼宮六郎ヲ案内者トシテ、二萬餘騎、船坂山ヘソ向ラレケル、彼山ト申ハ、山陽道第一ノ難處ナリ、兩方ハ嶺峩々トシテ、中ニ一ノ細道アリ、谷深石滑ニシテ、路羊腸ヲ蹈テ、上ル事二十餘町、雲霧窈冥タリ、若一夫怒テ關ニ臨ハ、萬侶モ通ルコトヲ得難シ、況岩石ヲ穿テ細橋ヲ渡シ、大木ヲ倒シテ逆茂木ニ引タレハ、如何ナル百萬騎ノ勢ニテモ、攻破ルヘシトハ見ヘサリケリ、サレハ差モ勇ル菊池、宇都宮カ勢モ、麓ニ控テ進得ス、案内者ニ憑レタル、伊東頼宮ノ兵共モ、山ヲノミ見上テ、徒ニ日ヲソ送ケル、

三月十四日進發ス

〔七卷册子〕

三月

同十四日官軍ノ大將義貞朝臣數萬騎ヲ率シ西國エ發向セラル、ト云々、同廿五日官軍赤松カ籠リタル白旗ノ城ヲ取圍テ攻ルト云々、赤松ノ城堅固ニシテ落カタクユヘ四月三日官軍勢ヲ分ケテ船坂ヨリ備前備中エ發向スト云々、

義貞西國進發ノ日不明

〔註〕 義貞西國發向ノ日、七卷册子十四日トスレドモ信據シ難キニヨリ萩藩閣

閱録ニヨリテ是日ニ係ク。

三月是月 足利黨今川頼貞、播磨周遍寺ニ居ル。同國廣峯貞長、之ニ屬

シテ官軍ニ抗シ、尋デ、廣峯山城ニ楯籠ル。翌月四日、但馬ニ入ル。

〔廣峯文書〕

乾播磨 △六、三、二六七

播磨國廣峯又太郎入道昌俊貞長申軍忠事、

今年三月、大將軍當國周遍寺仁御座之時、（周遍寺ハ、加西郡網引村ニアリ、）付御著到致軍功畢、其後御越但馬國之間、昌俊者楯籠于廣峯山之城、差進舍弟少納言房長源、若黨刑部五郎長利等、同四月四日著于但州、同五月三日牧田河原合戰仁不惜一命致忠、同五、六日於丹波國佐治山致軍勞、又同十六日但州氣比城合戰仁長源被疵、（右）畢、一所合戰之間、周防彌四郎、後藤佐渡五郎等令見知之上、大將軍悉所有御存知也、然者賜御證判爲浴恩賞、言上如件、

建武三年五月日

一見了〔花押〕今川駿河守頼貞判ト云

〔註〕 廣峯貞長ノ三月ノ著到狀及ビ頼貞ノ貞長軍忠請文アレド略ス。尙四月十四日條參照。

四月二日 義貞、播磨伊和社ニ同國神戸郷々司職ヲ寄進ス。

〔伊和神社文書〕

一〔播磨 △六、三、二六一〕

奉寄進 一宮伊和大明神

建武三年、延元元年

周遍寺  
頼貞但馬  
ニ移ル  
廣峯ニ據  
ル  
牧田河原  
合戰  
佐治山合  
戰  
氣比城合  
戰

義貞寄進  
狀



播磨國神戸郷々司職事、

右爲天下泰平、朝敵滅亡、家門安全、當郷爲御敷地之上、旁依有社家之洞色、謹所奉寄附也、經奏聞可申成官符之狀如件、

延元々年卯月二日

左中將義貞(花押)

四月三日 白旗城及三石城危急ノ報、太宰府ナル尊氏ノ許ニ至ル。是日、尊氏、兵ヲ率テ博多ヲ發シ、東上ノ途ニ就ク。

〔梅松論〕

斯て歸路イ路の事兩義あり、一には諸國の御かた力を落さぬ先にいそがるべきか、一には兵糧の爲に秋を可待歟、御さた未定ずして、宰府に三月三日より四月三日まで御座ありし時分、播磨より赤松馳申て云、新田金吾大將として多勢を以當城にむかひて陳を取、圓心が一族其外京都より九州へ參する輩馳籠間、城の中の勢満足すといへども、兵糧無用意の間、君御歸洛延引あらば、堪忍せしめがたし、御進發を急がるべし、又備前の國三石の大將尾張親衛、同申て云、新田脇屋大將として、當城イにむかふ間、兵糧用意なきよし、赤松イと同申、是に依て九國には一色入道、仁木右馬助、松浦黨并國人以下をとゞめイられて、建武三年四月三日、太宰府を立て御進發ありし程に、太宰少貳并九國の輩、博多の津より曉を解て、(下文五月五日條ニ收ム)

赤松ノ使  
危急ヲ告

三石ノ使  
危急ヲ告

四月三日  
宰府ヲ發ス

奏書進、一宮侍和天明神  
播磨國神戸郷々司職事  
有馬天下泰平、朝敵滅亡  
家門安全當郷爲御敷地之上、旁依有社家之洞色、謹所奉寄附也、經奏聞可申成官符之狀如件  
延元々年卯月二日  
左中將義貞

五五 義貞公自筆寄進狀



〔萩薩閩閩録〕〔宇都宮古文書〕〔吉川家什書〕〔島津文書色川本〕〔新編彌寢氏

世錄正統系圖〕何レモ、三月九日ノ條ニ收ム

〔參考太平記〕卷第十六 尊氏自筑紫上洛附持明院殿院宜到來并瑞夢事

赤松則祐  
筑紫ニ來  
リテ危急  
ヲ告グ

多多良濱ノ合戰ノ後、筑紫九國ノ勢、一人トシテ將軍ニ從ヒ靡カスト云者無リケ  
リ、然レトモ中國ニ敵陣充滿シテ道ヲ塞キ、今川家、毛利家、北條家、南都、天正本云、義貞ノ氏族、播磨美作ニ打散テ、所々ノ城郭ヲ構テ、中國ノ道ヲ塞云々、下同ニ東國王化ニ從テ、御方ニ通スル者少カリケレハ、左右ナク京都へ攻上ラン  
事ハ、如何有ヘカラント、此春ノ敗北ニ懲懼テ、諸卒敢テ進ム義勢モ無リケル處ニ、  
赤松入道カ三男則祐律師、并ニ得平因幡守秀光因幡守、天正本作源太播磨ヨリ筑紫へ馳參テ  
申ケルハ、天正本云、則祐、秀光、三月三日播磨ヲ立、同十八日、京都ヨリ下サレタル敵軍、備中、備前、  
太宰府へ參著、御上洛ヲ勸申、云々、下同ニ本文、播磨美作ニ充滿シテ候トイヘトモ、是皆城々ヲ攻兼テ、氣疲レ糧盡タル折節ニテ  
候間、將軍コソ大勢ニテ御上洛候ヘトタニ、承及候ハ、一タマリモ堪マカヘシト存候、  
若御進發延引候テ、白旗城攻落サレナハ、自餘ノ城一日モ堪候マシ、四箇國ノ要害、  
皆敵ノ城ニ成テ候ハンヌル後ハ、何百萬騎ノ勢ニテモ、御上洛叶フマシク候、是則  
趙王カ秦ノ兵ニ圍レテ、楚項羽舟筏ヲ沈メ、釜甑ヲ燒テ、戰負ハ、士卒一人モ生テ返  
ラシトセシ戰ニテ候ハスヤ、天下成功、只此一舉ニ有ヘキニテ候者ヲト、詞ヲ殘サ

建武三年、延元元年



尊氏宰府ヲ發ツ

テ申ケレハ、將軍天正本載是ヲ聞給テ、實モ此議サモアリト覺ルソ、サラハ夜ヲ日ニ繼テ上洛ヲ急クヘシ、但九州ヲヒタスヲ打捨テハ叶マシトテ、仁木四郎次郎義長ヲ大將トシテ、大友少貳兩人ヲ留置キ、西源院本、不載、留置、仁木及大友少貳於九州四月二十六日ニ天正本作三日宰府ヲ打立テ、同二十八日順風ニ纜解テ、下文ハ五月十日ノ條ニ收ム

四月八日 新田左馬助義氏、三河ニ攻メ入ル。尋テ、足利黨吉良貞經・仁木義高等ト國中諸所ニ戰ヒ、後、更ニ、遠江ヲ略ス。

〔古文書集〕

三 越後州高田城主 編原式部大輔家藏 △六三三〇一

仁木孫太郎入道義高討死之時、子息彌二郎義長軍忠之事、

右亡父義高、今年四月八日、御敵新田左馬助吉川家什書所載、康永元年六月二十三日吉川實經代須藤景成ノ注進狀ニ、新田左馬助義氏

リ、已下亂入于參河國候間、屬大手大將軍宮内少輔四郎殿御手、吉良貞家ノ弟ニ、宮内大輔貞經アリ、

至同廿日於吉良莊福豆致合戰、於御前追落御敵畢、

同凶徒等於同國八幡寶飯取陣候間、六月八日、令發向彼陣、同九日抽上軍力極軍忠、同追落御敵畢脫カ

同廿八日、於本野原寶飯抽合戰、忠候條、子細同前、

新田左馬助以下御敵如令沒落、三河國之後、落下遠州候間、同九月十三日、自篠原數

本野原合戰 遠江篠原

仁木義高 同義長 新田左馬助 參河ニ入ル 吉良貞經 吉良莊合戰 八幡合戰

天龍川合戰

郡合戰、迄于引間天龍川合戰、抽軍忠之處、於天龍川端亡父義高令討死畢、此等子細每度被成御覽候者、可賜御判候哉、恐惶謹言、

建武三年九月日

〔花押〕

〔註〕 此ノ後、新田左馬助轉戰ノ狀、四月二十日、六月八日、同二十八日、八月十二日、九月十三日ノ條ニ載ス。

四月十四日 足利黨今川賴貞、丹波夜久野ニ官軍ト戰フ。

〔三寶院文書〕

一 山城 △六三二六九

今月廿日御奉書之旨、謹拜見仕候訖、抑被尋仰下之候、院林六郎左衛門入道了法軍忠事、去建武三年四月十四日、丹波國夜久野合戰以來、屬當手、度々致軍忠、同六月廿日、於山門無動寺合戰、子息又六光利令討死候了、仍證判分明候歟、此條若偽申候者、可罷蒙八幡大菩薩御罰條、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

曆應三年五月廿七日

前駿河守賴貞請文 裏判

〔註〕 三月是月條參照、

四月十九日 是頃、新田軍ノ中國經略進捗シ、脇屋義助等ハ船坂ヲ拔キテ三石城ヲ圍ミ、大井田氏經ハ進出シテ備中福山城ヲ占領ス。又、江田行

建武三年、延元元年

五八一

今川賴貞

院林了法 丹波夜久野合戰 無動寺合戰



義ハ美作ニ入りテ、奈義・能仙・菩提寺等ノ諸城ヲ徇フ。

〔参考太平記〕卷第十六 兒島三郎舉旗熊山附船坂合戰事

懸リケル處ニ、備前國住人兒島三郎高德、去年冬、細川卿律師、四國ヨリ攻上リシ時、備前、備中、數箇度ノ合戰ニ打負テ、山林ニ身ヲ匿シ、會稽ノ恥ヲ雪カント、義貞朝臣ノ下向ヲ蹙テ居タリケルカ、船坂山ヲ官軍ノ超兼タリト聞テ、竊ニ使ヲ新田殿ノ方ヘ立テ申ケルハ、船坂ヨリ御勢ヲ越ルヘキ由承及候、事實ニ候ハ、彼要害輒ク破ラレカタク候カ、高德、來十八日當國熊山ニ於テ、義兵ヲ舉ヘク候、サル程ナラハ、船坂ヲ固タル凶徒等、定テ熊山ヘ寄來候ハンカ、敵ノ勢スキタル隙ヲ得テ、御勢ヲ二手ニ分ラレ、一手ヲハ船坂ヘ差向テ、船坂、毛利家本作西坂攻ヘキ勢ヲ見セ、一手ヲハ三石山ノ南ニ當リテ、樵ノ通フ路一ツ候ナル、竊ニ廻セテ、三石宿ヨリ西ヘ出ラレ候ハ、船坂ノ敵前後ヲ裏マレ、定メテ引方ヲ失ヒ候ハンカ、高德國中ニ旗ヲ舉、船坂ヲ先破リ候ハ、西國ノ軍勢、御方ニ參ラスト云者候ヘカラス、急此相圖ヲ以テ、御合戰有ヘク候ナリト申送ケル、其比播磨ヨリ西、長門國ニ至ルマテ、悉敵陣ニテ、案内ヲ通スル者モナキニ、高德カ使者來テ、企ノ様ヲ申ケレハ、新田殿悅給フ事斜ナラス、則相圖ノ日ヲ定テ、其使ヲ返サレケル、使者備前ニ歸テ、相圖ノ様ヲ申ケレハ、

兒島高德  
新田軍ニ  
合圖ス

船坂  
熊山

三石

高德熊山  
ニ兵ヲ舉  
グ

四月十七日夜半許ニ、兒島三郎高德己カ館ニ火ヲ懸テ、纒二十五騎ニテソ打出ケル、國ヲ阻境ヲ隔タル一族共ハ、事急ナルニ依テ相催スニ及ハス、近邊ノ親類共ニ、事ノ仔細ヲ告タリケレハ、今木、大富、和田、射越射、西源院本作時、恐非也、原、松崎ノ者トモ、取物モ取敢ス馳著ケル間、其勢二百餘騎ニ成ニケリ、二百、北條家、西源院、南都、天正本、作三百、兼テハ夜中ニ熊山ヘ取上リ、四方ニ篝火ヲ燒テ、大勢籠リタル勢ヲ、敵ニ見セント巧ミタリケルカ、馬ヨ物具ヨトヒシメク間ニ、夏ノ夜程ナク明ケレトモ、力ナク相圖ノ時刻ヲ違ヘシトテ、熊山ヘコソ取上リケレ、案ノ如ク三石船坂ノ勢共是ヲ聞テ、國中ニ敵出來ナハ、ユ、シキ大事ナルヘシ、萬方ヲ闔テ、先熊山ヲ攻ヨトテ、船坂三石ノ勢三千餘騎ヲ引分テ、熊山ヘソ向タリケル、彼熊山ト申ハ、高サハ比叡山ノ如クニシテ、四方ニ七道アリ、其路何レモ麓ハ少嶮シテ、峰ハ平ナリ、高德纒ノ勢ヲ七道ヘ差分テ四方ノ敵ヲソ禦ケル、追下セハ攻上リ、攻上レハ追下シ、終日戰暮シテ、態時ヲソ移シケル、夜ニ入ケル時、寄手ノ中ニ、石戸彦三郎トテ、三、金勝院本作四、此山ノ案内者有ケルカ、思モ寄ヌ方ヨリ拔入テ、本堂ノ後ナル峯ニテ、関ヲソ揚タリケル、高德四方ノ麓ヘ勢ヲ皆分テ遣シヌ、僅十四五騎ニテ、本堂ノ庭ニ控タリケルカ、石戸カ二百餘騎ノ中ヘ喚テ懸入、火ヲ散シテソ戰ヒケル、深山ノ木隠レ月暗クシテ、敵ノ打太刀分明

建武三年、延元元年

五八三



高德負傷

父範長

ニモ見ヘサリケレハ、高德カ内兜ヲ撞レテ、馬ヨリ倒ニ落ニケリ、敵二騎落合テ首ヲ取ントシケル處ヘ、高德カ甥、松崎彦四郎、和田四郎金勝院本不載、馳合テ、二人ノ敵ヲ追拂ヒ、高德ヲ馬ニ引乘テ、本堂ノ縁ニソ下シケル、高德ハ内兜ノ創痛手ナリケル上、馬ヨリ落ケル時、胸板ヲ馬ニ強ク踏レテ、目昏魂銷ケレハ、暫絶入タリケルヲ、父備後守範長備後、金勝院本作、備前、恐非也、枕ノ下ニ差寄テ、昔鎌倉權五郎景政ハ、平景、成子、左ノ眼ヲ射ヌカレ、三日三夜マテ其矢ヲヌカテ、答ノ矢ヲ射タリト云傳ヘタレ、是程ノ小創一所ニ弱リテ、死ルト云事ヤ有ヘキ、其程云甲斐ナキ心ヲ以テ、此一大事ヲハ思立ケルカト、荒ラカニ恥シメケル間、高德忽ニ息出テ、我ヲ馬ニ昇載ヨ、今一軍シテ敵ヲ追拂ハントソ申ケル、父大ニ悦テ、今ハ此者ヨモ死ナシ、イサヤ殿原、爰ラニ有ツル敵トモ追散サントテ、今木太郎範秀、舍弟次郎範仲次郎、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作、小次郎、中西四郎範顯金勝院本顯作、倚、和泉守、和田五郎範氏五郎、今出川家、毛利家、北條家、西源院、南都本、作、四郎、金勝院本作、和泉守、松崎彦四郎範家金勝院本載、四郎、村、主徒十七騎ニテ、敵二百騎カ中ヘ、薙地ニ懸入ケル間、石戸是ヲ小勢トハ知サリケルニヤ、一立合モ立合セス、南面ノ長坂ヲ、福岡マテコソ引タリケレ、其儘兩陣相支テ、互ニ軍モセサリケリ、石戸、乘、夜、襲、城、以下、至此、天、正、本、不、載、相圖ノ日ニモ成ケレハ、脇屋右衛門佐ヲ大將トシテ、梨原ヘ打莅、二萬騎ノ勢ヲ、三手ニ分タリ、一手ニハ、江田兵部大

新田軍進

江田行義  
杉坂ヨリ  
美作ヘ

大井田氏  
船坂ヘ

烟・由良  
等間道ヲ  
行キテ三  
石ノ西ニ  
出ツ

三石城ヲ  
奇襲ス

輔ヲ大將トシテ、二千餘騎二千、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、作、三千一、杉坂ヘ向ラル、杉坂、西源院本作、船坂、是ハ菅家南三郷ノ者共カ郷、今川家本作、良、非也、固タル處ヲ追破テ、美坂ヘ入ン爲ナリ、一手ニハ、大江田式部大輔氏經ヲ金勝院本作、三民部大輔、義群、非也、大將トシテ、菊池、宇都宮カ勢五千餘騎ヲ、船坂ヘ差向ラル、是ハ敵ヲ爰ニ遮リ留テ、搦手ノ勢ヲ竊ニ後ヨリ廻サン爲ナリ、一手ニハ、伊東大和守ヲ案内者トシテ、頼宮六郎、畑六郎左衛門、當國金勝院本無、畑六郎字、而當國作、政國、蓋脱誤矣、目代少納言範猷、由良新左衛門、小寺六郎、三津澤山城權守金勝院本無、津字、西源院本無、津字、以下、態小勢ヲ勝リテ、三百餘騎向ラル、其勢皆轡ノ七寸ミツブツヲ紙ヲ以テ卷テ、馬ノ舌根ヲ結タリケル、杉坂越ノ北杉坂、金勝院本作、船坂、西源院本作、狗子北、三石ノ南ニ當リテ、鹿ノ渡ル道一アリ、敵是ヲ知サリケルニヤ、掘切タル處モナク、逆茂木ノ一本ヲモ引サリケリ、此道餘ニ木茂リテ、枝ノ支ヘタル處ヲハ、下テ馬ヲ牽、山殊ニ峻シテ足モタマラヌ所ヲハ、中々乗テ懸下ス、兎角シテ三時許ニ峻岨ヲ凌テ、三石宿ノ西ヘ打出タレハ、城中ノ者モ、船坂ノ勢モ、遙ニ是ヲ顧テ、思モ寄ヌ方ナレハ、熊山ノ寄手共カ、歸タルヨト心得テ、更ニ仰、天モセサリケリ、三百餘騎ノ勢共、宿ノ東ナル夷社ノ前ヘ打寄り、中黒ノ旗ヲ差上テ、東西ノ宿ニ火ヲ懸、関ヲソ揚タリケル、城中ノ兵ハ、大略船坂ヘ差向ヌ、三石ニ在シ勢ハ、皆熊山ヘ向ヒタル時分ナレハ、關ハントスルニ勢ナク、禦ントスルニ便ナシ、船

建武三年、延元元年



坂へ向ヒタル勢、前後ノ敵ニ取巻レテ、スヘキ様モ無リケレハ、只馬物具ヲ捨テ、城へ積タル山ノ上へ、匍匐逃登ラントソ騒ケル、是ヲ見テ大手搦手差合セテ、餘スナ漏スナト追懸ケル間、逃方ヲ失ケル敵共、彼此ニ行迫テ、自害ヲスル者百餘人、生虜ル、者五十餘人ナリ、爰ニ備前國一宮ノ在廳ニ、美濃權介佐重異本或作三助重、既出二第七卷、第十四卷、可并見、ト云ケル者、引ヘキ方ナクシテ、已ニ腹ヲ切ラントシケルカ、キツト思返ス事有テ、脱タル鎧ヲ取テ著、捨タル馬ニ打乗テ、向フ敵ノ中ヲ推分テ、播磨ノ方ヘソ通りケル、船坂ヨリ打入大勢共、是ハ何者ソト尋ケレハ、是ハ搦手ノ案内者仕ツル者ニテ候カ、合戦ノ様ヲ委シク新田殿へ、申入候ナリト答ケレハ、ウチ逢數萬ノ勢共、目出度候ト感シテ、道ヲ開テソ通シケル、佐重總大將ノ侍所、長濱カ前ニ跪テ、備前國住人ニ、美濃權介佐重三石城ヨリ、降人ニ參テ候ト申ケレハ、總大將ヨリ、神妙ニ候ト仰ラレ、則著到ニソ附ラレケル、佐重巨多ノ人ヲ出拔テ、其日ノ命ヲ助リケル、是モ暫時ノ智謀ナリ、船坂既ニ破レタレハ、江田兵部大輔ハ、三千餘騎ニテ三千、本文及金千、今相美作國へ打入テ、奈義、能仙、菩提寺、三箇所ノ城ヲ奈義、能仙、金勝院本作三石山、或名木山、前後不レ、今川家、毛利家本、作三奈義、能仙、或作三石山、爲三二所、而加菩提寺、云三三所、北條家、南都本、如三本文、而亦加菩提寺、云三二所、諸本前後體、按、本文第三十六卷、山名時氏攻三落美作城一段、作三名木、能仙、取巻給フ、彼城モ、スヘキ様ナケレハ、馬物具ヲ棄テ、菩提寺、實爲三三所也、諸本認誤自明矣、

船坂破ル

美作ノ奈義、能仙、菩提寺三城ヲ陷ス

義助三石城攻撃氏經福山城ニ陣ス

城ニ續タル上ノ山ヘソ逃上リケル、彼城以下至此、金勝院、西源院、天正本等不レ載、脇屋右衛門佐義助ハ、五千餘騎ニテ三石城ヲ攻ラル、大江田式部大輔ハ、二千餘騎ニテ備中國へ打越、福山城ニソ陣ヲ取ラレケル、

〔七卷册子〕

四月十九日船坂山合戦凶徒敗北シ逃走ルノ間官軍三手ニ分レテ備前備中美作三ヶ國ニ發向シテ諸城ヲ攻ルト云々、

〔註〕

新田軍船坂ヲ拔キテ進出スルノ日、確カナラズ、今、參考太平記、七卷册子等ニヨリテ是日ニ掲グ、

四月二十日<sup>(1)</sup> 淡路國司高倉某、足利軍ト播磨大藏谷ニ戦フ。

〔黃薇古簡集〕

所載不詳 六六三三一九

阿波國富吉莊西方地頭淺原三郎五郎兼有申、卯月廿日淡路國々司高倉少將已下之軍勢等、馳向播磨國大倉谷宿<sup>(明、右)</sup>南濱之處、致散々合戦、自船被上迄北山追懸之條、同所合戦之仁、小笠原孫太郎、有田孫二郎及見了、然則爲後證、可賜御判候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、建武三年卯月廿一日附某證判

四月二十日<sup>(2)</sup> 新田左馬助義氏、足利黨吉良貞經、仁木義高等ト三河吉良莊ニ戦ヒ、足利黨細川頼種ヲ殺ス。

建武三年、延元元年



〔古文書集〕三 (八日ノ條)

〔尊卑分脈〕清和源 賴種 七郎五郎法名崇興、建武三六廿、於三河國吉良合戰討死

(註) 四月八日條參照。

四月二十七日 尊氏、三浦高繼ニ令シテ美作ノ新田軍ヲ伐タシム。且、其ノ周防笠戸ニ到着セルヲ告グ。

〔三浦文書〕(紀伊) △六三二八〇。

美作國凶徒對治事、相催備中美作兩國軍勢、可致嚴密之沙汰、且爲京都發向所著周防國笠戸(郡)也、存其旨殊可致精誠之狀如件、

建武三年卯月廿七日

尊氏  
花押

(註) 大日本史料曰、コノ文書ハ、稍疑フベシト雖ドモ姑ク之ヲ收録ス、ト。

四月是月 武者所結番ヲ定ム。新田義顯・新田貞政・新田貞義・新田行義・新田義治等ノ一族、番ニ列ス。當時、義顯越後守タリ。

〔建武年間記〕

武者所結番事、

義顯  
貞政  
熱田昌能

一番子 午

新田義顯

顯

新田大藏大輔

政

熱田攝津守

能

貞義

長井因幡守

恭

南部甲斐守

長

大友式部大夫

世

貞義

長井掃部助

匡

長沼判官

行

小山五郎左衛門尉

秀

貞義

新田左馬權頭

景

三浦三郎

泰

小笠原別府權守

清

貞義

仁科左近大夫

宗

高梨左近大夫

藤

親

藤

貞義

三浦安藝二郎左衛門尉

續

小早川民部丞

平

三浦源兵衛尉

時

貞義

長江八郎左衛門尉

秀

三尾寺十郎左衛門尉

勝

三浦源兵衛尉

氏

貞義

新田兵部少輔

義

長井前治部少輔

秀

手裏上總介

重

貞義

新田兵部少輔

長

伯耆大夫判官

高

土岐三河權守

行

貞義

野野介

顯

野野江權守

光

瀨田下野權守

宗

貞義

和泉民部丞

持

町野加賀三郎

三善

富部大舍人頭

連

貞義

長井大膳權大夫

秀

長井周防右衛門左近大夫將監

廣

島津修理亮

佐

貞義

遠

宣

町野民部大夫

顯

貞

連

建武三年延元元年

五八九



正義治

長年

新田義貞公當

小串下總守

秀信

藤原高實廣澤安徳正左衛門尉

五番辰戌

義治新田式部大夫

時總藤河守

藤原廣譽招漢イ(源)左衛門尉人

源光清布志郎二郎

六番己亥

信貞武田大膳イ(權)大夫

貞祐宇佐美攝津前司

廣榮金持大和權守

源忠秀本間孫四郎左衛門尉

經原尾張權守

景直

藤原宗家正四郎左衛門尉

正成河内大夫判官

成藤三河守

橋正遠兼谷二郎兵衛尉

平貞宗伯耆守

長年

資時武藏國中權守

俊資山田肥後權守

五九〇

山田權人

源重光

光貞華人正

源茂方中務因幡左近將監

源知方高田六郎左衛門尉

源知行河内左近大夫

家致大見能登守

紀重行春日部權口左衛門尉

右番守次第、一夜日無懈怠可令動仕之狀如件、

延元元年四月日

五月三日 足利黨今川頼貞、官軍ト但馬牧田河原ニ戰フ。尋テ五日、六日、丹波佐治山ニ戰フ。

〔廣峯文書〕(三月是月ノ) (條ニ收ム)

五月五日 尊氏等、備後ノ鞆ニ着ク。

〔淨土寺文書〕(備後) △六三二八二、

備後國尾道浦淨土寺住持空教房心源謹言上、

欲早以當國御建立塔婆、被造立彼寺間事、

副進

一卷 三十三首御詠歌、建武三年五月五日被納當寺(中略)

就之將軍家鎮西御下向之時、被尋件尊體、御上洛之刻、建武三年五月五日、以三十三

首御詠歌、被納御厨子、(後略)(曆應元年) (九月日附)

〔梅松論〕(前文ハ四月三) 兩將は長門の府中にしばらく御逗留にて、當所より其出

舟有御船の事は元暦のむかし九郎大夫判官義經、壇の浦の戦に乗たりし當國串

崎の船十二艘の船頭の子孫の舟なり、義經平家追討の後、此船にをいては日本國

中の津泊にをいて公役あるべからずと、自筆の御下文を今に是を帶す、今度此船

を以御座船に定られけるは尤嘉例に相叶へり、是は長門守護厚東申沙汰する所

也、漸く五月五日の夕、備後の鞆に御着有、(下文ハ十日) (條ニ收ム)

五月八日 義貞、播磨鵜莊戰禍ニツキテ四條隆資ニ報ズ。

建武三年、延元元年

五九一

長府ニ逗留  
出船

五月五日  
鞆ニ着ク



〔法隆寺文書〕(三月十六日)

五月十日<sup>(1)</sup> 尊氏ハ水軍ヲ、直義ハ陸軍ヲ率テ柄ヲ發シ、海陸相竝ンデ東進ス。

柄ニテ軍評定

〔梅松論〕(前文ハ五月五日)

當津に御逗留有けるに、諸國の御方同心に申けるは、御

歸洛いそがるべき趣共なり、仍御合戰評定まぢなり、一儀に云、兩將は御船にて、四國中國の大將國人等陸地を發向すべきか、一儀には兩將皆陸地を御むかひあるべき歟、一儀には兩將皆御舟にて御進發有べきか、各大儀に依ていまだ落居せざる所に、太宰少貳頼尙進申けるは、兩將御船にて御進發の義、更に愚意の及ざる所也、天下の是非は今度の御手合によるべきか、すでに敵播磨備前兩城を圍むよし其告あり、是等を退治して大半は落居あるべきか、然に船軍計にては山陰の退治落居しがたし、幸に兩將御座の上は將軍は御船、頭殿は陸地を御發向有べし、頼尙陸地の先陳を承て、亡父妙惠が遺言に任て百ヶ日の追善合戰して佛事に仕べし、頼尙生前の訴訟たゞ此事なりと頼に申ける間、此儀可然とて、將軍は御舟、下御所は陸地を御發向治定して則御手合あり、御舟には執事師直、關東京都より供奉の宿老、兩國の輩を船に乗られて御發向有べし、下御所の御手には高越後守師

小貳頼尙ノ獻策

尊氏海上直義陸上進軍手分

十日柄ヲ發ツ

楠正成ノ軍船

四國ノ兵船參加

嚴島ニ於テ持明院ヲ拜受ス

秦、關、東京都の供奉の壯士等、ならびに少貳、大友、長門、周防、安藝、備前、備中の御家人等屬し奉る。去春二月、御下向の時より國の大小に隨て馬、鞍、物具、弓、矢、楯、兵糧米の用意可致よし、國々の守護人等に嚴密に被仰合しかば、皆其沙汰をいたす、是遠方の境より供奉の輩に配分し給ふべき御計也、五月十日、備後の柄を立て、舟路陸地、同日御發向有、舟は纜を解て陸は響を鳴しぬ、先陳は太宰少貳頼尙二千餘騎とぞ聞えし、しばしは海と陸と互に見かよはしたりしに、少貳頼尙は旗の横紙にあやいかさを付たり、是は御眷屬御靈影向有て蟬口に御座ゆへに、昔より當家の庭訓なり、御ふね五十余町過て見わたしたれば、舟共多き中に、先舟には御紋の幕を引て漕むかひたりしを、楠が謀に、御方と号して向ふなど聞えて少々騒ぎたりしかども、さはなくして四國の細川の人々、土岐伯耆六郎、伊與の河野の一族、其外の國人等數五百餘艘、其勢五千餘人とぞ聞えし、(下文ハ十八日)

〔參考太平記〕

卷第(前文ハ四月三日)

五月一日

安藝嚴島へ船ヲ寄ラレテ、三日

日參籠シ給フ、其結願ノ日、三寶院僧正賢俊京ヨリ下テ、持明院殿ヨリ成サレケル、院宣ヲソ獻リケル、保曆間記云、持明院殿院宣、到來筑紫、梅松論云、尊氏自京赴筑紫、時、泊於備後、是ヲ拜覽シ給ヒテ、函蓋相應シテ、心中ノ所願既ニ叶ヘリ、向後ノ合戰ニ於テハ、勝

建武三年、延元元年

五九三



各國兵船

朝ニテ軍ノ評定

得平秀光ノ献策

スト云事有ヘカラストソ悦給ヒケル、去四月六日ニ、法皇ハ持明院殿ニテ崩御ナリシカハ、後伏見院トソ申ケル、彼崩御已前ニ下セシ院宣ナリ、按、保曆間記、及諸本第十卷、賜三院宣於尊氏一者、光嚴帝也、今作「後伏見院」非也、且諸本持明院殿崩御云、五月後醍醐帝幸叡山之時、欲與兩院俱幸、然光嚴帝以下賜三院宣於尊氏、故託病留于東寺云々、由是見之、後伏見院、四月既崩、然則所謂五月留東寺一者、爲光嚴、明矣。

將軍ハ嚴島ノ奉幣事終テ、同日毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作「四日」。嚴島ヲ立給ヘハ、伊豫、讃岐、安藝、周防、長門勢、五百餘艘ニテ馳參ル、五百、北條家、南都本、作「五千」。同日天正本作「五日」、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本云、七日、氏備後ノ朝ニ著給ヘハ、備後、備中、出雲、石見、伯耆ノ勢、六千餘騎ニテ馳參ル、其外國々ノ軍勢、招サルニ集リ、攻サルニ從ヒ著事、只吹風ノ草木ヲ靡カスニ異ナラス、新田左中將ノ勢、既ニ備中、備前金勝院本、不載、備中、備前、而有三備後一者、非也。播磨、美作ニ充滿シテ、國々ノ城ヲ攻ル由聞ヘケレハ、賴浦ヨリ、左馬頭直義ヲ大將ニテ、二十萬騎ヲ西源院本、作「二」。差分テ、陸路ヲ上セラル、

○天正異本云、備後賴ニテ、軍ノ評定アリケルニ、得平源太秀光進テ申ケルハ、義貞大勢ニテ、備前、備中、播磨、美作ニ勢ヲ差分テ、道々ヲ塞キ、城城ヲ取圍テ攻候、是等ヲ御對治ナクハ、御方利ヲ失候ヘシ、其上兩御所一ツニ海路ヲ御上洛ハ、然ルヘカラサルノ由、頻ニ申ケレハ、將軍最其謂アリトテ、賴浦ヨリ、直義ニハ二十萬騎ヲ差副テ、陸路ヲ上セ奉リケル、

直義陸路

將軍ハ一族北條家、西源院、南都本云、吉良、石堂、仁木、細川、荒川、斯波、吉見、澁川、桃井、品山、山名、一色、加子、岩松等也。四十餘人餘、天正本作「四」。高家一黨五十餘人、上杉一類三十餘人餘、毛利家、北條家、西源院、南都本、作「九」。外様ノ大名北條家、西源院、南都本云、土岐、佐々木、赤松、千葉、宇都宮、小田、佐竹、小山、結城

五日朝ヲ發ツ

瑞夢

備前吹上  
備中草壁  
庄

一黨、三浦、河越、大友、厚東、大内、菊池等也、按、菊池屬官軍、不當出此、

百六十頭、兵船七千五百餘艘ヲ毛利家、西源院本、作「七千五百六十餘艘」。漕雙テ、海上ヲソ登ラレケル、同五日按、前云、五日、尊氏發嚴島、且連書七日之事、今又云、五日發、備後一者、相繼歸、天正本作「十三日」、北條家、南都本、作「十五日」、梅松論作「二十日」、未知孰是、備後賴ヲ立給ヒケル時、一ノ不思議アリ、將軍屋形ノ中ニ、少マトロミ給ヒタリケル夢ニ、南方ヨリ光明赫奕タル觀世音菩薩、一尊飛來マシマシテ、船ノ軸ニ立給ヘハ、眷屬ノ二十八部衆、各弓箭兵仗ヲ帶シテ、擁護シ奉ル體ニソ見給ヒケル、將軍夢覺テ見給ヘハ、山鳩一ツ船ノ屋形ノ上ニアリ、西源院本、無、鳩集船上事、彼此偏ニ圓通大士ノ擁護ノ威ヲ加ヘテ、勝軍ノ義ヲ得ヘキ、夢想ノ告ナリト思召ケレハ、杉原ヲ三帖、短冊ノ廣サニ切セテ、自ラ觀世音菩薩ト書セ給ヒテ、舟ノ檣毎ニソ押セラシケル、角テ舟路ノ勢、既ニ備前吹上ニ著ハ、步路ノ勢ハ、備中草壁庄ニソ著ニケル、

五月十日<sup>(2)</sup>日向ノ官軍益戶行政等、土持宣榮ト戰フ。之ヲ新田與同之仁ト稱ス。

〔薩藩舊記〕

前集十三 御領大田原村新助藏

△六三三六〇

新田右衛門佐與同之仁、益戶彌四郎行政、同四郎兵衛尉秀名、并石河内辨濟使以下、

建武三年、延元元年



今月十日新納院岩戸原彦尾合戦段、被致忠節之由、被聞食狀如件、(建武三年五月十二日附、土持新兵衛尉宛)

新田右衛門佐與同之仁、益戸彌四郎行政以下、楯籠石之城者、早佐伯備前權守、并一族等相共馳向彼城、可被誅伐之狀如件、(建武三年五月十五日附、土持新兵衛尉宛)  
(兩文書共ニ差出人、島山直顯ナルベシ)

五月十五日 尊氏、備前兒島ニ到ル。(梅松論)(十八日ノ條ニ收ム)

五月十六日 足利黨今川頼貞、但馬氣比城ニ官軍ト戦フ。(廣峯文書)(三月ニ收ム)

五月十七日<sup>(1)</sup> 宮三位中將、丹波ニ發向セントシテ兵ヲ召ス。(田所文書)

五月十七日<sup>(2)</sup> 足利黨加地景綱、新田氏ノ黨ト越後佐崎原ニ戦フ。(色部文書)(去年十二月十九日ノ條ニ收ム)

五月十八日 直義、大井田氏經ノ據レル備中福山城ヲ攻メテ之ヲ陷イ

ル。因テ、義助ハ三石城ノ圍ミヲ、義貞ハ白旗城ノ圍ミヲ解キテ退ク。

十五日兒島ヲ着ク

(梅松論)(上文ハ十日ノ條ニ收ム)

五月十五日、備前國兒島に着給ふ、當所は佐々木の一族の

直義備中河原ニ陣ス

所領なる間、加地筑前守渚近く假御所を造、御風呂扨たて御休息ありしに、其夜の満月に黒雲二筋引渡し數刻見えしかば、軍勢皆合掌して拜し奉る、是は大なる奇瑞なりし、凡今度九州御座の間、諸社の不思議共御方の吉兆するすに違あらず、ことに難有かりしは、太宰府に御座の時、博多の櫛田の宮、住吉の御社の下女に詫して云、我今度兩將を都まで守護し安穩に送るべきが、但合戦を致べし、白旗一流鏡、御劍、弓、征矢、上矢の鏑をさし添て奉るべしと御詫宣新なりし間、悉調進せられける、御使者見る前にて、神詫の女弓を張上矢の鏑をはけて云、我をうたがふ者多し、其證は今度武將天下をとるべくば、此矢一もはづるべからずとて、櫻樹の細枝を射事三度、一もはづる、更なし、更に賤女のわざにあらず、此外天神の使者の御豊合戦の度毎に光を耀し給ふにぞ安堵しける、亦武將御下向の時、靈夢の子細有て、白葦毛なる老馬を、立御座船に引そへらる、又上より諸軍勢に至る迄、胃の眞向に南無三寶觀世音弁と書付て、毎月十八日觀音懺法をよませらる、御下向の時、は三百余艘の舟より僧達を召れしに、人數とぼしからず、御歸洛の時は云に不及勤行有しに、五月十七日に下御所の御陳備中の河原と備前の兒島の間三里下

建武三年、延元元年

五九七



白石城三石合戦  
最中江田  
新田江田  
福山江田  
福山江田  
賊福山城  
三石ノ圍  
解ク  
兒島出帆  
義貞白旗  
城ノ圍ヲ  
解ク  
賊掛河ニ  
陣ス  
室泊ニ着

御所より御使あり、當手には備中、備後、安藝、周防、長門の、大將、守護人、國人等并三浦介、美作國より昨日馳參す、太宰少貳太友供奉の間、御勢數をしらす候、御舟には四國の勇士等參着のよし承、間目出度候、但播磨の赤松、備前の三石の城合戦の最中のよし聞え候處に、結句新田、江田某、大將として馳下て近日備中の福山に楯籠間今夕手分せしめ、明日拂曉に追落し火をあぐべく候、彼城と御陳の兒島近所たる間、御用心のために馳申所なり、去程に翌日十八日、觀音懺法行はれ、滿散過て當所の景物楊梅取に上の山に登ける下部走下て云、既御方の大勢福山を責落して飛入て火を放間、敵皆落行よし申あげたり、時分柄實に佛神の御加護と頼母數ぞ思召ける、則陸地の御勢備前國へ責入給ひしかば、三石の城の寄手脇屋没落すと聞えしかば、下御所より飛脚を以賀し申さる、頓て兒島の御舟を出さる、海と陸との御陳、日夜約束の火を揚られしかば、山をへだてながら、互に御陳の在所をぞしらしめされける、去程に備前三石の寄手の勢落上りしかば、新田義貞、赤松の城の圍を解て没落す、しかる間、陸地の大勢は播磨の掛河に陳をとる、御舟は田室の泊に着給ふ、翌日赤松入道、御舟へ參り申て云は、今度圓心が城に馳籠軍勢の着到并敵没落のとき、せめ口に捨置旗百余流持參す、一々御披見有しかば、家々の紋紛れず、

則村室泊ニ來ル

十八日白旗城ノ圍

福山合戦

武將仰られけるは、是をみるに、根本敵なるは是非に不及、御方へ戦功有輩は少々見ゆるが、一旦の害を遁れんが爲に、義貞に屬しける心中不便なり、是等もはたして御方に參るべしとて、中中快悦の御顔色なりしかば、實に忝御意とぞ覺えし、此旗共をば數をしるして、後日に沙汰有べしとて、赤松にぞ預られける、(下文ハ二十一日ノ條ニ收)

〔深堀系圖證文記録〕

佐賀文書纂所收 六三、四二〇

建武三年五月廿五日、太宰少貳(頼尙)施行狀一通、副尊氏將軍御教書寫、備中國福山、備前三石、播磨國赤松凶徒等、去十八日没落之後、今日廿五日、於兵庫島、楠判官正成及合戦之間、誅伐了、此上者入洛之條、不可有子細候歟、且當島警固京方軍勢等悉没落之間、差遣討手畢、可存其旨之狀如件、

建武三年五月廿五日

仁木次郎四郎殿

〔萩藩閥録〕

百二十一ノ一 六、三、三八二

目安

石見國周布郷總領地頭彦次郎入道蓮心(兼宗)軍忠事、備中國於福山合戦、建武三年五月十八日

建武三年、延元元年



脇屋義助ノ一見狀

致散々合戰之時、蓮心被射貫右膝被疵畢、是、次家子大貳法橋賴丹、若黨荒木刑部太郎宗澄等令討死畢、是、次中間平三男、右二腕、五郎太郎男右足被射之被疵、致軍忠之條、御見知之上者、任實正可有御注進候、仍恐々言上如件、

延元々年七月日

脇屋右衛門義助一見了判

石見國周布彦次郎入道蓮心、備中國福山城軍忠事、所進目安無相違候、若此條偽申候者、可蒙佛神御罰候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

七月廿九日

民部丞頼重狀判

進上 御奉行所

此條早々申御沙汰候者可宜候畢、

義助抽判

義助判

齋藤五郎兵衛尉とのへ

石見國周布鄉總領地頭彦次郎入道蓮心申、備中國福山合戰之時、被自身疵右膝被射貫家子大貳法橋賴丹、若黨荒木刑部太郎宗澄打死、中間兩人被疵畢、此段小早川民部

丞就注進狀、御一見狀給之間、爲齋藤五郎兵衛尉奉行上者、重給御舉狀申進存候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

九月廿七日

沙彌蓮心狀

進上 御奉行所

裏在判

〔吉川家什書〕

十三 經時御代 △六、三、三八三

尾張守殿高師御一見狀、正文ハ武田甲斐守所ニ存之、

吉川小次郎經時申、

右今年建武五月十八日、於備中國福山城大手、懸先致合戰追落了、軍忠次第爲大將

御前之間、不及證人、然早爲後證、下給御判、可備後日龜鏡候、恐惶謹言、建武三年六月十日附、高師奉ノ

判證

〔天野文書〕

前田侯爵本 △六、三、三八四

天野安藝三郎遠政申、去五月十八日奉屬當御手、押寄備中國福山城、致合戰之條、須山二郎、小藏大貳房、同所合戰之間、所令見及也、然者賜御判、可備後證候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年七月日

前田高師（花押）

建武三年、延元元年

六〇一

斯波高經  
福山城ヲ  
攻ム



大江田式部大輔氏ヲ經死守ス

勢山

淺原峠

〔山内首藤文書〕(去年十二月十一日ノ條ニ收ム)

〔參考太平記〕卷第十六 福山合戰附兒島備後守討死事

福山ニ楯籠處ノ官軍共、此由ヲ聞テ、此城イマタ拵ルニ及ハス、彼ニ附此ニ附、大敵ヲ支ン事ハ、叶フヘシトモ覺スト申ケルヲ、大江田式部大輔、姑ク思案シテ宜ケルハ、合戰ノ習、勝負ハ時ノ運ニ依トイヘトモ、御方ノ小勢ヲ以テ、敵ノ大勢ニ闘ハント、負スト云事ハ、千ニ一モ有ヘカラス、去ナカラ國ヲ超テ、足利殿ノ上洛ヲ支ントテ向タル者カ、大勢ノ寄レハトテ、聞逃ニハ如何スヘキ、ヨシヤ只一業所感ノ者共カ、此所ニテ皆死ヘキ果報ニテソ有ラメ、死ヲ輕シ、名ヲ重スル者ヲヨソ人トハ申セ、誰々モ爰ニテ討死シテ、名ヲ子孫ニ殘サント、思定ラレ候ヘト、諫メラレケレハ、紀伊常陸合田以下ハ、申ニヤ及候ト領掌シテ、討死ヲ一篇ニ思儲テケレハ、中々心中涼シクソ覺ケル、サル程ニ明レハ五月十五日ノ宵ヨリ、左馬頭直義、三十萬騎ノ勢ニテ、本文及諸異本、前作ニ勢山ヲ打越、福山ノ籠四五里カ間、數百個所ヲ陣ニ取テ、篝火ヲ燒テソ居タリケル、此勢ヲ見テハ、如何ナル鬼神トモイヘ、今夜落ヌ事ハヨモ非シト覺ケルニ、城ノ篝火燒止ス、猶堪タリト見ヘケレハ、夜既ニ明テ後、先備前今川毛利家、北條家、南都、天正本、作「備後」備中ノ勢共、三千餘騎ニテ推寄、淺原峠ヨリソ懸タリケル、是迄モ

氏經等突出ス

城中鳴ヲ靜メテ音モセス、サレハコソ落タリト覺ルソ、聞ヲ揚テ敵ノ有無ヲ知トテ、三千餘騎ノ兵共、楯ノ板ヲ敲キ、関ヲ作ル事三聲、近附テ上ラントスル處ニ、城中ノ東西ノ城戸口ニ、太鼓ヲ打テ關ヲ合タリケル、餘處ニ控タル、寄手ノ大勢是ヲ聞テ、源氏ノ大將ノ籠リタランスル城ノ、小勢ナレハトテ、聞落ニハヨモセシト思ヒツルカ、果シテイマタ堪タリケルソ、侮テ手合ノ軍シ損ヌナ、四方ヲ取卷テ同時ニ攻ヨトテ、國々ノ勢一方一方ヲ請取テ、谷々峰々ヨリ攻上リケル、城中ノ者共ハ、兼テヨリ思儲タル事ナレハ、雲霞ノ勢ニ圍レヌレ共、少モ騒カス、此彼ノ木隱ニ立隠テ、矢種ヲ惜マス散々ニ射ケル間、寄手稻麻ノ如クニ立雙ヒタレハ、アタ矢ハ一モ無リケリ、敵ニ矢種ヲ盡サセント、寄手ハ態射サリケレハ、城ノ勢ハイマタ一人モ手負ハス、大江田式部大輔是ヲ見給ヒテ、サノミ精力ノ盡ヌ前ニ、イサヤ打出テ、左馬頭カ陣、一散シ懸散サントテ、城中ニハ、徒立ナル兵五百餘人ヲ留テ、馬強ナル兵千餘騎引率シ、城戸ヲ開カセ、逆茂木ヲ引ノケテ、北ノ尾ノ殊ニ峻シキ方ヨリ、喚テソ懸出ラレケル、一方ノ寄手二萬餘騎、是ニ懸落サレ、谷底ニ馬ヲ馳コミ、イヤカ上ニ重ナリ伏ス、式部大輔是ヲハ打捨、東ノ離レ尾ニ二引兩旗ノ見ユルハ、左馬頭天正本作「左兵衛督、非也、時直義未レ爲「左兵衛督」下倣レ之ニテソ有ラントテ、二萬餘騎控タル勢ノ中へ破テ入、時移ル

建武三年、延元元年



福山城燒

氏經三石  
ニ着ク

義貞ヨリ  
ヲ出シ退  
却ラス、

マテソ聞ハレケル、是モ左馬頭ニテハ無リケルトテ、大勢ノ中ヲ颯ト懸拔テ、御方ノ勢ヲ見給ヘハ、五百餘騎討レテ、纔ニ四百騎ニ成ニケリ、爰ニテ城ノ方ヲ遙ニ觀ハ、敵ハヤ入替リヌト見ヘテ、櫓搔楯ニ火ヲ懸タリ、式部大輔其兵ヲ一所ニ集メテ、今日ノ合戦今ハ是迄ソ、イサヤ一方打破テ、備前ヘ歸リ、播磨三石ノ勢ト一ニナラントテ、板倉橋ヲ東ヘ向テ落給ヘハ、敵二千騎三千騎、此彼ニ道ヲ塞テ打留ントス、四百餘騎ノ者共モ遁ヌ處ソト、思ヒ切タル事ナレハ、近附敵ノ中ヘ破テ入驅散シ、板倉川ノ邊ヨリ唐皮迄、十餘度毛利家、西源院、天正本、作三十六度、北條家、南都本、作二十六度、マテコソ戦ヒケル、サレ共兵モサノミ討レス、大將モ恙ナカリケレハ、虎口ノ難ヲ遁テ、五月十八日早旦ニ、三石宿ニソ落著ケル、左馬頭直義ハ、福山ノ敵ヲ追落シテ、事始ヨシト悦給フ事斜ナラス、其日一日唐皮宿ニ逗留有テ、首ノ實檢有ケルニ、生虜討死ノ首、千三百五十三今川家本作三百五十余、ト註セリ、當國吉備津宮ニ、參詣ノ志オハシケレトモ、合戦ノ最中ナレハ、觸穢ノ憚有トテ、只願書計ヲ籠ラレテ、翌日唐皮ヲ立給ヘハ、將軍モ舟ヲ出サレテ、順風ニ帆ヲ揚ラレケル、五月十八日ノ晚景ニ、脇屋右衛門佐、三石ヨリ使者ヲ以テ、新田左中將ノ方ヘ立テ、福山ノ合戦ノ次第、委細ニ註進セラレケレハ、其使者驢テ馳返テ、白旗、三石、菩提寺城、イマタ攻落ザル處ニ、上段既云、菩提寺城陷、云々、而今云、未拔者、相繼歸、按、上段諸別本或唯云、江田團、奈義、

帝都ヲ後  
ニシ水陸  
ノ敵ヲ一  
處ニ待受  
ケン

兒島高德  
西川尻ニ  
陣セリ

能備、菩提寺三城、而無、誠陷之、文、者、與、此、符、合、可、以、并、考、之、尊氏直義大勢ニテ、船路ト陸路トヨリ上ルト云ニ、若陸ノ敵ヲ支ン爲ニ、當國ニテ相跋ハ、舟路ノ敵差違テ、帝都ヲ侵サン事疑ナシ、只速ニ西國ノ合戦ヲ打捨テ、攝津國邊マテ引退キ、水陸ノ敵ヲ一處ニ跋受、帝都ヲ後ニ當テ合戦ヲ致スヘク候、急キ其ヨリモ、山里ノ邊ヘ出合レ候ヘ、美作ヘモ、此旨ヲ申遣シ候ツルナリトソ、仰ラレタリケル、是ニ依テ五月十八日ノ夜半許ニ、官軍皆三石ヲ打捨テ、船坂ヲ引レケル、城中ノ勢共是ニ機ヲ得テ、船坂山ニ出合、道ヲ塞テ散々ニ射ル、宵ノ間ノ月山ニ隠レテ、前後サタカニ見ヘヌ事ナレハ、親討レ子討ルレトモ、只一足モ前ヘコソ行延ントシケル處ニ、菊池カ若黨ニ、原源五、源六トテ、名ヲ得タル大剛ノ者有ケルカ、態跡ニ引サカリテ、御方ノ勢ヲ落サント禦矢ヲ射タリケル、矢種皆射盡シケレハ、打物ノ鞘ヲハツシテ、傍輩共アラハ返セトソ呼ハリケル、菊池カ若黨共是ヲ聞テ、遙ニ落延タリケル者共、某此ニ在ト名乗懸テ、返合ケル間、城ヨリヲリ合ケル敵共、サスカニ近附得スシテ、只餘所ノ峰々ニ立渡リテ、関ヲソ作リケル、其間ニ數萬ノ官軍共、一人モ討ル、事ナクシテ、大江田式部大輔、其夜ノ曙ニハ、山里ヘ著ニケリ、此下、今川家、北條家、西源院、南都、天正本、不出、和田備後守範長、子息三郎高德、佐々木ノ一黨カ、船ヨリアカル由ヲ聞テ、是ヲ禦ン爲ニ、西川尻ニ陣ヲ取テ居タリケルカ、福

建武三年延元元年

六〇五



山既ニ落サレヌト聞ヘケレハ、三石勢ト三石、毛利家本、作ニ成合ン爲ニ、九日夜ニ入テ、山里ニ下做レ之

九日、金勝院本作二十八日、共非也、毛利家本作二十九日、爲得、按、前云、義助十八日夜半、退、自三船坂云々、由、此見レ之、本文九日上、脱、十字、三石ヘソ馳著ケル、爰ニテ人ニ

尋レハ、脇屋殿ハ、早宵ニ播磨ヘ引セ給ヒテ候ナリト申ケル間、サテハ船坂ヲハ通

リ得シトテ、先日搦手ノ廻リタリシ三石ノ南ノ山路ヲ、タトルタル終夜越テ、サ

コシノ浦ヘソ出タリケル、夜イマタ深カリケレハ、此儘少ノ逗留モナクテ打テ通

ラハ、新田殿ニハ、安ク追著奉ルヘカリケルヲ、子息高德カ、先ノ軍ニオフタリケル

創、イマタ愈<sup>（聖カ）</sup>サリケルカ馬ニ振レケルニ依テ、目昏膽消テ、馬ニモタマラサリケル

間、サコシノ邊ニ相知タル僧ノ有ケルヲ尋出シテ、預置ケル程ニ、時刻推移リケレ

ハ、五月ノ短夜明ニケリ、去程ニ道ヨリ、落人ノ通ケルト聞テ、赤松入道、三百餘騎ヲ

差遣シテ、那波邊ニテソ躓セケル、備後守僅八十三騎ニテ、大道ヘト心サシテ打ケ

ル處ニ、赤松カ勢トアル山陰ニ寄合テ、落人ト見ルハ誰人ソ、命惜クハ弓ヲ弛シ、物

具脱テ降人ニ參レト、詞ヲソカケタリケル、備後守是ヲ聞テカラカヲ打笑ヒ、聞

モ習ハヌ言カナ、降人ニ成ヘクハ、筑紫ヨリ將軍ノ様々ノ御教書ヲ成テ、スカサレ

シ時コソ成ンスレ、其ヲタニ引裂テ、火ニクヘタリシ範長カ、御邊達ニ向テ、降人ニ

ナラントエコソ申マシケレ、物具ホシクハ、イテ取ラセント云儘ニ、八十三騎ノ者

赤松勢

サコシノ  
浦ニ高德  
ヲ預ク

那波ヨリ  
阿彌陀宿  
マテ十八  
度戰フ

兒島範長  
自殺

和田範家

共、三百餘騎ノ中ヘ喚テ懸入、敵十二三騎斬テ落シ、二十三騎ニ手負セ、大勢ノ圍ヲ破テ、濱路ヲ東ヘソ落行ケル、赤松カ勢案内者ナリケレハ、懸散サレナカラ、前々ヘ馳過テ、落人ノ通ルソ、討留メ物具ハケト近隣傍庄ニソ觸タリケル、是ニ依テ其邊二三里カ間ノ野伏共、二千人出合テ、此ノ山ノ陰、彼ノ田ノ時ニ立渡リテ、散々ニ射ケル間、備後守カ若黨共主ヲ落サンカ爲ニ、進テハ懸破リ、引下テハ討死シ、那波ヨリ阿彌陀宿ノ邊迄、十八度マテ戰テ落ケル間、打殘サレタル者、今ハ僅主從六騎ニ成ニケリ、備後守或辻堂ノ前ニテ馬ヲ控テ、若黨共ニ向テ申ケルハ、アハレ一族共タニ打連タリセハ、播磨ノ國中ヲハ、安ク蹴散シテ通ルヘカリツル物ヲ、方々ノ手分ニ向ラレテ、一族一所ニ居サリツレハカナシ、範長討ルヘキ時刻ノ到來シケルナリ、今ハ遁ルヘキトモ覺ネハ、最期ノ念佛心靜ニ唱ヘテ、腹ヲ切ラント思フソ、其程敵ノ近ツカヌ様ニ禦ケトテ、馬ヨリ飛テオリ、辻堂ノ中ヘ走入、本尊ニ向ヒ手ヲ合、念佛高聲ニ二三三百遍カ程唱ヘテ、腹一文字ニカキ切テ、其刀ヲ口ニクハヘテ、ウソブシニ成テソ伏タリケル、其後若黨四人、續テ自害ヲシケルニ、備後守カ從弟ニ、和田四郎範家ト云ケル者、暫ク思案シケルハ、敵ヲハ一人モ滅シタルコソ、後マテノ忠ナレ、追手ノ敵、若赤松カ一族子共ニテヤ有ラン、サモアラハ引組テ、刺違ヘ



宇野重氏

シスル物ヲト思ヒテ、刀ヲ拔テ逆手ニ握リ、兜ヲ枕ニシテ、自害シタル體ニ見ヘテソ伏タリケル、此へ追手ニ懸リケル、赤松カ勢ノ大將ニハ、宇野彌左衛門次郎重氏トテ、次郎、金勝院本作三四郎和田カ親類ナリケリ、直ニ辻堂ノ庭へ馳來テ、自害シタル敵ノ首ヲ取ントテ、是ヲ見ルニ、袖ニ著タル笠驗、皆下黒ノ紋ナリ、重氏拔タル太刀ヲ抛テ、荒淺マシヤ、誰ヤラント思ヒタレハ、兒島、和田、今木ノ人々ニテ有ケルソヤ、此人達ト疾知ナラハ、命ニ代テモ助クヘカリツル物ヲト悲テ、涙ヲ流シテ立タリケリ、和田四郎此聲ヲ聞テ、範家はニ在トテ、カハト起タレハ、重氏膽ヲツフシナカラ立寄テ、コハ如何ニトソ悦ケル、聽テ和田四郎ヲハ、同道シテ扶ケ置、備後守ヲハ、葬禮懇ニ取沙汰シテ、遺骨ヲ故郷ヘソ送りケル、サテモ八十三騎ハ討レテ、範家一人助カリケル、運命ノ程コソ不思議ナレ、

義貞引退兵庫事

新田左中將義貞ハ、備前美作ノ勢トモヲ誅汰ヘン爲ニ、賀古川ノ西ナル岡ニ陣ヲ取テ、二日マテソ逗留シ給ヒケル、折節五月雨ノ降ツ、キテ、河ノ水増リケレハ、跡ヨリ敵ノ懸事モコソ候へ、先總大將、又宗徒ノ人々計ハ、舟ニテ向へ御渡候ヘカシト、諸人口々ニ申ケレトモ、義貞サル事ヤ有ヘキ、渡サヌ先ニ敵懸リタラハ、中々引

義貞賀古川ニ於テ背水陣ヲ取ル

義貞最後ニ渡河

兵庫ニ着ク

ヘキ方無シテ死ヲ輕ンセンニ便アリ、サレハ韓信カ水ヲ背ニシテ陣ヲ張シハ是ナリ、軍勢ヲ渡シ果テ、義貞後ニ渡ルトモ何ノ痛カ有ヘシトテ、先馬弱ナル軍勢、手負タル者トモ、漸々ニソ渡サレケル、去程ニ水一夜ニ落テ、備前美作ノ勢馳參リケレハ、馬筏ヲ組テ、六萬餘騎、同時ニ川ヲソ渡サレケル、是迄ハ西國勢共馳參テ、十萬騎ニ餘リタリシカ、將軍兄弟上洛シ給フ由ヲ聞テ、何ノ間ニカ落失ケン、五月十三日金勝院本作二十三日、爲得、按、上段云、五月十六日、福山城合戰、十八日、義助退、於播磨、由是考之、義貞至兵庫、理當在二十三日、蓋本文十字上、脫三二字、左中將兵庫ニ著給ヒケル時ハ、其勢纔二萬騎ニモ足サリケリ、

五月二十一日 直義、三石ノ光明寺ニ土地ヲ寄進ス。

〔永明院文書〕(山城) △六、三、三九七、

寄附

備前國三石保光明寺寄進地事、

右以當寺敷地類田畠拾町寄附狀如件、

建武三年五月廿一日

源朝臣(花押)

五月二十三日 播磨ノ足利黨廣峰貞長、足利軍ニ合ス。

〔廣峰文書〕(乾)

播磨

高越後殿(御) □ □ 案

△六、三、四一六、

建武三年、延元元年



播磨國御家人廣峯社大別當又太郎入道正俊(貞)御上洛最前令馳參候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言(建武三年五月廿三日附、正俊差出)

五月二十四日 足利黨森本爲時等、攝津野鞍ヲ攻メ、明日、又藍莊ニ戰フ。

〔古文書淺草文〕森本松次郎△、六、三、三九八、貞長書上

多田院御家人森本左衛門次郎爲時申軍忠之事、

五月廿四日、當大將御發向野鞍(攝津有馬郡ニ野々倉アリ)之時、率一族野内左衛門尉仲重、同四

郎季延、同馬次郎家季、同六郎時長、同三郎助時、同四郎時實、同五郎時基、同八郎時重、

同孫九郎時任、同孫次郎景光、同又三郎時信、同衛門次郎公光、同源次郎公時、同野五

光長、同源次郎爲延等御共仕、致合戰忠訖、

同廿五日、藍莊(有馬郡)合戰致忠之段、松山宮内左衛門尉所令見及也、

一同廿六日、御上洛之時御供仕、至于同六月四日、令勤仕所々警固者也、

一同五日、御發向山門無動寺時、爲時一族四郎季延、同馬次郎家季、同五郎時(爲、同孫次郎景光等相共御供仕、經數日致合戰之忠畢、此段證人同前)

同廿七日、奧林御座之時、率一族四郎、同馬次郎、同五郎右衛門次郎、野内左衛門尉代

兵衛三郎等、馳參當所致警固、同七月四日、吳庭合戰致忠訖、證人同前、

兵衛三郎等、馳參當所致警固、同七月四日、吳庭合戰致忠訖、證人同前、

廿四日賊野鞍ヲ攻

廿五日藍莊合戰

廿六日上洛

六月五日無動寺發行

廿七日奧林

吳庭合戰

尼崎合戰

安滿繩手合戰

一同六日、尼崎合戰之時、一族四郎、同五郎、同馬次郎、同右衛門次郎、同孫次郎、同野内左衛門尉代兵衛三郎、致合戰忠節之段、證人同前、  
一同八日、安滿繩手合戰之時、爲時一族四郎、同五郎、同馬次郎、同右衛門次郎、同孫次郎、同野内右衛門尉代兵衛三郎、相共致合戰忠之段、證人同前、  
右任度々軍忠之旨、賜御證判、備後證、施弓箭之面目、彌爲致軍忠、粗言上如件、(建武三年七月附、某證判)

五月二十五日(一) 義貞、兵庫ニ陣シテ足利軍ヲ邀フ。正成、勅命ヲ蒙リ赴援ス。尊氏・直義ノ大軍、水陸竝ビ進ム。義貞ハ尊氏ノ水軍ニ備ヘテ和田岬ニ陣シ、正成ハ直義ノ陸軍ニ備ヘテ、湊川ニ陣ス。是日、兩軍會戰シテ、正成、戰死ス。義貞、敵ノ全軍ト西宮ニ激戰シテ敗レ、京都ニ退ク。

〔梅松論〕(前文ハ十八日ノ條ニ收ム) さて當所室と兵庫の間の海は、おしてには必播磨灘とて、御下向のごとくよき順風を得ざる外は渡らざる難所たる間、日よりをまたれし程に、既陸地の御勢は進み給ふ(イナシ)に、御舟の御逗留を諸軍勢なげきし時分、五月廿三日戌刻に雨まじりたる西風少し吹(イ)なり、將軍御悦有て仰られけるは、此風は天のあたふる物か、はや纜をとくべしと有ければ、或議に云、海上の事其儀を得ず、異

建武三年、延元元年

廿三日夜帆泊ヲ出



見を申がたし、大船共の船頭を召れて御尋有べしと有に依て、御座船串崎の船頭、千葉大隅守が舟をきはしの船頭、大友少貳、長門、周防の舟の船頭拾四人、御前に列して各申けるは、此風今は順風なれ共、月の出汐に吹替てむかふべきか、出されては若途中にて難義あるべきかと有ければ、爰に上杉伊豆守の乗舟、名をば今度船と號す、長門安武郡椿の浦の船頭孫七畏申けるは、是は御大慶の順風と存候、その故は、雨は風の吹出てに降候、月の出ば雨は止候べし、少はこはく候とも、追風なるべきよし一人申上たりしかば、御本意たるに依て御威再三に及ぶ、忝御意を懸られ左衛門尉になさる、將軍仰られけるは、元暦の昔九郎判官義經、渡邊よりは大風なりしかども、順風なればこそ渡りつらめとて、雨の止も御待なくして御座船出さる、あやうかるべきよし餘多の船頭申上をば聞召れずして、一人が申を御許容如何と内々申輩有けれども、進有なれば異見に不及、既御舟を出されければ、惣て船數大小五千餘艘とぞ聞えし、去ながら其夜御供に出し舟三千艘には過ぎりけり、月の出汐を待て、室より五十町東なる杓子浦に御舟かゝる、案のごとく雨止しかば、月とともに御座船走りけり、こはかりしかども順風なりければ、皆帆をあけて走りけるに、夜の明がたになりしかども、近くは山みえぬ海なかに、浪は屏風

を立たるごとくなれば、心ばそかりしかども、おほくの船共廿四日の暮程に、御船を始として播磨の大藏谷の澳にぞいかりをおろしてかゝり給ひし、四國船を本船にて御先に走る、是も淡路の瀬戸、須磨、明石の澳にぞ泊し、夜になりしかば、皆船の舳艫に焼す篝火、實に浪を焼かんとぞみえし、陸地の勢は一谷を前にあて、昔土肥次郎實平が陳取たりける鹽屋の邊より始て、後は大藏谷、猪名見野邊にてぞ篝火焼たりし、海と陸の兩陳見渡たりし間、明日五月廿五日、兵庫の合戦の事御談合の御使、夜の中に往復度々に及ぶ、當所にをいて御手分有、大手は下御所、副大將は越後守師泰、大友、三浦介、赤松、播磨、美作、備前、三ヶ國の惣軍勢なり、山の手の大將軍は尾張守殿、安藝、周防、長門の守護厚東、並軍勢共也、濱の手は太宰少貳頼尙、並一族の分國、筑前、豊前、肥前、山鹿、麻生、薩摩の輩相隨てむくべきにぞ定められける、頃は五月のみじかよ、明やすき天を待かねて、我もく人と人に先をかけられじと獨ごとせしこそ、武くもあはれなれ、廿五日卯刻に細川の人々、四國の舟五百餘艘を本船として、なを追風なれば昨日のごとく帆をあげて、敵の整たる湊川と兵庫の島をば左にみなしてぞはしりける、敵の跡をふさがん爲なり、將軍の御座船は錦の御旗に日を出して、天照太神八幡大菩薩を金の文字に打て付られたりければ、日に



辰ノ刻  
官軍ノ配  
楠正成

新田勢

小貳勢濱  
手ヲ進ム

輝てきらめきたりし、手をときて浦風に飄し、御船を出さる、時は毎度鼓を鳴されし間、同時に數千艘の舟帆を上て、淡路の瀬戸五十町をせばしときしり合て、更に海はみえず漕竝べたりしに、陸地の御勢も同打立て、一谷を馳こすとみえし程に、辰の終に兵庫島をイナシ近く見渡イ、だしたりければ、敵は湊河の後の山より里まで旗をなびかし、楯を並て整たり、是は楠大夫判官正成とぞ聞えし、播磨海道の須磨口も大勢向ひてさへたり、濱の手は和田の御崎イ、見の小松原を後にあて、中黒の旗さして一萬余騎もあらんと見えしが、げに三切に整へたり、先は五百余騎計かとみえ、其次は二千余騎計、次に松原を懸て拍たり、時移て巳刻に御方の三手の勢、山の手、須磨口、濱イの手同時に向ひしが、イ、あらし、イ、あらいの故にや、濱の手の少貳が勢ぞ旗の下二千餘騎にて進みたる、殊に一町計先立て五百餘騎、また是に進て五十餘騎向ひし中より、武者二騎十杖ばかり先立たり、一騎は黒き馬に薄紅の母衣懸たり、鎧の毛はさだかにみえず、一騎は河原毛なる馬に黃威の鎧着たり、二騎ながら少貳が親類なり、母衣掛たるは武藤豊前治郎イ、次黃威の鎧は同對馬小次郎、共に若年の者にてぞ有ける、陸と舟との間、一町計をへだてたれば、船よりは、棧敷の前の見物にてぞありし、御座船の鼓の亂聲聞えしかば、海上よりつくり初し時の聲を陸地の大

新田軍ノ  
移動

上陸戦

義貞退却  
トノ説

正成戦死

勢受取て三度つくり、上矢の鎗響しかば、六種の震動も是には過じとぞおぼえし、これをみて敵の先陣一矢も射す引退く間、次の陣に先立の一騎イは、馬の足を直て懸りしを、射せじと跡の大勢つゞきし程に、和田の御崎イ、見の合戦破れて兵庫の端の在家イ、により煙あがりしかば、大道もたまらず、山の手も又かくのごとし、さる程に四國の勢、兵庫の敵を落さじとて生田の森の邊よりあがりける所に、義貞、兵庫の戦に打負て三千騎計にて引けるに行合たり、敵は馬に乗間、船の御方共左右なくおりざりける所に、細川の人々從兄弟我も我もと進まれける中にも、卿公定禪弟帶刀先生、古山、杉田、宇佐美、大庭を先として舟より馬追下イ、追して打乗、先八騎にて大勢の中へ入て戦けるが、敵手繁イ、重かりければ、馬を打ひたして木の船に乗ける處に、讃岐の國人新野見小大夫イ、太と云ける者勇て、大將の御命に替候とて、馬踏放て汀に獨殘て打合けるをみ給ひて、定禪重ねて十六騎にて懸あがり戦はれけるを見て、殘る者ども船よりあがりければ、義貞打負て都をさして落にけり、定禪、義貞には目をかけずして、湊川に楠正成殘て大手の合戦最中のよし聞えしかば、下御所の御勢に馳加て責戦ほどに、申の終に正成并弟七郎左衛門尉イ以下一所に自害する輩五十余人、討死三百余人、惣じて濱の手以下兵庫湊川にて討死する頸の數七百余



正成義貞ヲ誅伐セテ奏聞ス

義貞徳足ヲズトノ説テハ武略ニ於テハ

人とぞ聞えし、是程の戦なれば、御方にも打死手負多かりけり、湊川の軍破れしかば、御陳は御下向の(時)の(兵庫の奥の御堂にて)ぞ有し、高尾張守の手の者討取し間、正成が頸持參せられける、實檢あり、まざるべきにあらず、哀なるかな、去春將軍、下御所御兩所、兵庫より九州へ御下向の由京都へ聞えて、寂慮快かりしかば、諸卿一同に、今は何事か有べきとて悦申されける時に、正成奏聞して云、義貞を誅伐せられて尊氏卿を召かへされて、君臣和睦候へかし、御使にをいては正成仕らむと申上たりければ、不思議の事を申たりとてさま／＼嘲哂ども有ける時、又申上候へけるは、君の先代を亡されしは併尊氏卿の忠功なり、義貞關東を落す事は子細なしといへども、天下の諸侍悉以彼將に屬す、其證據は、敗軍の武家には元より、在京の輩も扈從して遠行せしめ、君の勝軍をば捨奉る、爰を以義貞が徳のなき御事を、知しめざるべし、情事の心を案するに、兩將西國を打靡して、季月の中に責上り給ふべし、其時は更に禦戰術あるべからず、上に千慮有といへども、武略の道にをいてはいやしき正成が申條たがふべからず、只今思召あはすべしとて涙を流しければ、實に遠慮の勇士とぞ覺えし、此儀申達たれども、討手として尼ヶ崎に下向して逗留の間に、京都へ申て云、今度は君の戦必破るべし、人の心を以てその事を計

天下君ヲ背ク

正成ヲ討取ル新田殿討漏サル

に、去元弘の初、潛に勅命を受けて俄に金剛山の城に籠し時、私の計ひにもてなして、國中を頼て其功をなしたるとき、爰にしりぬ、皆心ざしを君に通奉しゆへなりと、今度は正成、和泉、河内、兩國の守護として勅命を蒙り、軍勢を催に、親類一族猶以難澁の色有如斯、況國人士民等にをいてをや、是則天下君を背ける事明らかし、然間正成存命無益也、最前に命を落すべきよし申切たり、最後の振舞符合しければ、誠に賢才武略の勇士ともかやうの者をや申べきとて、敵も御方もおしまぬ人ぞなかりけり、去程に翌日五月廿六日、兵庫を立て西宮に御陳をめされき、(下文二十七) (日條ニ收ム)

〔深堀系圖證文記録〕

(佐賀文書集所收)

△六、三、四二一

備中國福山、備前國三石、播磨國赤松凶徒等、十八日没落之上、昨日廿五日、於兵庫島、補判官正成被討取了、今者御入洛之條、不可有子細候歟、仍御教書執達候、又新田殿以下、昨日被討漏候人々、芥河河原村輩寄合、三十餘人生取之由、自細川殿(定頼)只今被進早馬候、御教書者早馬爲以前之間不載之、子細期拜面候、恐々謹言、

五月廿六日

太宰少貳(頼尙)

(註) 大日本史料曰、本文宛名ヲ逸シタレドモ、蓋シ又仁木義長ニ與ヘシモノナラン、ト、



〔和田文書〕二 △六、三、四一六

和泉國岸和田彌五郎治氏申軍忠次第

一 延元々々年五月廿五日、兵庫湊河合戰之時、楠木一族、神宮寺新判官正房、并八木彌太郎入道法達、相共抽合戰忠功者也。

一同六月十九日、同晦日、於竹田河原造路六條河原等、 合戰、馳參山門、同八月一日、大塔若宮自山門御 御共仕、於八幡山連日令祇候者也。

一同八月廿五日、於木幡山阿彌陀峯、抽軍忠者也。

一同九月一日、足利一族阿房次郎國清已下凶徒等、令蜂起當國之間、致合戰之處、逆徒等猛勢、而御方軍勢各雖退散仕、楯籠八木城、構要害之處、同七日國清已下逆類等、率大勢寄來之間、不惜身命、日夜致合戰之忠者也、爰自天王寺、中院右少將家、并楠木一族橋本九郎左衛門尉正茂已下、爲後縮被發向之刻、自城內打出、凶徒等令追罰者也、其後惡黨等楯籠高原城之間、即罷向追落畢、

一同十月四日、楯籠東條、今年正月一日、河州中川次郎兵衛入道父子被召捕之時、屬當御手、令發向彼住所畢、（延元二年三月日附）

〔廣峯文書〕（乾） △六、三、四一九

高越後殿（御奉）一見狀

兵庫濱合戰ニ於テ楠木彌四郎ヲ討取ル

播磨國廣峰社大別當又太郎入道昌俊（貞長申、去五月廿五日、攝州兵庫濱合戰之時、懸合御敵楠木彌四郎、（楠木政成甥、廣峰系圖ニ正氏ニ作ル）捨身命及散々打物之間、雖被切昌俊甲左右吹返、討取之、則令持參左馬頭殿御前、言上仕之處、被懸御目預御威、同廿六日被遂頸之御實檢、被記置之畢、次六月十九日、作道合戰以下、度々所致忠勤也、（作道ノ戰ハ、六月十九日ニ其條ア）凡昌俊自最前馳參于御方、雖及數箇度之軍忠、依事繁略之、然早賜御證判、彌欲成弓箭之勇、仍粗言上如件、（建武三年七月日附）

〔國史考〕（六月五日ノ條ニ收ム）

〔參考太平記〕（卷第六） 正成下、向兵庫、附遺誠正行事、

尊氏卿、直義朝臣、大勢ヲ率シテ上洛ノ間、要害ノ地ニ於テ、禦戰ハン爲ニ、兵庫ニ引退ヌル由、義貞朝臣早馬ヲ進ラセテ、内裏ニ奏聞アリケレハ、主上大ニ御騷有テ、楠判官正成ヲ召テ、急キ兵庫ヘ罷下、義貞ニ力ヲ戮テ、合戰ヲ致スヘシト、仰下サレケレハ、正成畏テ奏シケルハ、尊氏卿既ニ筑紫九國ノ勢ヲ率シ上洛候ナレハ、定テ勢ハ雲霞ノ如クニソ候ラン、御方ノ疲レタル小勢ヲ以テ、敵ノ機ニ乗タル大勢ニ懸合テ、尋常ノ如クニ合戰ヲ致候ハ、味方決定打負候ヌト覺候ナレハ、義貞朝臣（本文）

正成獻策

建武三年、延元元年

六一九



軍旅ノ事  
ハ兵ニ讓  
ラレヨ  
坊門清忠  
ノ意見

作<sup>新田殿</sup>、按、朝廷奏言之時、正成不<sup>レ</sup>當<sup>テ</sup>稱<sup>ニ</sup>義貞、曰<sup>新田殿</sup>、故依<sup>ニ</sup>與本<sup>ニ</sup>改<sup>レ</sup>之、下<sup>レ</sup>做<sup>レ</sup>之、  
 シ、正成モ河内へ罷下候テ、畿内ノ勢ヲ以テ、河尻ヲ差塞キ、兩方ヨリ京都ヲ攻テ、兵糧ヲツカラカシ候程ナラハ、敵ハ次第ニ疲テ落下、御方ハ日日ニ隨テ馳集候ヘシ、其時ニ當テ、義貞ハ山門ヨリ推寄ラレ、正成ハ搦手ニテ攻上候ハ、朝敵ヲ一戰ニ滅ス事有スト覺候、義貞モ定テ此了簡候トモ、路次ニテ一軍モセサランハ、無下ニ云甲斐ナク、人ノ思ハンスル處ヲ恥テ、兵庫ニ支ラレタリト覺候、合戰ハ屯テモ角テモ、始終ノ勝コソ簡要ニテ候ヘ、能々遠慮ヲ運サレテ、公議ヲ定ラルヘキニテ候ト申ケレハ、誠ニ軍旅ノ事ハ兵ニ讓ラレヨト、諸卿僉議有ケルニ、重テ坊門宰相清忠申サレケルハ、<sup>金勝院、西源院本云、諸卿僉議アリ</sup>正成カ申處モ、其謂有トイヘトモ、征罰ノ爲ニ差下サレタル節度使、イマタ戰ヲ成サル前ニ、帝都ヲ捨テ、一年ノ内ニ二度マテ山門へ臨幸ナラン事、且ハ帝位ノ輕キニ似、又ハ官軍ノ道ヲ失フ處ナリ、縱尊氏筑紫勢ヲ率シテ上洛ストモ、去年<sup>今川家、北條家、南部、天正本、作去春、非也、按、建武二年十二月、月、信氏發關東、三年正月入洛、由是見之、去年當作去春、</sup>東八個國ヲ從ヘテ、上シ時ノ勢ニハヨモ過シ、凡戰ノ始ヨリ、敵軍敗北ノ時ニ至迄、御方小勢ナリトイヘトモ、每度大敵ヲ攻靡ケスト云事ナシ、是全ク武略ノ勝タル所ニハ非ス、只聖運ノ天ニ叶ヘル故ナリ、然レハ只戰ヲ帝都ノ外ニ決シテ、敵ヲ斧鉞ノ

正成ノ決意

庭訓

下ニ滅サン事、何ノ仔細カ有ヘキナレハ、只時ヲ易ス、補罷下ルヘシトソ仰出サレケル、正成此上ハサノミ異議ヲ申ニ及ハストテ、五月十六日ニ都ヲ立テ、<sup>今川家、毛利家、北條家、</sup>南都、天正本云、正成サテハ討死セヨトノ勅定御サシナレトテ、其日總テ都ヲ立、云々、諸異本無<sup>三十六日</sup>字、而<sup>其日</sup>爲<sup>レ</sup>得、按、五月十六日、福山合戰、十八日、義助自<sup>三船坂</sup>還<sup>レ</sup>軍、時義貞待<sup>備前美作諸將</sup>、留<sup>賀古川</sup>者<sup>二</sup>日、而<sup>後</sup>至<sup>三</sup>兵庫、<sup>奏其狀、帝因命正成、往授之、云々、由是見之、正成發、京者、蓋二十四日也、非二十六日也、且此下云、正成至三兵庫、與義貞夜飲盡、翌二十五日、尊氏抵三兵庫、云々、然則正成二十四日至三兵庫者明矣、</sup>五百餘騎ニテ兵庫ヘソ下リケル、

○島津家、西源院本云、正成此上ハ異議ヲ申スニ及ハス、サテハ大敵ヲ隨ヘ、勝軍ヲ全フセントノ智謀叡慮ニテハナク、只貳心ナキノ戰士ヲ、大軍ニ當ラレント計ノ仰ナレハ、討死セヨトノ勅定コサンナレ、義ヲ重シ、身ヲ顧ミヌハ、忠臣勇士ノ所存ナリトテ、其日兵庫ニ下リケル、云々、

正成是ヲ最期ノ合戰ト思ケレハ、嫡子正行カ、今年十一歳ニテ供シタリケルヲ、思フ様有トテ、櫻井宿ヨリ河内へ還シ遣ストテ、庭訓ヲ殘ケルハ、獅子子ヲ生テ、三日ヲ經ル時、數千丈ノ石壁ヨリ是ヲ投、其子獅子ノ機分アレハ、教サルニ中ヨリ跳返テ、死スル事ヲ得スト云ヘリ、況ヤ汝既ニ十歳ニ餘リヌ、一言耳ニトトマラハ、我教誠ニ違フコトナカレ、今度ノ合戰、天下ノ安否ト思フ間、今生ニテ汝カ顔ヲ見ン事、是ヲ限ト思フナリ、正成既ニ討死スト聞ナハ、天下ハ必將軍ノ代ニ成ヌト心得ヘ

建武三年、延元元年



義貞正成  
對面ス

シ、然リトイヘトモ、一旦ノ身命ヲ助ランカ爲ニ、多年ノ忠烈ヲ失ヒテ、降人ニ出ル  
 コト有ヘカラス、一族若黨ノ一人モ死殘テ在ン程ハ、金剛山ノ邊ニ引籠テ、敵寄來  
 ラハ命ヲ養由カ矢サキニ懸テ、義ヲ紀信カ忠ニ比スヘシ、是ソ汝カ第一ノ孝行ナ  
 ランスルト、泣々申含テ、天正本云、正成主上ヨリ賜タリケル菊作ノ各東西ニ分レニケリ、昔ノ  
 百里奚ハ、穆公晉ノ國ヲ伐シ時、戰ノ利無ラン事ヲ鑒テ、其將孟明視ニ向テ、今ヲ限  
 ノ別ヲ悲、今ノ楠判官ハ、敵軍都ノ西ニ近附ヌト聞シヨリ、國必滅ン事ヲ愁テ、其子  
 正行ヲ留テ、ナキ跡マテノ義ヲ勸ム、彼ハ異國ノ良弼、是ハ吾朝ノ忠臣、時千載ヲ隔  
 ツトイヘトモ、前聖後聖一揆ニシテ、有カタカリシ賢佐ナリ、正成兵庫ニ著ケレハ、  
 新田左中將頼テ對面シ給ヒテ、叡慮ノ趣ヲ尋問レケル、正成畏テ所存ノ通ト、勅  
 定ノ様トヲ、委シク語申ケレハ、誠ニ敗軍ノ小勢ヲ以テ、機ヲ得タル大敵ニ戰ハン  
 事、叶フヘキニテハ無レトモ、去年關東ノ合戰ニ打負上洛セシ時、路ニテ猶支サリ  
 シ事、人口ノ嘲遁ル、所ヲ得ス、其コソアラメ、今度西國ヘ下サレテ、數箇所ノ城郭、  
 一モ落シ得スシテ、結句敵ノ大勢ナルヲ聞テ、一支モセス、京都マテ遠引シタラン  
 ハ、餘ニ云甲斐ナク存ル間、戰ノ勝負ヲハ見スシテ、只一戰ニ義ヲ勸メハヤト、存ル  
 計ナリト宜ヒケレハ、正成重テ申ケルハ、衆愚ノ謂々ハ、一賢ノ唯唯ニハ如スト申

義貞ノ武  
功

賊兵船來  
ル

候ヘハ、道ヲ知ラサル人ノ譏ヲハ、必シモ御心ニ懸ラルマシキニテ候、只戰フヘキ  
 處ヲ見テ進ミ、叶フマシキ時ヲ知テ退クヲコソ、良將トハ申候ナレ、サテコソ暴虎  
 憑河、死而無悔者、吾不與也ト、孔子モ子路ヲ誡ラレシ事ノ候、其上元弘ノ初ニハ、平  
 太守ノ威猛ヲ一時ニ碎カレ、今歲ノ春ハ、尊氏ノ逆徒ヲ九州ヘ却ケラレ候シ事、聖  
 運トハ申ナカラ、偏ニ御計略ノ武德ニ依シ事ニテ候ヘハ、合戰ノ方ニ於テハ、唯カ  
 サミシ申候ヘキ、殊更今度西國ヨリ御上洛ノ事、御沙汰ノ次第、一々ニ道ニ當テコ  
 ソ存候ヘト申ケレハ、義貞朝臣誠ニ顔色解テ、北條家、西源院、南都本云、サテハ義貞カ武功モ、慮外  
 云々、通夜ノ物語ニ、數盃ノ興ヲソ添ラレケル、後ニ思合スレハ、是ヲ正成カ最期ナリ  
 ケリト、哀ナリシ事トモナリ、

兵庫海陸寄手事

去程ニ明レハ五月二十五日辰刻ニ、澳ノ霞ノ晴間ヨリ、幽ニ見ヘタル船アリ、イサ  
 リニ歸ル蟹人カ、淡路ノ瀬戸ヲ渡ル船カト、海邊ノ眺望ヲ詠テ、潮路遙ニ見渡セハ、  
 取楫面楫ニカイ楯カイテ、艦舳ニ旗ヲ立タル數萬ノ兵船、順風ニ帆ヲソ舉タリケ  
 ル、烟波渺々タル海ノ面、十四五里カ程ニ漕連テ、舷ヲ輾ク艦舳ヲ雙タレハ、海上俄  
 ニ陸地ニ成テ、帆影ニ見ユル山モナシ、アナ夥シ、吳魏天下ヲ爭ヒシ赤壁ノ戰、大元

建武三年、延元元年



賊陸軍來

官軍手分  
脇屋義助  
經島三陣  
大館氏明  
南濱  
正成淡河  
義貞和田  
岬ニ控フ

新田義貞公篇

宋朝ヲ滅セシ黄河ノ兵モ、是ニハ過シト、目ヲ驚カシテ見ル處ニ、又須磨ノ上野ト、  
鹿松岡北條家、南都本、作鹿島鴨越ノ方ヨリ、二引兩、四目結、直達、左巴、倚カ、リノ輪違ノ  
旗、五六百流差連テ、雲霞ノ如ク寄懸タリ、海上ノ兵船、陸地ノ大勢、思ヒシヨリモ夥  
シクシテ、聞シニモ猶過タレハ、官軍味方ヲ顧テ、退屈シテソ覺ヘケル、サレトモ義  
貞朝臣モ正成モ、大敵ヲ見テハ欺キ、小敵ヲ見テハ侮ラサル、世祖光武ノ心根ヲ、ウ  
ツシテ得タル勇者ナレハ、少モ機ヲ失ヒタル氣色無シテ、先和田御崎ノ小松原ニ  
打出テ、靜ニ手分ヲソシ給ヒケル、一方ニハ、脇屋右衛門佐義助ヲ大將トシテ、末々  
ノ一族二十三三人、其勢五千餘騎、經島ニソ控ヘタル、一方ニハ、大館左馬助氏明ヲ大  
將トシテ、相從一族十六人、其勢三千餘騎ニテ、燈爐堂ノ南ノ濱ニ控ヘラル、一方ニ  
ハ、楠判官正成、態他ノ勢ヲ交ヘスシテ七百餘騎、淡河ノ西宿ニ控ヘテ、陸路ノ敵ニ  
相向フ、左中將義貞ハ、總大將ニテオハスレハ、諸將ノ命ヲ司テ、其勢二萬五千餘騎  
西源院本作二萬騎和田御崎ニ帷幕ヲ引セテ控ヘラル、去程ニ海上ノ船共、帆ヲ下シテ磯近  
ク漕寄スレハ、陸路ノ勢モ旗ヲ進メテ、相近ニソ成ニケル、兩陣互ニ攻寄テ、先澳ノ  
船ヨリ大鼓ヲ鳴シ、圍ヲ揚レハ、陸路ノ搦手五十萬騎、按、搦手兵、與前編同請取テ聲ヲソ合  
ケル、其聲三度終レハ、官軍又五萬餘騎、五萬、今川家、毛利家、北條家、南都本、作三萬五千楯ノ端ヲ鳴シ、胡篳ヲ敲

テ聞ヲ作ル、敵御方ノ圍、南ハ淡路繪島崎、鳴戸澳、西ハ播磨路須磨浦、東ハ攝津國生  
田森、四方三百餘里ニ三百、毛利家、本作三十一響渡テ、誠ニ天維モ斷テ落、坤軸モ傾ク計ナリ、

本間孫四郎遠矢事

本間重氏

新田、足利相挑テ、イマタ戰ハサル處ニ、本間孫四郎重氏、今川家、毛利家、北條家、南都、天正本及  
本間家譜、作資氏、下倣之、按、本文第  
十七卷、又作資氏、前後編同黃瓦毛ナル馬ノ太ク逞シキニ、紅下濃ノ鎧著テ、只一騎、和田御崎ノ波  
打際ニ馬打寄セテ、是下本間之言、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、出射、鳥下、次序不、同、可合見澳ナル船ニ向テ、大音聲ヲ揚テ  
申ケルハ、將軍筑紫ヨリ御上洛候ヘハ、定テ頼、尾道ノ傾城共、多ク召具セラレ候ラ  
ン、其爲ニ珍シキ御着、一ツ、推テ進ラセ候ハン、暫ク御待候ヘト云儘ニ、上差ノ流鏑  
矢ヲ拔テ、羽ノ少廣カリケルヲ、鞍ノ前輪ニ當テカキ直シ、二所藤ノ弓ノ、握太ナル  
ニ取添、小松陰ニ馬ヲ打寄テ、浪ノ上ナル鶴トコノ、己カ影ニテ魚ヲ驚シ、飛サカル程ヲ  
ソ待タリケル、敵ハ是ヲ見テ、射ハツシタランハ、希代ノ笑カナト目ヲ放タス、御方  
ハ是ヲ見テ、射中タランハ、時ニ取テノ名譽カナト、機ヲ詰テソ守ケル、遙ニ高く飛  
舉リタル鶴、浪ノ上ニ落サカリテ、二尺許ナル魚ヲ、二尺、金勝院、本作三尺主人ノヒレヲ颯テ、澳  
ノ方ヘ飛行ケル處ヲ、本間、小松原ノ中ヨリ馬ヲ懸出シ、追様ニ成テカケ鳥ニソ射  
タリケル、

建武三年、延元元年



○北條家、西源院、南都本云、本間ハ、一騎和田御崎ノ波打キワニ打出ケル處ニ、鷲  
 一波ノ上ニ落下テ、二尺許ナル魚ヲ颯テ、澳ノ方ヘ飛行ケルヲ、本間暫ク思ヒケ  
 ルハ、此大軍ノ中ニテ、此鳥ヲ射テ人ニ見セハヤト思ヒテ、上差ノ流鏑ヲ拔出シ、  
 二所藤ノ弓ニ、取テ番ヒケル處ニ、此鳥漸ク遠サカリ、浪ノ上六七段西源院本ノヒ  
 スラント見ル程ニ、馬ノ鎧ヲ浪越計ニカケヒタシテ、追サマニ懸鳥ニソ射タリ  
 ケル下同ニ

態生ナカラ射テ落サント、片羽カヒヲ射切テ、直中ヲハ射サリケル間、鏑ハ鳴響テ、  
 大内介カ舟ノ櫓ニ立、橋、金勝院ミサコハ魚ヲ颯ナカラ西源院本云、將軍ノ船ノ右大友カ  
天正本作ニ舟ノ屋形ノ上ヘソ落タリケル、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本云、本間鶴ヲ射落シテ、大  
尊氏一爲御看抽テ進、音ニ呼ハリケルハ、將軍額尾路ノ傾城、召具セラレ候ラン、其  
ラセ候、云々、射手誰トハ知ネトモ、敵ノ船七千餘艘ニハ、舷ヲ蹈テ立並、御方ノ官軍五  
 萬餘騎ハ、汀ニ馬ヲ控ヘテ、嗚呼射タリ射タリト感スル聲、天地ヲ響シテ靜リ得ス、  
 將軍是ヲ見給ヒテ、敵我弓聲ノ程ヲ見セント、此鳥ヲ射ツルカ、此方ノ船ノ中ヘ鳥  
 ノ落タルハ、御方ノ吉事ト覺ルナリ、何様射手ノ名字ヲ聞ハヤト仰ラレケレハ、小  
 早河七郎、舟ノ舳ニ立出テ、類少ク見所有テモ、遊サレツル者カナ、サテモ御名字ヲ  
 ハ何ト申候ヤラン、承候ハヤト問タリケレハ、本間弓杖ニスカリテ、其身人數ナラ

ヌ者ニテ候ヘハ、名乗申トモ誰カ御存知候ヘキ、但弓箭ヲ取テハ、坂東八箇國ノ兵  
 ノ中ニハ、名ヲ知タル者モ御座候ラン、此矢ニテ名字ヲハ御覽候ヘト云テ、三人張  
 ニ毛利家、金勝院、西十五束三伏、ユラユラト引渡シ、二引兩旗立タル船ヲ指テ、遠矢ニ  
源院本、作五人張、ソ射タリケル、其矢六町餘ヲ越テ、六町、北條家、南都本、作三四將軍ノ船ニ雙タル、佐々木筑  
五町、西源院本作三五六町、前守カ船ヲ、篋中過通り、屋形ニ乗タル兵ノ、鎧ノ草摺ニ裏ヲカ、セテソ立タリケ  
 ル、將軍此矢ヲ取ヨセ見給フニ、相模國住人、本間孫四郎重氏ト、小刀ノサキニテ、書  
 タリケル、諸人此矢ヲ取傳ヘ見テ、アナ懼シ如何ナル不運ノ者カ、此矢サキニ廻テ  
 死ナンスラント、兼テ心ヲ冷シケル、本間孫四郎、扇ヲ舉テ澳ノ方ヲサシ招テ、合  
 戰ノ最中ニテ候ヘハ、矢一モ惜ク存候、其矢此方ヘ射返シテタヒ候ヘトソ申ケル、  
 將軍是ヲ聞給テ、御方ニ誰カ此矢射返シツヘキ者有ト、北條家、南都本云、將軍此矢射返シ候ヘ  
セス、師直畏テ、申ケルハ、ト、仰ラレケレハ、皆カタツツ吞テ音モ高武藏守ニ尋給ヒケレハ、

○西源院本云、尊氏御方ニ誰カ此矢射返スヘキ者ヤアル、東頭四十餘頭、九國三  
 十餘頭、其外中國、四國、北國ノ輩、大略殘少クソ相隨ラメ、此内ニ此矢射ル程ノ  
 者ナトカ無ルヘキ、射返シ候ヘト仰ラレケレハ、皆カタ津ヲ吞テ音モセス、師直  
 畏テ申ケルハ、云々、下同ニ



師直畏テ、本間カ射テ、候ハンスル遠矢ヲ、同シ所ニ射返候ハンスル者、坂東勢ノ中ニハ、有ヘシトモ存候ハス、誠ニテ候ヤラン、佐々木筑前守顯信コソ、顯信、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、作信胤、下微之、按、佐々木家譜云、顯信、左衛門丞顯綱子也、信胤、長胤子也、未知孰是、西國一ノ精兵ニテ候ナレ、彼ヲ召レテ、仰付ラレ候ヘカシト申ケレハ、實モトテ佐々木ヲソ呼レケル、顯信召ニ從テ、將軍ノ御前ニ參タリ、將軍本間カ矢ヲ取出シテ、此矢本ノ矢所ヘ、射返サレ候ヘト仰ラレケレハ、顯信畏テ叶難キ由ヲソ、再三辭シ申ケル、將軍強テ仰ラレケル間、辭スルニ處ナクシテ、己カ舟ニ立歸、火威ノ鎧ニ、鍬形打タル兜ノ緒ヲシメ、銀ノツク打タル弓ノ反高ナルヲ、櫓ニ當テキリキリト推張、船ノ舳サキニ立顯レテ、弓弦クヒシメシタル有様、誠ニ射ツヘクソ見ヘタリケル、懸ル處ニ、如何ナル推參ノ馬鹿者ニテカ有ケン、西源院本云、小船ヲ、佐々木カ舟ノ真前ニ漕出シテ、讚岐勢ノ中ヨリ申候、此矢一ツ受テ、云々、讚岐勢ノ中ヨリ、此矢一受テ弓勢ノ程御覽セヨト、高ラカニ呼ハル聲シテ、鎧ヲソ一射タリケル、西源院本云、佐々木モ暫弓ヲヒカス、是ヲ見ル、云々、胸板ニ弦ヲヤ打タリケン、元來小兵ニヤ有ケン、其矢二町迄モ射附ス、波ノ上ニソ落タリケル、本間カ、後ニ控タル軍兵五萬餘騎、五萬、毛利家本作五千、北條家、西源院本作三萬、金勝院本作五百、同音ニ嗚呼射タリヤト欺テ、暫シ笑モ止サリケリ、此後ハ中々射テモヨシナシトテ、佐佐木ハ遠矢ヲ止テケリ、

經島合戰事

遠矢射損シテ、敵御方ニ笑レ憎マレケル者、恥ヲス、カントヤ思ヒケン、船一艘ニ二百餘人取乗テ、二百、金勝院本作三百、下微之、經島ヘ差寄セ、同時ニ磯ヘ飛下テ、敵ノ中ヘソ打テ懸リケル、脇屋右衛門佐ノ兵トモ、五百餘騎ニテ中ニ是ヲ取籠、弓手馬手ニ相附テ、繩手ヲ廻シテソ射タリケル、二百餘騎ノ者トモ、心ハ猛シトイヘトモ、射手モ少ク徒立ナレハ、馬武者ニ懸惱サレテ、遂ニ一人モ殘ラス討レニケレハ、乗捨ル船ハ徒ニ、岸打浪ニ漂ヘリ、細川卿律師是ヲ見給ヒテ、續ク者ノ無リツル故ニコソ、若干ノ御方ヲハ、故ナク討セツレ、イツヲ期スヘキ合戰ソヤ、下場ノヨカランスル所ヘ船ヲ著テ、馬ヲ追下追下、打テ上レト下知セラル、四國ノ兵共、大船七百餘艘、紺邊濱ヨリ上ラントテ、磯ニ傍テソ上リケル、兵庫島三箇所ニ控タル官軍五萬餘騎、五萬、金勝院本作五百、恐非也、船ノ敵ヲアケ立シト、漕行船ニ隨テ、汀ヲ東ヘ打ケル間、船路ノ勢ハ、自進テ懸ル勢ニミヘ、陸ノ官軍ハ、偏ニ逃テ引様ニソ見ヘタリケル、海ト陸トノ兩陣、互ニ相窺フテ、遙ノ汀ニ著テ上リケレハ、新田左中將ト、楠ト其間遠ク隔テ、兵庫島ノ船著ニハ、支タル勢モナカリケル、是ニ依テ九國中國ノ兵船六十餘艘、六十、毛利家、金勝院、西源院、天正本、作二千、和田御崎ニ漕寄テ、同時ニ陸ヘソアカリケル、



正成兄弟死節事

楠木軍包 楠判官正成、舍弟帶刀正季ニ帶刀、今川家、毛利家、北條家、南都、天正本、作七郎、金勝院、西源院本、正季作正氏、向テ申ケルハ、敵前後ヲ遮リテ、御方ハ陣ヲ隔タリ、今ハ遁ヌ處ト覺ユルソ、イサヤ先前ナル敵ヲ一散シ追捲テ、後ナル敵ニ戰ハント申ケレハ、正季然ヘク覺候ト同シテ、七百餘騎ヲ前後ニ立テ、大勢ノ中ヘ懸入ケル、左馬頭ノ兵トモ、菊水ノ旗ヲ見テ、ヨキ敵ナリト思ヒケレハ、取籠テ是ヲ討ントシケレトモ、正成正季、東ヨリ西ヘ破テ通り、北ヨリ南ヘ追靡ケ、ヨキ敵ト見ルヲハ、馳雙テ組テ落テハ首ヲ取、合ヌ敵ト思フヲハ、一太刀打テ懸散ス、正成ト正季ト、七度合テ七度分ル、其心偏ニ左馬頭ニ近附、組テ討ント思フニアリ、遂ニ左馬頭ノ五十萬騎、楠カ七百餘騎ニ懸靡ケラレテ、又須磨ノ上野ノ方ヘソ引返シケル、直義朝臣ノ乗ラレタリケル馬、鐵ヲ蹄ニ踏立テ、右ノ足ヲ引ケル間、西源院本云、直義馬ノ蹄ヲ射サセテ、右ノ前足ヲ引、云々、楠カ勢ニ追ツメラレテ、既ニ討レ給ヒヌト見ヘケル處ニ、藥師寺十郎次郎金勝院本作藥師寺次郎左衛門少尉公義、只一騎蓮池ノ堤ニテ、返シ合セテ馬ヨリ飛テヲリ、二尺五寸ノ小長刀ノ鐵ヲ取延テ、懸ル敵ノ馬ノ平頸、引廻、切テハハネ倒ハネ倒、七八騎カ程斬テ落シケル、其間ニ直義ハ馬ヲ騎替テ、遙々落延給ヒケリ、左馬頭楠ニ追立ラレテ引退ヲ、將軍見給ヒテ、新手ヲ入替テ直義討スナト、下知セラ

楠木軍包

正成奮戰

直義軍、須磨ノ上野ニ退ク

岩松 岩松

期正成ノ最

七生マデ人間ニ生ラレテ朝敵ヲ滅サン

レケレハ、吉良、石堂、高、上杉ノ北條家、南都本、無石堂、天正本吉良石堂、共不出、上杉、金勝院本作高山、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、載高山、北條家、南都、西源院本、載、澁川、小俣、今川、一色、岩松、仁木、大友、厚東、大内、介、土岐、赤松、千葉、小山、佐竹、西源院本又載、小田、不載、高、上杉、人々六千餘騎ニテ、西源院本云、澁川以下、各手勢引勝リ、七千餘騎、云々、湊河ノ東ヘ懸出テ、跡ヲ切ントソ取卷ケル、正成、正季、又取テ返テ此勢ニカ、リ、打違テ死シ、懸入テハ組テ落、三時カ間ニ十六度迄闘ケルニ、其勢次第次第ニ滅ヒテ、後ハ纔ニ七十三騎ニソ成ニケル、三、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、作、餘、下、餘、之、此勢ニテモ、打破リテ落ハ落ヘカリケルヲ、楠京ヲ出シヨリ、世ノ中ノ事、今ハ是迄ト思フ所存有ケレハ、一足モ引ス戰テ、機既ニ疲レケレハ、湊河ノ北ニ當テ、在家ノ一村有ケル中ヘ走入テ、腹ヲ切ン爲ニ、鎧ヲ脱テ我身ヲ見ルニ、切創北條家、金勝院、西源院、南都本云、切創矢創、云々、十一箇所マテソ負タリケル、此外七十二人ノ二、北條家、西源院、南都本、作、餘、者トモモ、皆五箇所三箇所ノ三、北條家、西源院、南都本、作、餘、手ノ者六十餘人、六十、北條家、西源院本、及本文、此下作三十一、可、合見、六間ノ客殿ニ二行ニ並居テ、念佛十遍許同音ニ唱テ、一度ニ腹ヲソ切タリケル、正成座上ニ居ツ、舍弟ノ正季ニ向テ、抑最期ノ一念ニ依テ、善惡ノ生ヲ引ト云ヘリ、九界ノ間ニ、何カ御邊ノ願ナルト問ケレハ、正季カラカラト打笑テ、七生マテ只同人間ニ生レテ、朝敵ヲ滅サハヤトコソ存候ヘト申ケレハ、正成ヨニ嬉シケナル氣色ニテ、罪業深キ惡念ナレトモ、我モ個様ニ思フナリ、イサ

建武三年、延元元年



菊池武吉

、ラハ同ク生ヲ替テ、此本懷ヲ達セント契テ、兄弟トモニ刺違テ、同枕ニ伏ニケリ、橋本八郎正員今川家、毛利家、本作正員、宇佐美河内守正安、神宮寺太郎兵衛正師、和田五郎正隆ヲ始トシテ、宗徒ノ一族十六人、相從兵五十餘人上云、一族十三人、兵六十餘人、今作十六人、及五十餘人、相繼、思々ニ並居テ、一度ニ腹ヲソ切タリケル、橋本以下至此、金勝院、西源院本不出、菊池七郎武朝ハ、當作武吉、按武朝武至弘和年中、猶存、與正成、同死者武吉也、及系圖作武、使ニテ、須磨口ノ合戰ノ非武朝、出菊池武朝申狀、及菊池家譜、兄ノ肥前守カ今川家本、及系圖作武、使ニテ、須磨口ノ合戰ノ肥後守、下微之、體ヲ見ニ來リケルカ、正成カ腹ヲ切處ヘ行合テ、オメオメシク見捨テハ、イカ、歸ルヘキト思ヒケルニヤ、西源院本云、武朝下人ヲ急キ歸テ、此様ヲ兄ニ告ヨトテ、火ヲ取テ、其家ニサシツケテ、云々、同自害ヲシテ、焰ノ中ニ伏ニケリ、

止成評

○今川家、毛利家、北條家、南都本竝云、武朝、正成カ腹切處ヘ行合テ、如何ニト申セハ、正成コソ只今最期ニテ候ヘト、肥前殿ニハ申サセ給ヘト云ケレハ、此家ニ生レタル者、此際ヲ見捨テ人ニ告ルナント、サル未練ノ儀ヲハ存セサルモノヲ、爰ヲイカテ歸ルヘキトテ、諸共ニ腹切テ同枕ニ伏、云々、抑元弘以來、忝クモ此君ニ憑レ進ラセテ、忠ヲ致シ功ニ誇ル者幾千萬ソヤ、然レトモ、此亂又出來テ後、仁ヲ知ラヌ者ハ、朝恩ヲ棄テ敵ニ屬シ、勇ナキ者ハ、苟モ死ヲ免レントテ刑戮ニ逢、智ナキ者ハ、時ノ變ヲ辨ヘスシテ、道ニ違フ事ノミ有シニ、智仁

勇ノ三徳ヲ兼テ、死ヲ善道ニ守ルハ、古ヨリ今ニ至ルマテ、正成程ノ者ハイマタ無リツルニ、兄弟トモニ自害シケルコソ、聖主再國ヲ失テ、逆臣横ニ威ヲ振フヘキ、其前表ノ驗ナレ、

湊河合戰事

楠既ニ討レニケレハ、北條家、西源院、南都本云、楠討レテ官軍力ヲ失フ由、新田早馬ヲ立テ、註進シケレハ、京都ノ仰天斜ナラス、然トモ、新田カ相支ル事ヲ、頼思召ケリ、云々、將軍ト、左馬頭ト一處ニ合テ、新田左中將ニ打テ懸リ給フ、義貞西源院本載義貞助、是ヲ見テ、西宮毛利家、西源院、南都、天正本、作三船部濱、家、西源院、南都、天正本、作三船部濱、ヨリアカル敵ハ、旗ノ紋ヲ見ルニ、末々ノ朝敵トモナリ、西源院、天正本、云、西國中國ノ者ト見、云々、湊河ヨリ懸ル勢ハ、尊氏直義ト覺ル、是コソ願所ノ敵ナレトテ、西宮毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、作三船部濱、ヨリ取テ返シ、生田森ヲ後ニ當テ、四萬餘騎ヲ三手ニ分テ、敵ヲ三方ニソ受ラレケル、去程ニ兩陣互ニ勢ヲ振テ、鬨ヲ作り聲ヲ合ス、先一番ニ大館左馬助氏明、江田兵部大輔行義三千餘騎ニテ、仁木細川カ北條家、西源院、南都、載斯波澄川、六萬餘騎ニ懸合テ、火ヲ散シテ相戰フ、其勢互ニ討レテ、兩方ヘ颯ト引ノケハ、二番ニ中院中將定平、大江田里見、鳥山五千餘騎ニテ、五千、毛利家本作三、二千、天正本作二千、高上杉カ北條家、西源院、南都、載三佐々木赤松、八萬騎ニ今川家、毛利家、北條家、南都、天正本、作三萬餘騎、懸合テ、半時許黒烟ヲ立テ揉合タリ、其勢共ニ戰疲テ、兩方ヘ颯ト引退ケハ、三番ニ脇屋右衛門佐、宇都宮治部大輔、菊池次郎金勝院本有、左衛門尉字、次郎、今

義貞生田  
森後ニ  
當テ足利  
ノ全軍ト  
戰フ

建武三年、延元元年







マロヒニケリ、其勢ニ僻易シテ、近ツク者ナシ、只十方ヨリ、矢フスマヲ作テ遠矢ニ射ル、義貞薄金ト云、累代ノ鎧ヲ著、鬼切ト云、相傳ノ太刀ヲ拔テ、鎧ヅキヲスキ間モナクユリ合セ、或ハ立矢ヲ射向ニ受留メ、或ハ來ル矢ヲ鬼切ニテ、拂切ニ切落サレケレハ、身ニハ恙モナカリケリ、云々、

小山田高家ノ忠死

小山田太郎高家金勝院本作岡部遠江守乘澄別出子下、遙ノ山ノ上ヨリ是ヲ見テ、諸鎧ヲ合馳參、己カ馬ニ義貞ヲ乘奉リテ、我身ハ徒立ニ成テ、追懸ル敵ヲ禦ケルカ、敵數多ニ取籠ラレテ、遂ニ討レニケリ、其間ニ義貞朝臣、御方ノ勢ノ中ヘ馳入テ、虎口ニ害ヲ遁給フ、今川家

岡部乘澄

○金勝院本云、義貞ニ敵尙近附ケルヲ、武藏國住人、岡部六彌太忠澄カ末孫、岡部遠江守乘澄、長刀ヲ打揮テ、馬ヨリ飛テ下、己カ馬ニ義貞ヲ乘テ、我身ハ徒立ニナリ、敵アマタ討取テ、遂ニ討死ス、云々、

小山田太郎高家刈青麥事此段、今川家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、不出。

高家忠死ノ因

抑官軍ノ中ニ、義ヲ知リ命ヲ輕スル者多シトイヘトモ、事ノ急ナルニ臨テ、大將ノ命ニ代ラントスル兵無リケルニ、遙ニ隔リタル、小山田一人馬ヲ引返シテ、義貞ヲ乘奉リ、利我身跡ニ下リテ、討死シケル、其志ヲ尊レハ、僅ノ情ニ憑テ、百年ノ身ヲ捨ケルナリ、去年毛利家、本有三月初字、按、去年當レ作今年、建武三年三月、義貞向ニ播磨、義貞西國ノ討手ヲ承テ、播磨ニ下著シ給フ時、兵多シテ糧乏、若軍ニ法ヲ置スハ、諸卒ノ狼藉絶ヘカラストテ、一粒ヲモ刈採、民屋ノ一ヲモ追捕シタランスル者ヲハ、速ニ是ヲ誅セラルヘキ由ヲ、大札ニ書テ、道ノ辻々ニソ立ラレケル、是ニ依テ農民耕作ヲ棄ス、商人賣買ヲ快シケル處ニ、此高家敵陣ノ近隣ニ往テ、青麥ヲ刈テ、乘鞍ニ負セテソ歸ケル、時ノ侍所長濱六郎左衛門尉是ヲ見テ、直ニ高家ヲ召寄、力ナク法ノ下ナレハ、是ヲ誅セントス、義貞是ヲ聞給ヒテ、推量スルニ、此者青麥ニ身ヲ替ント思ハンヤ、此所敵陣ナレハト思誤ケルカ、然スハ兵糧ニ術盡テ、法ノ重ヲ忘レタルカノ間ナリ、何様彼役所ヲ見ヨトテ、使者ヲ遣ハシテ、點檢セラレケレハ、馬物具爽ニ在テ、食物ノ類ハ一粒モ無リケリ、使者歸テ、此由ヲ申ケレハ、義貞大キニ恥タル氣色ニテ、高家カ法ヲ犯ス事ハ、戰ノ爲ニ罪ヲ忘タルヘシ、何様士卒先シテ疲タルハ、大將ノ恥ナリ、勇士ヲハ失フヘカラス、法ヲハ濫事ナカレトテ、田ノ主ニハ小袖二重毛利家本作二重、與ヘテ、高家ニハ兵糧

義貞軍ノ制規

義貞ノ温情

高家義貞ノ情ニ感

十石相副テ、色代シテソ歸サレケル、高家此情ヲ感シテ、忠義彌心ニ染ケレハ、此時大將ノ命ニ代リ、忽ニ討死ヲハシタルナリ、昔ヨリ今ニ至ル迄、流石ニ侍タル程ノ者ハ、利ヲモ思ハス、威ニモ恐レズ、只其大將ニ依テ身ヲ捨、命ニ代ル者ナリ、今武將



タル人は是ヲ慎テ、是ヲ思ハサランヤ、

〔保曆間記〕

第五（前文、二月十二日條ニ收ム）官軍の勢、城々をかため有しかども、尊氏直義猛威を

ふるひ、數十萬騎にてのぼりけるに、恐れてみな京都をさしてにげのぼりしかば、義貞も兵庫にして、海陸の敵をふせがんとかへりのぼる。此むねはや馬をたてて上聞に達せしかば、御騒動有補正成は攝津國に下て、義貞に力を合さ、へ防べしと勅定有しを、正成信忠を存、よくはかりごとを申あげしかども、もちいさせ給はざれば發向せしめ、たびくしの戦をしつくし、終に正成、正すへ其外八十餘人はらを切てぞうせにける。主上智の明らかになきゆへ、正成がいさめをもちいさせたまはで、智仁勇かつそなはりし正成をむなしくさせ給ふとて、おしまぬものもなく、又そしり奉らぬかたもなかりけり（下文十月十日條ニ收ム）

五月二十五日<sup>(2)</sup> 朝廷、神護寺衆徒ニ丹波路ヲ警固セシメ、明日、鞍馬寺衆徒ニ若狹路ヲ防禦セシム。

〔神護寺文書〕

三山城 △六、三、四〇八、

尊氏以下凶徒、自丹波路可襲來之由有其聞、赤坂越（山城葛野郡）警固事、嚴密可致其沙汰者、天氣如此、悉之以狀（五月廿五日附、右少辨奉、神護寺衆徒宛）

正成ノ獻  
正成戰死  
正成評

〔鞍馬寺文書〕

山城 △六、三、四〇九、

自若狹路凶徒等可襲來之由有其聞、鞍馬寺々僧等可致防禦沙汰之由、可被相觸者、天氣如此、悉之以狀（五月廿六日附、左中將中院具光奉、中瑞瑞房法印宛）

五月二十七日 天皇、叡山ニ行幸シ給フ。義貞等、之ヲ護衛シ奉ル。

〔神皇正統記〕（後醍醐天皇、前文ハ三月十日ノ條ニ收ム）尊氏等西國の凶徒をあいかたらひて、かさねてせめのぼる、官軍利なくして都に歸參せし程に、同廿七日に又山門に臨幸し給ふ、八月にいたるまで度々合戦有しかど官軍いとすゝまず、

〔梅松論〕

（前文二十五日條ニ收ム） 湊川にて正成を討て、大勢にて都へ責のぼるよし聞えければ、廿七日、去正月の夕のごとく又山門へ臨幸なる、（下文二十九日條ニ收ム）

〔圓太曆〕

（十五、親應元年十二月十日ノ條） 建武三年五月廿七日、東國襲來之時、禁裏行幸山門、被用

鳳籠、自吉田邊、被召改腰輿候歟、

〔公卿補任〕

（十三） 建武三年五月、東軍自西國戰發、同廿七日、重行幸坂本、

〔大乘院日記目錄〕 五月廿七日、又山門行幸、

〔田所文書〕

（丹波） △六、三、三七七、

抽軍忠條神妙之由、被仰下之狀如件、（花押）

建武三年、延元元年



二十七日  
御登山  
六月七日  
水尾警固  
西尾合戦

新田義貞公篇

六四〇

丹波國社本大輔房辨海、去月丹州御下向之時、馳參付御著到、同廿七日御登山之間、同廿八日馳參、今月五六兩日於西坂本致軍忠、自同七日可令警固水尾一木戸之由、被仰下之間、令勤仕之處、夜縮之時、西尾仁難義子細在之、可罷向之由、被仰下之間、俄夜半遷西尾、致夜縮候畢、同九日同十一日、當尾合戰盡畢、此等次第軍兵御奉行御存知之上者、賜御感令旨、爲備向後龜鏡、言上如件、

延元々年六月日

此分無子細之間、依仰加判、

右衛門權少尉(花押)

〔參考太平記〕卷第十六 後醍醐天皇重臨幸山門事

官軍ノ總大將義貞朝臣、纔ニ六千餘騎ニ討成サレテ、西源院本云、千騎ニテ、ラス討ナサル、云々、歸洛セラレケレハ、京中ノ貴賤上下色ヲ損シテ、周章騷事限ナシ、官軍若戰ニ利ヲ失ハハ、前ノ如ク東坂本へ臨幸成ヘキニ、兼テヨリ議定アリケレハ、五月十九日、西源院本作二十五日、而第十七卷山門攻段、作三十七日、前後不一、按、五月二十五日兵庫合戦、義貞敗歸、因帝幸叡山、而今云十九日幸叡山者、其訛、今川家、毛利家、北條家、南都、天正本、及公卿補任、神皇正統記、梅松論、作三十七日、歷代皇紀、皇年代略記、作二十五日、二說未知孰是、神明鏡作三十九日、者、非也、主上三種ノ神器ヲ先ニ立テ、龍駕ヲソ廻サレケル、淺マシヤ元弘ノ初ニ、公家天下ヲ一統セラレテ、三年ヲ過サルニ此亂又出來テ、四海ノ民安カラス、然レトモ去正月ノ合戦ニ、朝敵忽ニ打負テ、西海ノ浪ニ漂シカハ、是聖德ノ顯ハ

山門臨幸

供奉ノ公卿

ル、處ナリ、今ハヨモ上ヲ犯サント好ミ、亂ヲ起サントスル者ハアラシトコソ覺ヘツルニ、西戎忽ニ襲來テ、一年ノ内ニ二度迄天子都ヲ遷サセ給ヘハ、今ハ日月モ晝夜ヲ照ス事ナク、君臣モ上下ヲ知ヌ世ニ成テ、佛法王法、共ニ滅ヘキ時分ニヤ成ヌラント、人々心ヲ迷ハセリ、サレトモ此春モ山門へ臨幸成テ、程ナク朝敵ヲ對治セラレシカハ、又サル事ヤアラント、定ナキ憑ミニ積習シテ、此度ハ公家ニモ武家ニモ、供奉仕ル者多カリケリ、攝籙ノ臣ハ申ニ及ハス、公卿ニハ、吉田内大臣定房、萬里小路大納言宣房、竹林院大納言公重、大納言、西源院本作左兵衛督、按、公卿補任、建武三年公重猶爲中納言、御子左大納言爲定、中將藤爲通子、爲藤養爲子、大納言、西源院本、及本文第十七卷作、四條中納言隆資、坊城中納言經顯、坊城、本文第十七卷、及諸與本或作勳修寺、按、坊城家、號勳修寺者、始自經顯、據、公卿補任、建武三年、經顯猶爲參議、洞院左衛門督實世、千種宰相中將忠顯、葉室中納言長光、權大納言長隆子也、北條家、西源院、南都本、作、中宮亮、中御門宰相宣明、宰相、北條家、本、作、左中辨、爲、得、殿上ニハ、中院左中將定平、北條家、南都本、作、實平、非也、坊門左大辨清忠、按、公卿補任、至、曆應二年、任、參議、園中將基隆、甘露寺左大辨藤長、中納言藤藤長子、西源院本不出、按、左中將隆有子、金勝院本作、隆忠、恐非也、四條中將隆光、西源院本不出、按、左中將隆有子、金勝院本作、隆忠、恐非也、岡崎右中辨範國、從二位藤範嗣子也、右、今川家、毛利家、金勝院、天正本、作、左、第十七卷也、按、此時左少辨也、還幸段、毛利家本作、右少辨、前後顯顯、中辨、北條家、西源院、南都本、作、式部少輔、按、公卿補任、當、作、一條頭大夫行房、大夫、今川家、毛利家、天正本、作、中右少辨、本文及異本皆誤、將、行房、金勝院本作、行長、非也、

○北條家、西源院、南都本載、近衛關白左大臣經忠、北條家、南都本、作、公忠、非也、洞院右大臣公賢、禪

建武三年、延元元年

六四一



林寺宰相中將有光北條家、南都本、作有公、非也、頭大膳大夫經秀秀、當作季、按、經季、中納言經子也、前官二八、權大納言師基、權中納言季雄、藤公雅、藤冬房、公脩、資親、實任、前參議雅孝、資房、俊氏、源親光、藤光顯、從三位平宗經、正四位下藤宗兼、二位中將良忠按、公卿補任、當作右少將、正三位兼高藤房衡、經康、隆朝、菅原在仲、藤宗緒、伯三位資繼王、此外房高北條家、南都本、載、實康、清房、皇、后宮大夫定親大夫、西源院本作大進、左近中將源具光、勘解由次官光任、辨少將藤實夏、高倉右衛門佐範貞北條家、南都本作範實、持明院中將保國北條家、西源院、南都本作保國、佐々木野少將守賢、室町中將實鄉、○西源院本又載、三條大納言公明、洞院權大納言公泰、德大寺中納言公清、坊門實治、菊亭中宮權大夫實真今出川家譜、北島別當顯家、按、諸本、西國蜂起、先使顯家往、與州、鎮、東國、而義貞西征、據此顯家出、于此者、恐誤也、吉田中納言光繼、按、此時中納言有、堀河藤原、光繼、作吉田、者、恐誤也、三條坊門源宰相中將通冬、日野正三位資明、平惟繼、藤光業、實守、景王、右衛門權佐藤光守、○金勝院本載、堀河中納言光繼、三條侍從泰宗、御子左中將為次中將、前作少將、齋藤、高倉中將範保、一條少將行實、此外衛府諸司、外記史官人、北面有官、無官、瀧口、諸家侍、官僧、官女、醫陰兩道二至、マ、我モ我モト供奉仕ル、武家ノ輩ニハ、新田左中將義貞、子息越後守義顯、脇屋右衛門佐義助、子息式部大輔義治式部、金勝院本作治部、非也、堀口美濃守貞滿、大館左馬助義氏左馬助、金勝院本作、

供奉ノ武家

少輔作大輔、爲得、按、系圖、行義、今川家、毛利家本、作額田掃部助正忠額田、金勝院本作江田、恐非也、而正忠作雅忠、而第十七卷作左氏朝、北條家、西源院、南都、天正本、作氏明、皆非也、

馬助爲額、大江田式部大輔氏經、岩松兵衛藏人義正岩松家譜無義正、金勝院本不載、大江田岩松、鳥山左京亮氏鳥山、諸本前後不詳、詳註、于第十四卷義貞爲節度使、段、可合考、余皆從之、羽川越中守時房毛利家本作助房、金勝院本作秀房、

賴、金勝院本作修理亮義俊、凡鳥山修理、鳥山左京、諸本前後不詳、詳註、于第十四卷義貞爲節度使、段、可合考、余皆從之、

庫助顯氏桃井家譜無顯氏、金勝院本作兵庫直恒、按、此時桃井直常、屬、景氏、不當出此、未知何人、里見大膳亮義益亮、北條家、南都本、作大夫、金勝院本作大膳大夫能信、義益、能信、共不出、里、田中修理亮氏政、亮、金勝院本作進、系圖作千葉介貞胤、宇都宮治部大輔公綱、見家譜、下、彼、之、、

同美濃將監泰藤金勝院本、將監、上有、左、近、字、、狩野將監貞綱第十七卷、本文西源院金勝院本作公德、西源院本、作公經、非也、

河野備後守通治備後、今川家、毛利家本、作備中、按、第七卷河野舉義兵、段、疑者多矣、註、于第六卷、得能備中守通益、通倫、皆相繼、熱田大官司以下、至此、西源院本不載、、

武田甲斐守盛正金勝院本作大膳大夫信貞、武田家譜無盛正、而宗光子有信貞、建武武者所、云々、、小笠原藏人政道今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、藏人上有、二十郎字、金勝院本作左近藏人長信、爲得、小笠原家譜無、、

仁科信濃守氏重金勝院本作重貞、天正本作重氏、而第十七卷、本文作重貞、政道、長信、政宗子也、、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作重貞、亦皆相繼、

春日部治部少輔時賢今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、少作大、金勝院本、春日部、按、諸本第十七卷、春日部、左近藏人家譜、可合見、、

名和伯耆守長年、同太郎判官長生金勝院本、不出、、今木新藏人範家、頓宮六郎忠氏、

○金勝院本載、堀口左馬頭貞義、舍弟大藏大輔貞政、一井兵部大輔義匡、山名伊豆守忠家伊豆守、第十七卷、諸本、作兵部助、毛利家本、又載、山名伊豆守、而云、名時氏、可疑、恐訛乎、、一條駿河守顯行、土岐出羽守賴直、江戶治部少輔景氏、菊地肥後守武重、松浦肥前守守定、三尾谷遠江前司入道道深、南部甲

建武三年、延元元年



斐守爲重、伊藤藏人家貞、長江八郎左衛門入道行嚴、同新八幸喬、足立安藝守遠宣、星野大藏大輔永能、秋月備中守教宣、本間孫四郎重氏、原田大藏大輔秋規、兒島刑部少輔公衡、南條遠江守宗倫、賀茂次郎左衛門、久我織部佑利、廣多田攝津守滿雄、山本雅樂助義右、宗太郎左衛門少尉、頼宮左衛門少尉、忠明、○今川家、毛利家、西源院、北條家、南都、天正本載、土居左近將監、土居、今川家、西源院、天正本、作「土居」是等ヲ宗徒ノ侍トシテ、其勢都合六萬餘騎、六萬、今川家本作二萬、毛利家本作五萬、天正本作三萬、金勝院本作六萬五千、鳳輦ノ前後ニ打違テ、今路越ニソ落行給ヒケル、

○北條家、西源院、南都本云、卿相雲客、少々ハ衣冠直衣ニ柏夾ニテ、供奉スル人モアリ、其外ノ卿相雲客、大略武具ヲ著シケリ、況諸家ノ侍、衛府官、檢非違使等ハ、各甲冑ヲソ固メケル、供奉ニ加ラサル人々迄、我モ我モト追追ニ參集ケレハ、山上坂本充滿シテ、公家武家杏ノ子ヲ打テ、混雜シケレハ、旅宿ノ論、兵糧ノ費、朝夕ニ喧シクソ聞ヘケル、云云、

持明院殿遷幸東寺事

持明院法皇、按、持明院法皇者、後伏見帝也、建武三年四月六日崩、同年五月後醍醐帝幸叡山、由、此見之、今載法皇者誤也、本院花園新院春宮ニ至迄、悉ク皆山門へ御幸成進ラスヘキ由、大田判官全職、路次ノ奉行トシテ供奉仕タルニ、

本院止リ給フ

本院ハ、當年、新院ニ下敷之、按、歷代皇紀、建武三年、稱「新院」者、光嚴帝也、本院蓋稱「花園帝」也、按、賜尊氏院宣一者、此見之、本文所謂本院者、蓋新院之誤也、兼テヨリ、尊氏ニ院宣ヲ成下サレタリシカハ、宣者、後伏見帝也、今云本院、二說共非也、詳註尊氏上洛段、可合見一、二度御治世ノ事ヤ有ンスラント思召テ、北白河ノ邊ヨリ、俄ニ御不豫ノ事有トテ、御輿ヲ法勝寺塔前ニ昇居サセテ、態時ヲソ移サレケル、去程ニ敵既ニ京中ニ入亂レヌト見ヘテ、兵火四方ニ盛ナリ、全職是ヲ見テ、サノミハイツマテカ、暗然トシテ待申ヘキナレハ、供奉ノ人々ニ、急キ山門へ成進ラスヘシト申置テ、新院、法皇、春宮計ヲ、先東坂本ヘソ御幸成進ラセケル、本院ハ、全職カ立歸ル事モヤ有ンスラント、恐シク思召レケレハ、日野中納言資名、按、資名、元弘三年既出家、當有「入道」字、殿上人ニハ、三條中將實繼、內大臣藤公秀子、計ヲ供奉ノ人トシテ、急東寺ヘソ成奉リケル、將軍ナノメナラス悦テ、東寺ノ本堂ヲ皇居ト定ラル、久我内大臣ヲ始トシテ、落留給ヘル卿相雲客參ラレシカハ、即皇統ヲ立ラル、是ソハヤ尊氏運ヲ開カルヘキ瑞ナリケル、

五月二十九日 賊徒仁木頼章、今川頼貞、兵ヲ率キテ入京ス。是日、直義、亦入京ス。

〔梅松論〕（上文ハ二十七、日ノ條ニ收ム）洛中へは先丹波より仁木兵部大輔頼章、今川駿河守頼貞、



丹後、但馬、兩國の軍勢を相隨て、各錦の御旗を先立て、數千騎洛中へ打入、將軍は八幡山の上に御座有て、下御所(二十九日)は五月晦日、御入京ありしに、去春九州御下向の時捨奉りし輩多く降參す、今度供奉忠功の仁等列座のとき、忠不忠たる間顔喜憂異也、

(下文六月五日條ニ收ム)

〔古文書淺草文〕(二十四日ノ) 〔忽那文書〕(伊豫 六月五日ノ)

六月三日 尊氏、進ミテ八幡ニ次ス。是日、光嚴院及ビ豐仁親王ヲ八幡ニ迎へ奉ル。是日、亦、尊氏、義貞等誅伐ノ院宣ヲ名トシテ本郷泰光ノ兵ヲ召ス。〔毛利文書〕ノ百四十九(六月十四日) 〔梅松論〕(五月二十九日)

〔公卿補任〕十三 去日西國軍旅到山崎寶寺、六月三日、新院(光嚴)親王(豐仁)入御八幡、東軍申行之、奉圍繞、

〔皇年代略記〕光嚴 六月三日、臨幸八幡、

〔古文書淺草文〕本郷大和守 六、三、四、六、八、

新田義貞以下凶徒等誅伐事、所被下院宣也、早相催若狹國地頭御家人等、不日馳參、可致軍忠之狀如件、

建武三年六月三日

御氏空 御判

(本郷) 美作次郎藏人殿 泰光

六月五日 足利軍、東西坂本ヨリ叡山ニ攻メ寄ス。千種忠顯、戰死ス。義貞、敵ヲ水呑峠ニ擊破シ、義助、亦、東坂本ノ敵ヲ擊退ス。攻防連戰シテ二十日ニ至ル。

〔梅松論〕(上文ハ五月二十日ノ條ニ收ム) 去程に山上を責らるべきとて、六月五日、細川(イナシ)の入々先

陳として西坂本より合戰ヲを初、皆歩行イナシにて雲母坂までぞ責付たりし、此時千種殿討死す、敵は大嶽の上に陳をとる、御方は山の中のしげみを過て支へたり、下御所大將として、御陳は赤山の社の前也、山上をば三手にてぞ責られし、今路越をば三井寺法師イナシ、旬イナシ、大手の雲母坂は細川の人々四國勢并惣軍勢、横川通り篠岸は太宰少貳頼尙、九國の輩發向して、毎日合戰有けるに、御方の戦利に見えし時は、三井寺法師松明を用意す、是は山門放火の爲かとぞ覺えし、淺間イナシしかりし夏イナシ共也、去程に六月廿日、今道越より御方の合戰打負て、三手の御方同道イナシ坂本に追下さる、爰に高豐前守以下數十人、山上にして討死す、此上は赤山は御陳無益なりとて急御勢洛中に引退く、大將下御所は三條坊門の御所に御座あり、將軍は東寺を城郭にかまへ、皇居として警固申されけり、去春兩將浮勢にて河原に御扣有しゆへに軍勢の

六月二十日 寄手敗  
北山重戰  
高師重戰  
死  
東寺皇居

直義西坂本ヲ攻ム  
千種忠顯戰死ス  
赤山社今路越  
雲母坂  
横川通篠岸

建武三年、延元元年

六四七



心そろはず、今度は縦令戰難義に及といふとも、何れの輩か東寺を捨奉るべきとぞ沙汰有ける、軍勢は洛中に充滿して狼藉不可禦（下文ハ六月三十日ノ條ニ收ム）

〔武家年代記〕裏書 自同（六月）五日至廿日、被攻山門、

〔田所文書〕（五月二十七日）

〔改姓〕（五月二十七日） 築山河野家之譜 △六、三、四七、一、

被聞食畢、御判

建武三年六月五日

於比叡山大嶽南尾合戰、分捕生捕并手負責檢事、伊豫國軍勢、

（以下十七名列）

一同六日合戰（中略） 一同十一日合戰（中略）

右實檢注進如件、

建武三年六月十三日

〔天野文書〕前田侯爵本 △六、三、四七、三、

天野安藝三郎遠政申、去月五日合戰事、於西坂本東嶽、懸先陣致軍忠畢、仍同時合戰間、鹽谷四郎、葛山孫六、庄民部房等令見知畢、次六日合戰、若黨古田二郎討死畢、見知

（河野通憲） 沙彌善惠

南尾合戰

西坂本東嶽ニ戰フ

吉見頼隆  
無動寺越  
中尾ニ向フ

六月晦日  
只須河原  
合戰

四月廿六日  
長門府ニ  
馳參ス

證人島津兵庫允、三浦佐原六郎、山内又三郎令存知者也、將又自身同九日被疵之條、細河卿阿闍梨御房、定禪、宍戸四郎見知畢、其上於執事御方（高師）被實檢畢、就中自五日、至于廿日、晝夜抽忠勤次第、於軍陣無其隱者也、然早賜御證判、爲備後證之狀如件、（建武三年七月日）  
（附、高師冬證判）

〔忽那文書〕乾 △六、三、四六、三、

伊豫國忽那次郎左衛門尉重清申軍忠事、  
右自當年建武五月上旬、吉見參河三郎殿氏付著到、同廿八日追落洛中、同六月五六兩日合戰、被差遣當御手軍奉行五井右衛門尉間、軍奉行相共抽軍忠、同七日御向無動寺越中尾間、重清馳向之、同九月十一日十九日廿日合戰、捨身命每度致散々戰畢、同晦日合戰、於只須河原令分捕之條、同時合戰輩、同國御家人野間三郎左衛門尉、新屋太郎左衛門尉令見知之上者、下賜御證判、爲備後證、恐々言上如件、（建武三年七月日附、吉見頼隆證判）

〔國史考〕 △六、三、二七、九、

石見國福光上村地頭御神本三郎太郎藤原兼繼申、去四月廿六日、馳參長門府、御上洛之御共仕、於兵庫島抽軍忠、且美作國野介次郎兵衛尉伴合戰之間、見及之、次去月

建武三年、延元元年



高豐前守  
六月五日  
西坂本ニ  
戰フ

石川義光  
西坂本地  
藏堂前ニ  
戰死ス

西坂本中  
尾合戰

新田義貞公篇

六五〇

五日、馳向叡山西坂下、屬高豐前守手、迄同八日晝夜合戰、就中同八日兼繼被疵、左殿是亦小笠原野三郎、小笠原孫五郎同時合戰之間、見及之、仍栖田大貳房、并中林次郎入道加疵實檢畢、次同晦日馳參八條坊門猪熊、對御敵伯耆守長年、致所々合戰、於押小路猪熊、討取伯耆守(他本ニハ、皆守ノ字ナシ)三郎右衛門尉(長年一族)、且備後國三吉孫(他本孫字ナシ)三郎以下一族伴合戰之間、知及之、重合戰分取者、於賀茂河原高新左衛門尉、并中林次郎入道令見知上、被遂御實檢畢、然早下賜御證判、可備向後龜鏡候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、(本文誤脱アリ、合古文書寫、武家)(建武三年七月日)(雲箋、徵古雜抄ヲ以テ補訂ス)(附、高師直證判)

〔石川文書〕(乾) 六、三、四七三、(盤城)

石河七郎義光打死、若黨屋葺彌平二頼道申軍忠事、  
右義光去年八月以來、度々御合戰致忠勤、及鎮西御共仕、湊河合戰盡忠、去六月五日、山門西坂本御合戰爲御共、於地藏堂前、右義光打死仕了、仍河津彦六以下所令存知候也、然者早賜御證判、欲備子孫等明鏡、(下略、建武三年七月日)(附、高師直證判)

〔小代文書〕(肥後) 六、三、四七六、

武藏國小代八郎次郎重峯申軍忠事、  
右去六月五日、於西坂本致合戰之忠畢、自同七日至廿日、於中尾致軍忠之間、高新

左衛門□殿、御證分明也、就中去六月晦日、於吉田河原屬執事御手、一族等相共致合戰之忠之條、小幡右衛門尉令存知者也、然者早賜御證判、爲備末代龜鏡、仍言上如件、(建武三年七月日)(附、高師直證判)

武藏國小代八郎次郎重峯申軍忠事、

右自去六月七日至于同廿日、於西坂中尾、致日□□宿直畢、就中十九日之合戰之時、一族相共致至極軍忠之上者、早賜御證判、爲備向後龜鏡、恐□言上如件、(本文龜鏡ニ、裏判)(建武三年七月日)(附、高師直證判)

〔田代文書〕(豐前) 六、三、四七八、

田代市若丸(顯綱)申、奉屬當御手、於西坂大手、致軍忠之間、今月十九日、被付先懸御著到、加人數令先懸、致合戰忠勤之處、若黨爲綱被疵、半死半生也、即御檢知之上者、早下賜御證判、可備後證旨相存候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、(建武三年六月日)(附、細川顯氏證判)

〔鷺見家譜〕 六、三、四七九、

美濃國上郡御家人鷺見藤三郎忠保、馳參洲侯、(安八郡)土岐左近藏人殿(頼春)屬御手、今月十四日、森山(近江野洲郡)合戰、同十六日宇治罷向候畢、同十七日十九日、西坂本中尾

建武三年延元元年

六五一

土岐頼春  
六月十日  
近江森  
山治ヨリ  
西坂本ニ  
迂回ス



新田義貞公篇

六五二

致合戰忠節候畢、然者爲後證、下賜御一見狀(寫渡力)、增弓箭勇、言上如件(建武三年六月廿五日、附土岐賴泰力證判)

〔詫磨文書〕(豐後) △六三、四八二

古今路越、并無動寺越合戰事、自六月六日至同十一日、致軍忠之由、武田八郎重頼令注進畢、尤神妙、於恩賞者、追可有其沙汰之狀如件

(直書)  
〔花押〕

建武三年七月廿八日

詫磨五郎次郎殿

〔山内首藤文書〕(去年十二月十一日、日ノ條ニ收ム) 〔入江文書〕(三月十一日、二條ニ收ム) 〔古文書〕(淺野文、庫本)

〔岡本文書〕(五月二十四日、日條ニ收ム)

△六三、四七四

(華氏)  
〔花押〕

陸奥國岡本觀勝房良圓軍忠事、

右良圓、去月五日屬御手、馳向西坂本西(尾取)□□忠責上之刻、於坂中地藏堂上、御敵返合之處、御方軍勢引□之間、良圓殘留天捨一命防戰、追歸御敵畢、此條同所合戰之間、白岩彦四郎、鳥羽左衛門二郎令見知了、隨而自同八日至于同十九日、依爲要害之地、承大將御陣後山尾令警固了、同晦日合戰之時、於中御門鳥丸討合敵、乍被疵手、即令

討取之畢、此條池上藤内左衛門尉結城七郎左衛門尉、同所合戰之間、令見知者也、其上於頭殿御前、預御見知了、如此軍忠無其隱之上者、賜御證判、爲備向後龜鏡、目安如件

(高田冬)  
〔花押〕

建武三年七月日

〔萩藩閔閱錄〕(百廿四ノ一、平賀九郎兵衛) △六三、四七五

平賀孫四郎共兼、去六月五日屬當御手、馳向西坂本、責上中尾抽軍忠、奪取御敵旗、討取伯耆守長年一族杵築太郎候畢、此段同時合戰大和六郎左衛門尉、小早川又次郎令見知候畢、次同六日、共兼一族松葉七郎被疵、(射疵)旗差十郎太郎同被疵畢、此條土岐宮内卿(宮内卿律)、令見知畢、是等次第實檢奉行(執事)、須田大貳房、并二階堂信濃入道行朝、代大部又太郎、羽尾六郎加見知、被入實檢帳候畢、然者賜御判、可備後證候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言(建武三年七月六日附藤原共兼差出高師直力證判)

〔萩藩閔閱錄〕(百十三、神代六左衛門) △六三、四八一

周防國神代彦五郎兼治、去六月六日屬當御手、馳向無動寺越、追伐御敵、構一陣致警固日夜之所、同十一日朝、敵責下之間、兼治捨身命、登矢倉終日致合戰、追歸御敵訖、次同廿日、東坂本桃井修理亮殿(義盛)、仁木彌太郎殿(彌太郎ハ孫太郎ニシテ、義有ナルベシ)、御陣破而、御敵既

建武三年延元元年

六五三



官軍、廿七日三條坊門ヲ夜討ス、西坂本ニ退ク

今路越山

東坂本ニ

新田義貞公篇

六五四

廿餘町責上之間、兼治自身差旗一族相共馳向而、追落御敵、奉入桃井修理亮殿本陣、次廿七日夜、御敵爲夜討、押寄三條坊門京極、懸矢倉火之間、一族相共馳向彼所、打消矢倉火畢、次同晦日御敵西坂下落下之間、馳向法成寺、懸先致散々合戰、追懸多々須河原西坂木、追入御敵本在所畢、及同晚馳向、入于比叡山、追落凶徒畢、仍每度云軍忠云日夜奉公、御見知之上者、下賜御判、可備後證候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言(建武三年七月廿三日附、源兼治差出某證判)

〔古文章〕(碩田叢、△六、三、四八二)

飯尾華人佑吉連申軍忠事、今月五日、一族相(其力)可發向今路越山之由被仰出之間、三島五郎

尉康雄相共懸先、責上古今路越峰、令勤仕役所、迄于同廿日、度々致軍忠之條御見知之上者、早爲後證、可預御判之由相存候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言(建武三年六月日附)

〔土佐國蠹簡集殘篇〕(三十日ノ、條ニ收ム) 〔三寶院文書〕(四月十四日、條ニ收ム)

〔廣峰文書〕(乾、△六、三、四八三、播磨)

今川駿河守殿御一見狀案

廣峰又太郎入道昌俊(貞長)申軍忠事、今月五日發向山門東坂本、致度々軍功、同廿日

戰フ

式部卿親王

山門追手ニ向フ賊勢

討捕御敵沼田次郎之處、昌俊被疵畢、此條一所合戰之間、周防彌四郎、秋元新左衛門尉等令見知者也、然者賜御證判、爲浴恩賞、言上如件(建武三年六月廿八日附、今川頼貞證判)

〔齒長寺緣起〕(伊豫、六月、上文ニ建武五年トア、レトモ三年ノ誤ナリ) 四日(五日ノ誤)、京勢寄山門、因之宮方人

人月卿雲客以下、千葉、宇都宮、諸國受領、大將軍者式部卿宮(宗良)、侍大將者新田左中將、被立皇帝御旗於大嶽赤地錦以金鏤、今上皇帝、自志賀辛崎、陣々非一所、今路古路、千葉介五千餘騎固菊尾、西國勢大嶽、召具東國軍勢、公家上藤新田一族、至西塔尾張陣、橫川篠々峯被向宇都宮、山々谷々羽向、張魚鱗鶴翼陣、連樊噲張良策、日々合戰蒙疵、殆命族不知數

〔參考太平記〕(卷第十七) 山門攻附千種忠顯坊門正忠討死并日吉神託事

主上二度山門へ臨幸ナリシカハ、三千ノ衆徒、去春ノ勝軍ニ習テ、貳心ナク君ヲ擁護シ奉リ、北國奥州ノ勢ヲ待由聞へクレハ、將軍左馬頭高上杉ノ人々、東寺ニ會合シテ合戰ノ評定アリ、事延引シテ義貞ニ勢屬ナハ叶フマシ、勢イマタ微ナルニ乗テ、山門ヲ攻ヘシトテ、六月二日(金勝院本、作四日)、四方ノ手分ヲ定テ、(金勝院本云、二條河原ニシテ著到ヲ附ラル、云々)、追手五十萬騎ノ勢ヲ(五十、毛利家、天、正本、作三十二)、山門へ差向ラル、追手ニハ、吉良、石堂、澁川、島山ヲ大將トシテ、其勢五萬餘騎、(五萬、毛利家本作三萬、北條家、南都本、作十五萬、金勝院本及神明鏡、作三十二萬)、大津松本東西ノ宿、園城寺燒

建武三年延元元年

六五五